

324-3991



1200501380577

324  
991



始







善智沼赤 學習邊山

著 共

義 講 證 信 行 教

卷の證卷の信



京 東

房 書 一 第





## 改版の序

324  
399x

【教行信證講義】が上梓されてから二十餘年の歳月を閉しましたが、其の間、本典に關する研究の進歩等から内容に於いても幾多の訂正を必要とするものあり、時期を見て訂正改版をと志してからも數年を過しましたが、茲に因縁熟して、知友第一書房主人の非常なる好意によりて、驚くべき簡易普及の申出でに接し、平生の宿志を果し得ることを喜ぶ次第であります。

【教行信證】は淨土眞宗開闢の根本寶典（略して本典といふ）でありまして、數百年來、東西本願寺の學匠達が心血を注いで講鑽し來つたものでありますが、今回の好事縁によりて該本典が高い象牙の塔を出で、廣く一般大衆の領野に進出するやうになりますことは、決して著者の喜び丈けでないと存じます。茲に改めて長谷川第一書房主人に深い感謝を捧げる次第であります。

唯今回の改版に關して版本校合の除去、本典研究書目の訂正、又は二三内容に於いて改竄を試みたのみにて、其他大體に亘りて舊態を改め得ざりしことは遺憾の次第であります。此書の性質上かくすることが妥當であると考へたからで大方諸賢の御容赦を請ふ次第であります。唯、本文の校正に就いては特に嚴密の注意を拂ひ、定本の矜持を持つつもりであります。

昭和十三年九月末日

著者識



## 第二卷（信の巻 證の巻）序

どうしたら此のどす黒い因果の束縛から脱れることが出来るか、どうしたら自由無障礙の天地に蘇ることが出来るであらうかとは、遠い昔から、自分といふものに目醒めた人達によりて繰り返された言葉であると思ひます。そして其の人達は人生のあらゆるものを賭して、其の一點に向つて進みました。これは決して單なる奮發心や、外から注ぎ込まれた氣まぐれの心ではなく、自分といふものの心の奥底から不可抗の力をもつて湧きあがる心であつたのであります。

現代の日本は、あらゆる意味に於いて、此の自分といふものに目覺めて來たやうに思はれます。そして人間の心と心が、深い層の上に、烈しく接觸するやうになりました。これは少しなりとも自分といふものの深みに眼を注ぐ人に取りては堪へ難い苦痛であると思ひます。古にありては、傳習的の道徳や何かの浅い思想位で落付き得た人でも、今日は中々に左様にはゆかぬやうになり、もつと深い根柢の力を得なければ満足することが出来ないやうになつたのであります。私達がかやうな強迫的な周圍に生れ合はせたといふことは、一寸考へれば不幸のやうであります。併し眞實に自分のものでない妥協の天地に居ることの出来ないといふことは、非常な靈的意味をもつた助縁と思ひます。

このやうな渦の中へ、親鸞聖人の此の大著、殊に六軸中の要樞ともいふべき信證二巻の大船を浮べ出すといふ

ことに就いて、私達は一種いふべからざる愉悅を覺えずにはをられませぬ。

聖人の宗教は、自分といふものの上皮を引き破り引きちぎりて底の底を見た時に生れた光りの生命であります。聖人はこれを一念の信と申してをられます。この一念の所に、横に五趣八難の道を超えて、現生に不可思議の宗教的利益を獲るのであります。此の心、高遠に法界に周遍し、此の心、無限にして三世を攝とらむ。私達はこの時、因果の束縛を脱して無障礙の天地に蘇ることを得るのであります。その心とは何んであるか。疑ふべからざる此の現實の心に即したる不可思議の喜びであります。自由心であります。樹と樹と擦れ合うて生じたる火が、その産みの樹と基礎を一つにし、活動を一つにしてゐるやうに、聖人のこの信念は、不可思議に開發せられたる聖人の心其のものであります。

聖人は此の神祕不可思議の生命を、各方面より表現してをられます。行信交際、三心一心、佛凡一體、眞實證の意義、内容等は、殊に高調せられたる靈の歌であると思ひます。

どうか靜かに我に返りて、此の不思議の流れに參與いたしませう。この道は智愚、老少、男女、貴賤の差別を見ない意味に於いて萬人の宗教であり、それが一人々々の深い主觀に根ざしたる意味に於いて全く我一人の宗教であります。そして夫が後天的の努力によりて建設せらるべきものでなく、全く不可思議の直觀による意味に於いて天才の宗教、利那超越の宗教であります。故に聖人は之を他力廻向の信樂と申してをられます。教行信證の魂は、聖人の魂であります、そして如來の心であります。そして夫はやがて私達の魂でなければなりません。そこに新しい天地は生れ、光の波は空に擴がり、地を潜り、天地は靈の樂音に打ち慄へます。（大正三年六月九日）



教行信證講義目次

信の卷・證の卷

序 講

|     |         |     |
|-----|---------|-----|
| 第一章 | 信證兩卷の使命 | 五二七 |
| 第二章 | 「信卷」の要義 | 五三五 |

本 講

第一編 別 序

|     |       |     |
|-----|-------|-----|
| 第一章 | 題號と選號 | 五四三 |
| 第二章 | 二尊の大悲 | 五四四 |
| 第三章 | 沈迷の二機 | 五四八 |



第四章 佛説と論釋・・・・・・・・・・・・・・・・五五五  
 第五章 總結・・・・・・・・・・・・・・・・五五八

第二編 眞實信 (信卷)

第一章 解題・・・・・・・・・・・・・・・・五五九  
 第一節 題號・・・・・・・・・・・・・・・・五五九  
 第二節 選號・・・・・・・・・・・・・・・・五六一  
 第二章 標學・・・・・・・・・・・・・・・・五六一  
 第三章 眞實信・・・・・・・・・・・・・・・・五六五  
 第一節 略顯・・・・・・・・・・・・・・・・五六五  
 第一項 總標・・・・・・・・・・・・・・・・五六五  
 第二項 正顯・・・・・・・・・・・・・・・・五六六  
 第一科 大信の相・・・・・・・・・・・・・・・・五六六  
 第二科 大信の出據・・・・・・・・・・・・・・・・五六七  
 第三科 十八願名・・・・・・・・・・・・・・・・五六七  
 第四科 大信の難得・・・・・・・・・・・・・・・・五六八  
 第五科 大信の利益・・・・・・・・・・・・・・・・五六八  
 第二節 經文證・・・・・・・・・・・・・・・・五六八

第一項 因顯文・・・・・・・・・・・・・・・・五八六  
 第一科 『大無量壽經』の文・・・・・・・・五八六  
 第二科 『無量壽如來會』の文・・・・・・・・五八七  
 第二項 成就文・・・・・・・・・・・・・・・・五八八  
 第一科 『大無量壽經』の文・・・・・・・・五八八  
 第二科 『無量壽如來會』の文・・・・・・・・五九二  
 第三項 獲信利益の文・・・・・・・・・・五九五  
 第一科 『大無量壽經』の文・・・・・・・・五九五  
 第二科 『無量壽如來會』の文・・・・・・・・五九五  
 第三節 釋文證・・・・・・・・・・・・・・・・五九九  
 第一項 曇鸞大師の釋文・・・・・・・・六〇〇  
 第一科 『論註』の文・・・・・・・・六〇〇  
 第二科 『讚阿彌陀佛偈』の文・・・・六一三  
 第二項 善導大師の釋文・・・・・・・・六一四  
 第一科 『定善義』の文・・・・・・・・六一四  
 第二科 『序文義』の文・・・・・・・・六一五  
 第三科 『散善義』の文・・・・・・・・六一六  
 第四科 『般舟讚』の文・・・・・・・・六八九  
 第五科 『往生禮讚』の文・・・・・・・・六八九  
 第三項 源信和尙の釋文・・・・・・・・六九二



第一科 菩提心の文 . . . . . 六九二

第二科 攝取利益の文 . . . . . 六九四

第四節 總結 . . . . . 六九六

第四章 三心一心問答 . . . . . 六九八

第一節 問 . . . . . 六九八

第二節 答 . . . . . 六九九

第一項 略答 . . . . . 六九九

第二項 字訓 . . . . . 七〇二

第三項 字訓融會 . . . . . 七〇七

第四項 結釋 . . . . . 七一三

第五章 三心別相問答 . . . . . 七一三

第一節 問 . . . . . 七一三

第二節 至心 . . . . . 七一四

第一項 至心の體相 . . . . . 七二五

第二項 經文證 . . . . . 七二五

第一科 『大無量壽經』の文 . . . . . 七二八

第二科 『無量壽如來會』の文 . . . . . 七三〇

第三項 釋文證 . . . . . 七三二

第一科 『散善義』の文 . . . . . 七三二

第四項 結釋 . . . . . 七三四

第一科 正結 . . . . . 七三六

第二科 釋文 . . . . . 七三六

第三節 信樂 . . . . . 七三七

第一項 信樂の體相 . . . . . 七三七

第二項 經文證 . . . . . 七四〇

第一科 『大無量壽經』の文 . . . . . 七四〇

第二科 『無量壽如來會』の文 . . . . . 七四一

第三科 『涅槃經』の文 . . . . . 七四一

第四科 『華嚴經』の文 . . . . . 七五〇

第三項 釋文證 . . . . . 七五八

第一科 曇鸞大師の釋文 . . . . . 七五八

第四節 欲生 . . . . . 七五九

第一項 欲生の體相 . . . . . 七五九

第二項 經文證 . . . . . 七六一

第一科 『大無量壽經』の文 . . . . . 七六一

第二科 『無量壽如來會』の文 . . . . . 七六三

第三項 釋文證 . . . . . 七六四

第一科 曇鸞大師の釋文 . . . . . 七六四

第二科 善導大師の釋文 . . . . . 七六七

第四項 助釋 . . . . . 七六八



第一科 私釋 . . . . . 七六八

第二科 『玄義分』等の三文 . . . . . 七七一

第六章 問答結歸 . . . . . 七七五

第一節 信樂結歸釋 . . . . . 七七五

第一項 三信を會す . . . . . 七七五

第二項 信心名號關係 . . . . . 七七六

第三項 信德讚嘆 . . . . . 七八〇

第二節 菩提心釋 . . . . . 七八四

第一項 二雙四重の判釋 . . . . . 七八四

第二項 道俗勸誡 . . . . . 七九〇

第三項 横超菩提心の引文 . . . . . 七九一

第一科 『論註』の文 . . . . . 七九一

第二科 元照律師の釋文 . . . . . 七九三

第三科 用欽師の釋文 . . . . . 七九五

第四科 戒度師の釋文 . . . . . 七九五

第五科 善月師の釋文 . . . . . 七九七

第三節 成就の一念結歸釋 . . . . . 七九九

第一項 總 標 . . . . . 八〇〇

第二項 經文證 . . . . . 八〇四

第一科 『大本』の文 . . . . . 八〇四

第二科 『涅槃經』の文 . . . . . 八〇六

第三科 善導大師の文 . . . . . 八〇七

第三項 經釋文私釋 . . . . . 八〇八

第一科 正 釋 . . . . . 八〇八

第二科 獲信の利益 . . . . . 八一二

第三科 專念專心の釋文 . . . . . 八一九

第四項 轉 釋 . . . . . 八一九

第一科 正轉釋 . . . . . 八一九

第二科 佛道正因釋 . . . . . 八二三

第四節 三心一心總結 . . . . . 八三八

第一項 三心結釋 . . . . . 八三八

第二項 菩提心釋 . . . . . 八三九

第七章 重釋要義 . . . . . 八四一

第一節 正定聚機 . . . . . 八四一

第一項 機超釋 . . . . . 八四二

第一科 義 釋 . . . . . 八四二

第二科 經文證 . . . . . 八四五

第二項 斷四流釋 . . . . . 八四八

第一科 義 釋 . . . . . 八四八

第二科 經文證 . . . . . 八四九



第三科 釋文證 . . . . . 八五一

第三項 眞佛弟子 . . . . . 八五二

第一科 正釋 . . . . . 八五二

第二科 經文證 . . . . . 八五六

第三科 正依釋文證 . . . . . 八六一

第四科 傍依釋文證 . . . . . 八八一

第五科 結釋 . . . . . 八八六

第六科 假偽の佛弟子 . . . . . 八九一

第七科 慚愧表白 . . . . . 八九四

第二節 抑正文釋 . . . . . 八九七

第一項 離治機 . . . . . 八九七

第一科 『涅槃經』「現病品」の文 . . . . . 八九七

第二科 「梵行品」の文 . . . . . 九〇二

第三科 「梵行品」の文 . . . . . 九二六

第四科 「迦葉品」の文 . . . . . 九五四

第二項 私釋 . . . . . 九六六

第三項 抑正文釋 . . . . . 九六七

第一科 問 . . . . . 九六八

第二科 曇鸞善導二師の釋答 . . . . . 九六九

第三科 五逆釋義 . . . . . 九八八

第三編 眞實證 (證卷)

第一章 解題 . . . . . 九九三

第一節 題號 . . . . . 九九三

第二節 選號 . . . . . 九九四

第二章 標舉 . . . . . 九九四

第三章 眞實證 . . . . . 九九九

第一節 總標 . . . . . 九九九

第二節 釋義 . . . . . 一〇〇一

第一項 眞實證の出處 . . . . . 一〇〇一

第二項 十一願名 . . . . . 一〇〇二

第三項 現當兩益 . . . . . 一〇〇二

第四項 主伴同證 . . . . . 一〇〇七

第三節 經文證 . . . . . 一〇〇九

第一項 本願文 . . . . . 一〇一〇

第一科 『大無量壽經』の文 . . . . . 一〇一〇

第二科 『無量壽如來會』の文 . . . . . 一〇一二

第二項 成就文 . . . . . 一〇一三



第一科 『大無量壽經』の文 . . . . . 一〇一三

第二科 『無量壽如來會』の文 . . . . . 一〇一九

第四節 釋文證 . . . . . 一〇一九

第一項 曇鸞大師の釋文 . . . . . 一〇二〇

第一科 妙聲功德の文 . . . . . 一〇二〇

第二科 主功德の文 . . . . . 一〇二二

第三科 眷族功德の文 . . . . . 一〇二三

第四科 大義門功德の文 . . . . . 一〇二六

第五科 清淨功德の文 . . . . . 一〇二七

第二項 道綽禪師の釋文 . . . . . 一〇二九

第三項 善導大師の釋文 . . . . . 一〇三一

第一科 『玄義分』の文 . . . . . 一〇三一

第二科 『定善義』の文 . . . . . 一〇三二

第四章 結 釋 . . . . . 一〇三四

第五章 還相廻向 . . . . . 一〇三五

第一節 略 顯 . . . . . 一〇三六

第一項 總 標 . . . . . 一〇三六

第二項 還相廻向の出據 . . . . . 一〇三六

第三項 願 名 . . . . . 一〇三七

第二節 引 文 . . . . . 一〇三八

第一項 經 文 . . . . . 一〇三八

第二項 論 文 . . . . . 一〇三八

第三項 釋 文 . . . . . 一〇四二

第一科 起觀生信の文 . . . . . 一〇四二

第二科 觀行體相の文 . . . . . 一〇四三

第三科 淨入願心の文 . . . . . 一〇六四

第四科 善巧攝化の文 . . . . . 一〇七六

第五科 離善提障 . . . . . 一〇八四

第六科 願菩提門の文 . . . . . 一〇八六

第七科 名義攝對の文 . . . . . 一〇八八

第八科 願事成就の文 . . . . . 一〇九四

第九科 利行滿足の文 . . . . . 一〇九六

第三節 總結の文 . . . . . 一一〇四



第  
二

證 信

卷 卷



# 序 講

## 第一章 信證兩卷の使命

一、「行卷」に於て鞘を拂ひたる名號の利劍は、「信卷」に來りて、初めて吾等久遠劫來の妄心の止めを刺し、「證卷」に於て其の大益を圓現すに至る。吾等は本卷に來りて、殊に心を一にして聖人の御教へに接せねばならぬ。

從來、修道の形式としては一般に教、理、行、果の四法を須ゐた。吾が聖人も亦これに準じて本典の外題に教、行證文類と標せられた。即ち教理の二法は教に當り、行果はこの行證に相當するのである。この表面丈を見れば、自力修行の教へと少しも異なる處はないやうであるが、其の形式に盛られたる内容は全く從來の佛教に大革命を來すべき火藥が噴出せられたのである。それは既に「教行」二卷に於て、明示せられた所であるが、今やその火藥の爆發とも云ふべき「教行」二卷の外題は、實に「信卷」に於て見ねばならぬ。聖人が態と外題に表はすことを避け給ひし本卷は實に聖人の賜であつた。吾等は今や聖人の御胸に傾入りつつあるのである。

二、聖人は何故に直截簡明に絶對他力教の眞意を表示せる別序を、特に「信卷」に掲げて、教行證のほか信を力説し給うたのであるか。これ實に大いなる問題である。この問題の及す範圍は（一）從來の自力教を根本的に覆し、（二）當時の淨土教の邪義を徹底的に摧破する所まで行かねばならぬ。



(一) 自力聖道教の教ふる所は、教行證が主要であつて、信は極めて軽い。即ち佛の教へを信じて、修行し入證するのである。教へを信ずることは、自力修行の人達には極めて容易なことであるが、其修行が六ヶ敷い。従つて入證し難いのである。故に彼等の最も力を入れて説く所も又聞く所も、教行證の三法である。教の分齊を聞き、その教への如く修行し入證せんとする。故に信も自力の信、教行證も自力によつて得るのである。そして此時の信は、單に教へを疑はぬといふ位にて、殆ど問題にならぬ程薄弱なものである。勿論、佛教へ入るには信心を起さねばならぬことは通規であるが、聖人の御時代にあつては、佛教、我國に渡來してより七百有餘年に及び、上は萬乘の君を始め奉り、下は邊鄙の國々まで一般に普及せられて國民の尊信を受けたことであるから、單に佛教の尊いことを信ずるといふは容易なことである。故に信といふことは、僧俗ともに殆ど問題にしてゐなかつた。かやうな境地へ他力廻向の大信心を力説することは、佛敎全體の革命である。即ち吾々のせねばならぬ發心も修行も、護らねばならぬ證果も、皆な如來の既に完成し給ふ所である。吾等は此の如來の本願を信ずることによりて、この教行證の主となることが出来る。從來の教への如く自ら發心修行するは、如來の本願を知らざるがためである。そしてこの信ずる心も吾心の所産でない、全く如來廻向の賜である。聖人は唯この信心一つを弘められた。別序に「然るに末代の道俗、近世の宗師、自性唯心に沈みて、淨土の眞證を貶し」と絶叫せられしは、當時のあらゆる自力諸教に對する一大鐵錘である。そして亦、全人類の自力の迷信を根こぎにして他力の信心を植ゑんとする憐愍の聲である。

三、(二) に法然聖人の滅後、多くの弟子達は、師聖人の眞精神を解せずして、或者は理談に流れ、或者は専ら口稱に奔り、折角法然聖人によりて革新せられたる他力念佛の教へは、當時の僧俗のために散々に蹂躪せらるるに至つた。私は更に一步を進めて其處に至るまでの心的徑路を跡けねばならぬ。

法然聖人の教へは極めて直截簡明である。其著『選擇集』を精けば、「二行章」に於て諸行に對して念佛一行を建て、更に「本願章」に於て其根據を本願の上に求め、進んで「三心章」に至つて善導大師の二河喻を引き、二種深信を擧げ、そして、

當に知るべし、生死の家には疑ひを以つて所止となし、涅槃の城には、信を以て能入となすと結ばれた。試に『和語燈錄』の中より信に關する三四の例を擧ぐれば、

唯今、彌陀の願の心は、是の如く悟れと云ふにはあらず、但深く信心を至して唱ふる者を迎へんとなり。

(第一)

夫れ煩惱惡業の病ひ極めて重し。いかが此名號を唱へて、生るる事あらんと疑うて、これを信ぜずば、彌陀の誓願、釋尊の所説、空しく其しるしあるべからず。只仰いで信すべし。(第一)

大方、この信心の様を人の心得わかぬと覺ゆる也。心のそみぞみと身の毛も豎ち、涙も落ちるをのみ、信の發ると申すは僻事にてあるなり。其は歡喜、隨喜、悲喜とぞ申すべき。信と云ふは疑に對する心にて、疑ひを除くを信とは申すべき也。見る事につけても、聞くことにつけても、其の事一定さぞと思ひとりつる事は、人いかに申せども、不定に思ひつる事はなきぞかし。これをこそ物を信ずるとは申せ。其の信の上に、歡喜、隨喜なども發らんは、勝れたるにてこそあるべけれ。(第一)

我等が如き、いまだ煩惱をも斷ぜず、罪をも作れる凡夫なりとも、深く彌陀の本願を信じて、念佛すれば、一聲にいたるまで、決定して往生する旨を釋し給へり。此の釋の殊に心にそみて、いみじく覺え候也。誠にかくだにも釋し給はざらしかば、我等が往生は不定にぞ覺えましと、危く覺え候也。(第七)

『選擇集』の「三心章」に於ける懇切なる示導といひ、『和語燈錄』の教化といひ、明かに信の主要なることを闡



明し給ふことあるにも拘らず、どうして多くの弟子達が、この中心の信を謬解したのであるか。これ實に思ひを潜めて味はねばならぬ信仰の要所である。

第一に考ふべきは、當時の聖道自力教を背景とせる法然聖人の人格である。聖人は當時の自力修行に對して、他力廻向の念佛一行を唱導せられた。單に口筆に唱導せられたのみならず、身を以つて實行せられた。それは外的に當時の教界に對して、念佛一行を專修せられた、と云ふよりは、善導大師の示導に順ひ、本願の如く、上盡一形の熾盛なる念佛を唱へられたのである。良に大いなる人界の智者は二十餘年の求道生活を経て、初めて自己の無能と、無智と、罪業我執の深きことに徹して、遂に他力念佛の一行に没頭せられた。この深刻なる内的生活は、そのままに外に現はれて、大いなる宗教的人格の光輝を發せられた。當時の教界はこの赫々たる人格の光りに照らされて、或者は聖人の前に膝を屈し、或者は自己の立場を辯護せんがために、聖教を楯に取りて聖人の教へを駁した。されどこの間にありて聖人は、大象の群獸の間を行く如く、徐々と念佛の歩みを運ばれ、上下、都鄙を通じて他力念佛の聲は口より口へ傳へられた。

吉水の教團のほかに對してさへ、かやうに偉大なる感化を與へられた法然聖人は、近く常隨の諸弟子に對しては、其の人格の光輝は殊に赫々として眼を眩す程であつた。偉人は近づけば近づく程偉大である。天賦の英資が、數十年來の修學と實行によりて鍛へに鍛へられ、そしてそのまま本願の一道に溶け込まれたことであるから、其の人格は渾然として玉の如く、接する人は何人も温い春風に抱かれるやうにも感ぜられ、而も其の人格の底には一種云ひ難い黄金のやうな高貴な堅さがある。宗教的人格は多くの場合に於てかやうな形をとる。謙虚の一面には強い慈愛の牽引力はあるが、その裏には犯し難い權威が潜んでゐて、凡夫の狎れんとする心を撃つ。諸弟子は前の牽引力に引き付けられながら、後の權威に撲れて近づくことが出来ず、師の心の外側に立ち竦んだ。師の

人格の光りによりて、逃げることの出来ぬやうに攝取せられたけれども、進んで師の中心に飛び込むには、人格の光輝は餘りに烈しく眼を射るのである。この心境は、眞面目に道に進む者の必ず遭遇する關門である。諸弟子の多くは皆な此の關門の前に坐して動くことが出来なかつた。かくして師の歿後、彼等はその殘された嚴しき門戸を讚美し、自らの周圍にもその門戸を築かんと試みるに至つた。その門戸とは念佛の理論的解釋と、無信單行の念佛であつた。所謂西山、鎮西、九品、長樂寺等の淨土宗の流派が夫である。

四、常隨の諸弟子の多くは、何故に上述の如く師聖人の人格の奥祕に入ることが出来なかつたのであるかと云へば、彼等は只師聖人の人格を學んで、其人格の根柢を見ることが出来なかつたためである。進んで云へば、眞に自分の眞相を徹見めることが出来なかつたためである。罪惡深重と心に思ひながらも、眞にそれに徹底することが出来ず、いつしか自己の念佛生活を清淨なるものと思ひ込み、よしや師聖人には及ばずとも、自分は一角の念佛行者を以て任ずるやうになつたのである。法然聖人の「愚痴」と名乗り、「十惡の身」と仰せられたことも、單なる卑謙の美德とのみ思ひ、眞に血の垂るやうな痛切の懺悔とは感ぜられなかつた。上に掲げた聖人の御言葉によりて見るも、あれを其儘自身に引當て味へば、あのやうな異流の出る筈がないのである。彼等は唯師の教へだけを忠實に見て、自分の眞價を見なかつた。教への如く實行するは尙ほ易いが、其教へを眞に自己の胸奥に植ゑつけることは困難である。痛切なる内省なくして、教へを信じ行ふことは、眞に其教へを信じたのでもなく、行つたのでもない。それは唯、型を學んだに過ぎない。片手を出して受取りても他の片手は他の働きをしてゐる。本願の念佛を信じ稱ふるも、心全體を以て頂かねばならぬ。即ち深く自己を内省すれば、信することも出来ぬ我、稱ふる力もない自己といふことが知られてくる。この無智、無力、無能の罪塊が如來の本願の御目的であることが感ぜられるのである。この赤裸の自己が、本願に救はれるといふことが他力の信心である。



彌陀の五劫思惟の願を、よくよく案すれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。(『歎異鈔』)  
 この、如來と吾との直接の交渉は、信仰の主質である。師法然聖人も、一文不通の陰陽師安房の介も、この點に於ては少しも異りはない。我親鸞聖人は師聖人の人格の光輝に眩惑されず、直に進んで、師聖人のこの信念に接觸せられた。

大小の聖人、重輕の惡人、皆同じく齊しく、選擇の大寶海に歸し、念佛成佛すべし(『行卷』)  
 子等の性格や能力が如何に異つてゐても、親に對すれば一樣に子供である。子等は一人一人に親心を自覺すればよいのである。この信仰の本質に就いては、法然聖人と同様であつた。有名なる『御傳鈔』第七段に、親鸞聖人が、聖信房、勢觀房、念佛房等の諸弟子に對して、

聖人(法然)の御信心と、善信(親鸞)が信心と、いささかもかはるところあるべからず、ただ一也と申されしに就いて、諸弟子はこの不遜なる言葉に驚いて、聖人を詰ると、師法然聖人は、

信心のかはると申すは、自力の信にとりての事也。すなはち智慧各別なるがゆゑに信又各別也。他力の信心は、善惡の凡夫ともに佛のかたよりたまはる信心なれば、源空が信心も、善信房の信心もさらにかはるべからず、ただ一なり。

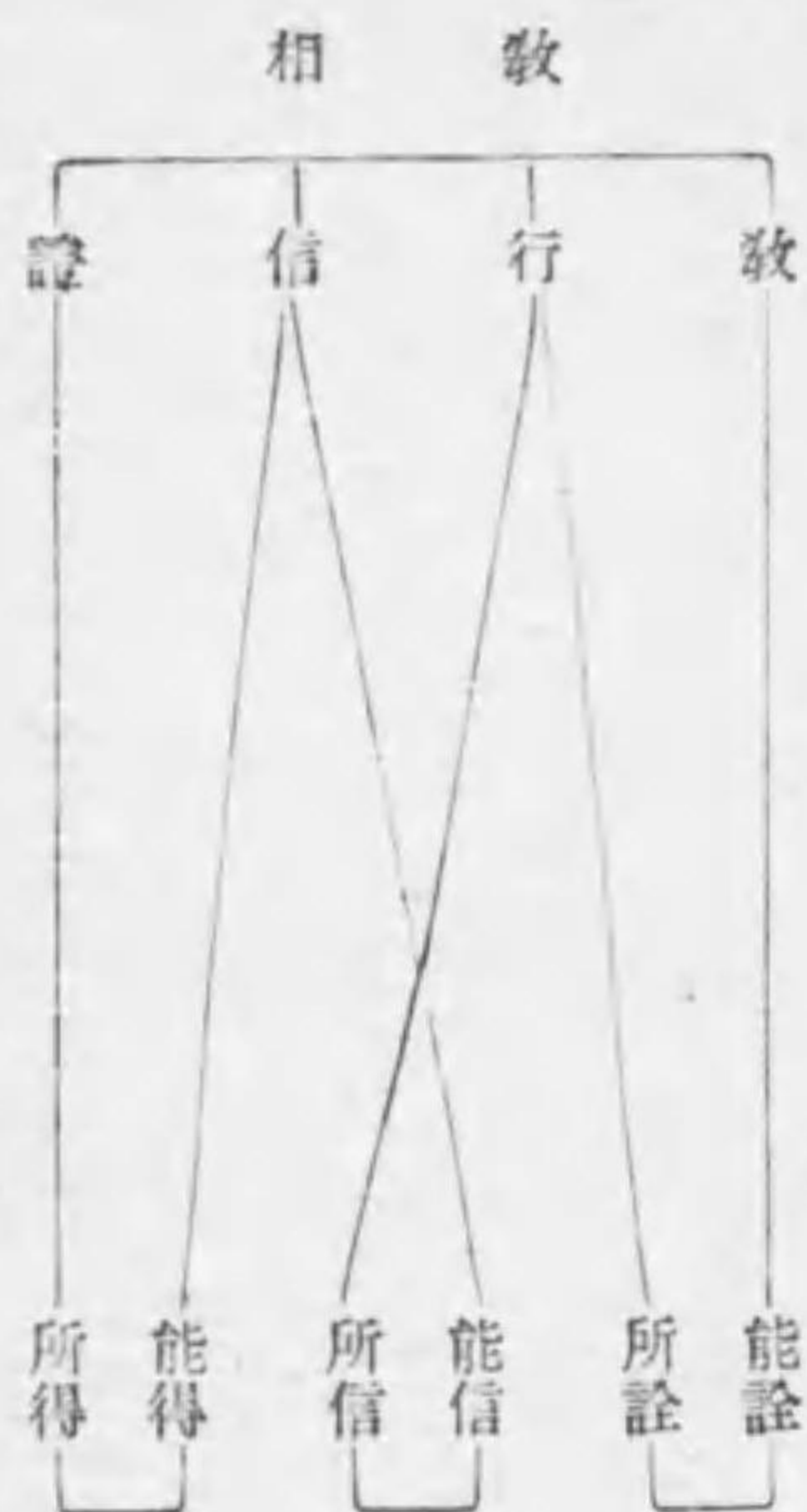
と仰せられた。かやうに師弟の心は、他力廻向の同一信念に住してをられたのであつた。

この見地に立つてをられた我聖人は、師聖人の滅後、同侶の人達が、徒に師聖人の外相を執じて、眞精神を失うてゐることを嘆かれ、『選擇集』の骨目とも云ふべき「三心章」の眞意を發揮せんがために、「信卷」を別開し、特に別序を設けて、直截簡明に絶對他力の信念を鼓吹せられたのである。

五、「信卷」の使命の内容は大凡上述の如くであるが、「本典」組織の上より「信卷」の地位を見れば、既に、

「行卷」に於て所信の大行は明され了つたから、つぎにその大行を信する能信を明すことは必然のことと云はねばならぬ。「行卷」に於て藥は既に調合せられた。今や「信卷」に於て之を呑むのである。呑まなければ、藥の效能はない。效能がないと云ふよりは、藥が藥としての存在を失ふのである。藥と服用とは離すことは出来ぬ。藥の後に服用の來ることは自然の道理である。一度この藥を服用すれば效能があらはれる。その大益のあらはれる所は「證卷」の使命である。吾等はこの身に於て證悟の境に至ることは出来ないけれども、信心の因によりて未來涅槃の果を獲るのである。信の裏に望みが宿る。吾等は現在の恩寵を喜びながら、未來に對しては永生の希望を樂ませて頂く。「信卷」の後に「證卷」の來ることも必然のことである。

左に先輩の説を圖示すれば、







思想の形式から云へば、教相の示す通りに、教は能證、行は所證、そして信は能信、行は所信、つぎにその信は能得の因。證は所得の果であるが、之を實際に色味する時は、安心の示す如く、信は吾等の能信にして、教行證は所信となる。本典總序に、

眞宗の教行證を敬信して、特に如來の恩徳の深きことを知んぬ

と仰せられたのはこれである。信の對象たる六字の名號の中に教行證の三法は攝められてある。私共は何を信ずるかと云へば、眞宗の教行證を信するのである。教行證は、誰に信ぜられるかと云へば、私共に信ぜられるのである。この二者は離すことは出来ぬ。『六要鈔』に「行信、能所、機法是一」と仰せられたのは千古の名釋と云はねばならぬ。そして是等全體が如來の廻向である。「證卷」に、

夫れ眞宗の教行信證を案すれば、如來大悲廻向の利益の故に、若は因、若は果、一事として阿彌陀如來の清淨願心の廻向成就する所に非ざることあることなし。因淨なるが故に果亦淨也。應に知るべし。

味はねばならぬ。

## 第二章 「信卷」の要義

一、凡そ如何なる思想にても、それが一代の人心を動かすやうな感化力あるものならば、其思想の創作者は必ず深刻なる自己批評をし盡してゐるものである。即ち其人自身の思想全體、生活全體を味うて、然る後に一の統一せられたる思想に、自己全體を打ち込んでゐる。我聖人が、信心正因を力説せられた裏には、實に深刻なる自己省察と生活の色讀があるのである。

聖人は二十九歳にして、自力修行の甲斐なきを知つて、師法然聖人の教へを信受せられ、三十一歳には破天荒の結婚となり、同棲五年にして越後へ流され、爾來、流離艱難の生活に身を委ねらるること十有餘年、五十二歳にして本典を製作せられた。吉水入室の後、實に二十四年目である。此間、聖人は實際生活の上にあらゆる人生の悲惨を経験せられた。殊に妻子と同棲の在家庭生活であるから、深く自己の胸中に燃え上る煩惱の熾盛なるを感じられたことである。善導、源信、法然等諸聖が、其の痛烈なる内省によりて自我の惡毒に驚き、「貪瞋邪偽」と叫び、「極惡深重」「十惡愚痴」と呼ばれて、本願を仰がれた宗教経験を、我聖人は家庭生活の上に味はれた。諸聖は尙ほ愛欲、名利等の卑しい煩惱の幾分は征伏して、高潔な生活を續けられたが、我聖人はこれ等の穢い煩惱の渦中に身を沈められた。これは聖人の好んでいたされた所でもなく、亦師聖人の理想を實際に行ふといふやうな豫想によつてなされたのではない。唯、自分の精神は表を立派にすればする程、内心には惡念に汚される事實を深く味はれ、あの賀古の敬信沙彌が、内外相應の生活がしたいと云ふので、地位も名譽も打ち捨てて、在家の



農夫生活に身を落して、念佛生活せられたことを慕はれたのである。聖人の如き鋭い理智と、鋭敏なる感受性と、高い理想に慥げられた方にして、かくの如く溷濁なる在家生活に没頭せられた方は、恐くは古來、一人もなかつたことであらう。

二、多くの高僧は、低く煩惱を見るよりは、高く理想生活を望まれた。そして其天賦の力量によりて、煩惱を征服し、凡夫の窺ふことの出来ぬ、高潔なる生活を續けられた。従つて其自得の境地より産れたる教説は、深く人生に徹するよりも、煩惱を伏断して得たる靈界の光景を説示するを主眼とした。故に教への如く實行の出来る少數の人々を除いては一般人には風馬牛の有様であつた。そして其少數者と雖も、常人よりも勝れた實行力を恃み、眞に自己の相を見ざる無邪氣な憍慢の人々であつたのである。法然聖人の門弟の多くはこれであつた。彼等は外儀の點に就いては、師聖人に近く、そして漸次に其解行の進むとともに、心密に聖人の高弟を以て自ら任じ、深く自身の惡毒なる煩惱を色味せずして、只管に氣高い宗教生活を憶れ進んだ。故に其の説く所は巧なる理談か、然らざれば、口稱念佛によりて得る所の、安價なる恍惚の感味位に過ぎなかつた。かやうに自己の本性に觸れず、單なる口稱念佛によりて、外的に宗教的感味を獲んとするは、古より今に至るまで常に苟安を貪る人性の惡戯である。猛惡なる自我は、念佛の鍍金の下に潜みて、決して頭を下げてをらぬ。故に少しく靈興を獲れば、忽ちに同侶を見下し、心に空虛を感ずれば、只管念佛して感味を獲んと焦せるのである。これが自力の根切れとしてをらぬ證據である。

三、我聖人は之と全く行方を異にせられた。即ち學問や、道德や、威儀や、念佛を以て、自己を飾ることによりては到底満足することは出来なかつた。これ等は自我の惡戯に過ぎない。眞の宗教生活は、左様な餘裕のあるものではない。學問、道德、念佛等を勵まんとする自我そのものが、罪惡深重である、愚痴無智である、地獄一定である。如來の本願は、實にその自我の上に注がれてゐるのである。この念々の自覺が眞の宗教生活である。底抜けの惡人が、底抜けの御慈悲によりて救はれる。只夫だけである。この些かの妥協も許さぬ徹底觀が聖人の眞生命であつた。この感味の上には、地上の如何なる約束も侵すことは出来ぬ。實に無礙の一道である。久遠劫來の自我が、不可思議の狀態に於て、大慈悲と溶け合ふた有様である。「化卷」の終りに、  
慶しき哉、心を弘誓の佛地に樹て、情を難思の法海に流す  
と仰せられた。自力の計ひを打ち捨てて、他力の御計ひに任せられた味ひである。

四、されど悲哉、迷ひの凡夫はいつもかも此の高調した靈趣を感じてをることは出来ぬ。吾等の久遠劫來の自性は依然として煩惱惡業の生活を續けてゐるのである。吾聖人はほかの高僧方と違ひ、妻子とともに在俗生活をせられたことであるから、殊に御自分の煩惱の強盛なるを深く味はれたことである。

宗教的に單に煩惱とか、罪惡とかと云へば、常並みのやうに思はれることであるが、眞面目に自己を省察する人に取りては、言葉以上 豫想以上に、深刻なることが知られてくる。殊に夫等の煩惱が、吾等の活きた肉に關することによりて、一層烈しく一層具體的に湧いて來ることを感ずる。心靈上の事柄に關しては、豚のやうに遲鈍なる我々は、自分の利害問題や、肉體の苦痛等のことに關しては、渾身をあげて感銘するのである。自ら回想するだに忌はしく感ずる嫉妬の念、烈しい憎しみ、如來の有を我有にして命懸けに執着する心、一分にても善行あらば、之を我有として自分を飾り、念佛も、道德も、學問も、妻子も眷族も、皆な自分に取り込んで、快味を食らんとする心、そして自分の欲望が妨げらるる時は、教の權威も、道義の權威をも蹂躪して、自我の暴慢なる權威を主張せんとする。これ等の烈しい自己の本性を、我聖人は年を重ねるにつれて深く味ひ給ふ所であつた。

五、聖人は如來廻向の智慧によりて、些かの曖昧も許さず御自身を省察せられた。誠に底知れぬ恐しい執着の



塊である。どこまでも地を執じて光を惡む土鼠である。底下の凡夫、五逆十惡、謗法闍提といふは、自分の正しい名であると感ぜられた。そして其處に痛切なる懺悔を遊ばされた。その偽りなき告白は、「信卷」末の左の御言葉である。

悲哉、愚禿鷲、愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の數に入ることを喜ばず、眞證の證りに近づくことを快まず。耻づべし、傷むべし。

この懺悔は、聖人の全分の懺悔である。肉の生活と離れた美しい懺悔でない。打てども進まず、叩けども痛さを感じぬ、尸のやうに無感覺な、豚のやうに遲鈍な、そして獸のやうに、肉欲に沈み、怒り猛ける身であると痛感せられたのである。この感味は徒に地上を厭うて、天上の光に慄れるやうな、安價な聖者にはいつまでも解せられることはない。彼等の多くは、凡人よりも高い生活の山から、人々を見下すのである。そこに表面の高潔はあるけれども、内心に隠れてゐる毒我は、毫も其姿を改めてはをらぬ。心に一分の隙もあれば、百年の修行も一時に退轉せしめんと待ち構へてをる。彼等は胸に爆裂彈を藏めて、安全であると思ひ込んでゐるのである。そして一時の安全と平和を食らんとするのである。凡人は皆この毒我の跳梁に任せてゐる。唯意志の強い人だけが、或る程度まで夫を抑へる位に過ぎないが、自力修善の聖者達は、肉欲を遠ざけた規則立つた生活と、強い意志によりて常人に勝れた障壁を毒我の周圍に築いただけである。故にいつかは大破綻の時期が来るのである。否、之を裏から云へば、かやうな不徹底になつてゐると云ふことは、其生活全體が既に賢善の假面を着けた毒我の働きと云はねばならぬ。あの嚴烈なる修道生活を續けられた善導大師が、

自身は 現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫以來、常に没し、常に流轉して、出離の縁あることなしと深信すと仰せられたのは、この絶體絶命の境地に觸れられた時の叫びである。ここに一分も自己の價値を認めぬ徹底的

の悔愧がある、謙虛の念がある、不朽の生命がある。之を他力趣向、深信といふのである。

六、我聖人が、かやうに明白に、御自分を打ち出して下されたにも拘らず、多くの人々は亦愚劣な人情に捕へられて、聖人のこの告白に徹することが出来ず、淺薄な「謙徳」の名の下に、この生命の文字を葬り去らんとするのである。恰も法然聖人の門下の人々が、師を尊敬して、うすつべらなる讚美の衣を着せ、遂に師聖人を、活きた人心の要求から遠ざけたやうに、吾聖人の崇拜者も屢々この善良なる惡徳を敢てして來たのである。

誠に宗教的人格に對する最大の惡徳は、其皮相を讚美する聲に過ぐるものはないと思ふ。人々の多くは、徒に其精粕を嘗め、其外形を拜んで、自己の眞生命を忘れてゐる。これがために自分にとりては讚めながら偉人と遠ざかり、他に對しては、偉人に觸れんとする人々を精神的に荼毒するのである。これ等は皆な命懸けに自己の眞相を徹見せず、只心の表皮で宗教的遊戲を試みてゐるためである。蓮如上人は、この機微を洞察せられ、「御一代聞書」七十二丁に記するところによれば、左の如く仰せられた。

信を取らぬによりて、わろきぞ。ただ信を取れと仰せられ候。善知識のわろしと仰せられけるは、信のなきことを、わろきと仰せらるるなり。然れば前々住上人、或人を言語道斷わろきと仰せられ候ところに、その人中され候。何事も御意の如くと存候と申され候へば、仰せられ候。ふつとわろきなり。信のなきはわろきはなきかと仰せられ候と云々。

この人は、蓮如上人に叱られながらも「何事も御意の如く」と申上ぐる程であるから、上人の渴仰者であつたに相違ない。辛辣なる上人は、その人格の皮相に著する心を御覽はしてかやうに厳しく教呵せられたのである。

七、誠に人間の執着の強いことは測り知ることが出来ない。我等の自力の手は、近づく何物をも握るのである。この深い烈しい執着力は、吾聖人の深く味ひ給ふ所であつた。そしてこの恐ろしい執着の上に、深重の大悲を



味はれた。如來五劫の思惟も、永劫の修行もこの烈しい執着、恐ろしい毒我の私あればこそと、その自己の本性の上に誓願の深重なるを色味せられたのである。聖人の告白も教訓も、この深い自覺の上から、靈と肉との戰鬥の底から湧き來つたものである。

この意味に於て、「信卷」の三心釋は、聖人の痛切なる信仰的實驗の披瀝である。我には眞實もなく、信心もなく、慈悲の念もない。無始より以來、自ら作つた業力に引きずられて、惡趣に流轉して來たのである。この自覺の田地の上に於てこそ本願の種子が初めて信心の萌芽をふくのである。故に私共は如來を求むる前に、自己を省みねばならぬ。從來の傳習的の衣を脱ぎ、虚偽の面を剥ぎとり、人間のあらゆる約束を捨て、我一人我心と對面して實の如く我心の眞相に觸れねばならぬ。夫は單なる思想の上や、觀念の上に求めずして、日常生活の上に働いてゐる、我心の上に求めねばならぬ。何人にも打ち明けられぬ心、何人にも知られてない淋しい心、もし知られるならば、誰にでも捨てられるであらうと云ふ恐れのある心、而もその偽りの心を抱いて、人間の情けを得よう、人の上にあがらうともがいてゐる此心の眞相を眞に自覺するのである。その一念の自覺こそ如來から興へられたる心である、機深信である。そして其裏を返せば、如來を信する心である、法の深信である。

八、この自覺を具體的に打ち出されたのが、「信卷」の阿闍世王の逆惡、其の救濟の顛末である。佛教の歴史に於て、王舍城の悲劇ほど慘憺たるものはない。常には深く隠れたる人間の毒我は、あらゆる方面から全身を露はして千古の慘劇を演出した。提婆は釋尊の從兄弟であつて、精勤十二年にして、あらゆる法藏に通じ、大智舍利弗をして驚嘆せしむるに至つた教團の上首である。然るに彼の胸奥に潜みし一念の毒我は、師友の力を嫉ましめて、一方には恩師釋尊を殺し奉らんとすること三度に及び、他方には、年若き阿闍世太子を誘惑して、父頻婆娑羅王を殺さしめ、母后韋提希夫人を幽せしむるに至つた。かくして悲劇の張本人たる提婆は自ら産んだ毒の

ために死し、阿闍世は罪に苦しんで佛教に歸するに至つた。かやうに人生の惡毒をさらけだした千古の慘劇を、我聖人は深く自己内心の事實と感ぜられた。信仰は決して美しい幻影でない。今現に提婆、阿闍世の慘劇をなしつつある自己の問題である。この手も足も出ぬ絶體絶命の自己のために、絶對他力の大道が開かれたのである。聖人は常にこの念に住せられた。京都隱栖の御晩年に、命懸けに聞法する關東の同行に對して仰せられた、あの有名な「歎異鈔」の第二節に於て明かに頂かれる。

親鸞におきては、ただ念佛して彌陀に助けられまゐらすべしと、よき人の仰せをかうむりて、信するほかに別の仔細なきなり。乃至、いづれの行も及び難き身なれば、地獄は一定すみかぞかし。

この自覺の裏を返せば、そのつぎの文の、

彌陀の本願、まことにおはしまさば、釋尊の説教、虚言なるべからず云々の信心である。

九、我聖人の忌憚なき信仰告白は、この「信卷」である。それは其儘活きた如來の本願である。この具象化された本願の聲は、當時の謬れる聖道淨土の迷心者に對する迅雷である。否、すべての時代に生ける全人類の迷ひを顧らしむる憐念の聲である。或は寧ろ自我の毒血を湧かせてゐる心臓に擬する匕首である。聖人は自ら刺されたるこの匕首を取つて我々の心臓に擬せられた。吾々の久遠劫來の毒我は、根柢より戰慄せねばならぬ。この匕首といふは、ほかでない、罪惡奸詐の自覺である。かの阿闍世王は、罪の自覺に戰いて、全身戰慄し、五體搖ぎ動くこと芭蕉樹のやうであつたと云はれてゐる。ああこれ如來深重の大悲が、正しく逃げに逃げ、双向ひに双向ひたる毒我の上に加はらせられた表徴である。

我等は、末世に生れて、この寶典を繕くことの出来る榮譽と幸福を喜ばねばならぬ。心を沈め、襟を正し、謙



虚の念に住しつつ、本典を色讀せねばなりませぬ。

十、以上二章に互りて、信證兩卷の眞精神を略述した。その巨細なる血と肉とに至りては、各章の講義と餘義を見て頂きたいことである。

# 本講

## 第一編 別序

### 第一章 題號と選號

#### 顯淨土眞實信文類序 愚禿釋親鸞述

【字解】 一序 敘べあらはす意。「信卷」製作のころを述べあらはす文章のことである。

二 愚禿 親鸞聖人自選の號である。愚は開鈍愚痴、禿は戒を犯し法を護らざる禿居士をいふ。即ち「僧に非らず俗にあらざる」本願の實機を示してゐるのである。これ聖人自らの慚愧表白である。愚禿の據處は「南本涅槃經」第五、「北本涅槃經」第三、並に傳教大師「入山自誓の願文」等である。本書六一頁に委し。

三 述 「論語」「述而篇」の「述而不作」とあるに同じく、三經七祖の正意を述べ傳へて、更に私にめづらしい法を弘めるのではないといふ旨趣を含めてある。

【講義】 淨土眞宗の眞實の信を説きあらはす要文を集めるについて、選集の意を示す文。愚禿釋親鸞の説き述べたものである。

【餘義】 愚禿釋親鸞述の六字は、御草本、御眞本、高田本にはなく、その他は『六要鈔』の御本をはじめ、凡



ての刊本には皆な出されてある。

### 第二章 二尊の大悲

夫以獲得信樂發起自來選擇願心開闢真心顯彰從大聖矜哀善巧

【讀方】 夫おもんみれば、信樂を獲得することは、如來選擇の願心より發起す。真心を開闢することは、大聖矜哀の善巧より顯彰せり。

【字解】 一 信樂 他力信心のこと。第十八願に誓はれたる三信の一。今は疑なく他力本願を信受するをいふ。

二 選擇願心 阿彌陀佛が因位において、二百一十億の諸佛の淨土の善惡長短を選択して、衆生救済の本願を建てたるに至つた慈悲心のこと

三 開闢 闢は申すこと。故に開説すること、説き述べること。

四 真心 眞實心のこと。如來廻向の眞實信心のこと。

五 大聖 大聖釋尊のこと。釋迦如來を指す。

六 矜哀 大に憐むこと。

七 善巧 善巧方便の意。是の上ない巧みな御方便のこと。

八 顯彰 顯はすこと。

【文科】 二尊の大悲によりて他力信心が我等に起ることを示す一段。

【講義】 よくよく考へてみると、他力の信心は、阿彌陀如來が因位に於て本願を選択し給うた大悲心から得さ

せて下されたものであり、またこの眞實信心が凡夫自力の心ではない、全く彌陀如來の清淨眞實の御心であるといふことは、釋迦如來が衆生を憐れと思召し給ふ御心から善巧方便を以て御説き下されたものである。言ひ換へてみれば、他力の信心は全く釋迦彌陀二尊の衆生を憐れと思召し給ふ大悲心から發して下された絕對他力廻向の信心である。

【餘義】 一、初めの二十八字、突如として大瀑布の中天より落下するやうである。清涼と、簡明と、遒勁と莊嚴を極めてゐる。そして絕對他力の奥旨を、最も簡潔に打ち出された天來の文字である。この簡潔なる文字の中に、信仰に關する根本問題が解決せられ、同時に、凡ての問題を解決すべき潜在力を孕んでゐる。

二、信仰を獲るといふことは、どう云ふことであるかと云へば、絕對的に彌陀、釋迦二尊の御力から起るといふのである。唯是丈であるが、此處に自力他力の水際が立つのである。吾々は常に自分といふものを忘れることが出来ぬ。何事に就いても、此自分が基本となつてゐる。「信する」と云ふ裏を云へば、「自分が信する」「自分の信心である」といふことになつてゐる。即ち自力の信である。自分の手細工で作つた信心であるから、毀さうと思へば、いつでも自分の手で毀すことが出来る。是が僞信の證據である。そして此僞信を握んでゐることは甚だ危い。恰ど夏の炎天に泉を有たぬ水溜を力にしてゐるやうなものである。自分で運んで出来た水には限りがあるやがては炎天の爲めに涸れ果てるに相違ない。吾々は常に斯様な愚を演じてゐるのである。否、是が久遠劫來の凡夫の有様である。

然るに他力の信仰はさうではない。自分の心から起す信仰ではなくして、如來選擇の願心から起る信仰である。選擇の願心とは、阿彌陀如來が因位に於て、吾等の爲めに起し給ひし、選擇本願の大慈悲心である。如來の大慈悲は何に緣りて起されたかと云へば、我等の愚痴と、邪見と、そして夫等の煩惱より起る苦惱の爲めである。故



に吾々の信心とは此深重の大慈悲に催されて起つた歸命の心を指すのである。『和讃』に、

信は願より生ずれば

念佛成佛自然なり

と仰せられたは是である。又、『御文』二帖目第一通には、

さて彌陀如來と申すは、かかる我らごときのあさましき女人の爲に、おこし給へる本願なれば、まことに佛智の不思議と信じて、我身はわるきいたづらものなり、とおもひつめて、ふかく如來に歸入する心をもつべし。さてこの信する心も、念ずる心も、彌陀如來の御方便より、おこさしむるものなりと、思ふべし。かやうにころうるを、すなはち他力信心を得たる人とはいふなり。と詳説せられた。

かやうに、如來の大慈悲より起る信仰は、湧泉をもつてゐる池のやうなものである。煩惱の烈日いかに照りつけても、此處には深い大地を潜りて、湧く泉があるから、涸れる憂ひはない。生命の泉は滾々として、常に我胸に湧きである。

かやうに、他力の大信心は、何人が親しく教へて呉れたのであるかと云へば、即ち大聖釋尊でゐらせられる。愚鈍なる吾等は、この親しく地上にあらはれ給ひて、説法教化あらせられた大聖釋尊の人格を通さなければ、この大慈悲心を頂くことが出来なかつたのである。人生の實相を見る眼眩み、自己の眞相を知るの智慧を缺きたる吾等も、身を以て執着してゐる平凡な人生以上に、絶對の力あることを示し給うた釋尊が、其の矜哀の御心から、善巧の御手を垂れ給ひ、我等の愚鈍の心の底に入りて、吾等に眞實大悲の親様のましますことを知らせて下された。この大聖の發遣によりて、彌陀の悲心招喚を聞くことを得たのである。是故に聖人が、彌陀の願心とともに、釋尊の輪教を御擧げ下されたことである。『和讃』に、

釋迦彌陀は慈悲の父母 種々に善巧方便し

吾等が無上の信心を 發起せしめ給ひけり

又は、

眞實報土の正因を 二尊のみことにたまはりて

正定聚に住すれば かならず滅度をさとるなり

と仰せられ、『淨土文類聚鈔』には、

明に知ぬ、二尊の大慈に緣りて、一心の佛因を獲たり

と申されてある。誠に彌陀釋迦二尊は、吾等の心靈上の父母にてゐらせられる。吾等は釋尊の發遣と、彌陀の招喚に眼覺されて、限りなき功德の主にさせて頂くことである。吾聖人はこの動かすべからざる事實を根柢として、自力の無功と、純他力廻向を説示せられた。

三、「信卷」本末兩卷は此の二句を廣説せられたに過ぎぬ。之を三信釋の上より云へば、清淨なる至心の廻向も、廣大無礙の淨信の廻向も、又眞實清淨なる大悲心の廻向も、吾等の受くる所は只、疑蓋無雜の一心である。「信樂を獲得する」とは是をいふ。そしてこの信する心は、如來他力の願心より廻向し給ふ所である。ここに一分の自力も許さぬ絶對他力の獨り働きがある。是れ實に本卷の大要である。末卷に於ては、王舍城の悲劇を擧げ、かくの如き惡逆の阿闍世王の爲めに、大聖釋尊の矜哀善巧を懇切に引用せられた。即ち他力信心の我が胸中に生れることは、偏に大聖釋尊の善巧方便の然らしむる所であると示された。

本卷には、信心獲得の深い根柢を説き、末卷には其の具體的の事實を擧げて、正しく大悲の御手の、吾等の上



に加はらせらるる妙趣を示された。この二つは、二にして全く一である。即ち絶対他力廻向の信仰といふことは、惡逆の自己が、他力の大悲に攝取せらるるの謂ひである、故に、この二句は、縦に、信心獲得の始終を説くと共に、横に、二尊一致の大悲を簡明に打ち出してある。誠に汲めども盡きせぬ至深至廣の雲文字と仰がねばならぬ。

### 第三章 沈迷の二機

然末代道俗近世宗師沈<sub>ニ</sub>自性唯心<sub>ニ</sub>貶<sub>ニ</sub>淨土眞證<sub>ニ</sub>迷<sub>ニ</sub>定散自心<sub>ニ</sub>昏<sub>ニ</sub>金剛眞信<sub>ニ</sub>

【讀方】 しかるに末代の道俗、近世の宗師、自性唯心にしづみて、淨土の眞證を貶す。定散の自心に迷うて、金剛の眞信にくらし。

【字解】 一 道俗 道は出家の人 即ち僧侶、俗は在家の人、即ち一般人。

二 自性唯心 自性の阿彌陀、唯心の淨土のこと。我等の心には先天的に佛性を具へてゐる。果上の阿彌陀佛も、この佛性の外はない。又吾等の此心の外に別に淨土があるのでない。この心が悟れば、淨土が顯れるといふ説である。

三 定散自心 定善散善を執する自力根性をいふ。定散二善は『觀經』に廣く説かれてある。定善十三觀、散善三觀である。定善は息慮凝心、散り亂るる心を凝らして觀念をなすこと。即ち上根の機類の修むる善である。散善は廢慮修善、散亂の心を押へることは出来ないが、その代りに惡をすてて善根をつむ下根の機類の修むる善である。かやうに定散の異りはあるが、何も自力を本とする故に定散の自心と云はれたのである。

四 金剛眞信 如來廻向の眞實信心のこと。その堅固なること金剛のやうであるといふので、この二字を指す。

【文料】 信仰上の惡俗の實例を擧げて、正義を顯彰する一段。

【講義】 かくの如く他力の信心は全く如來廻向の信心であるのに、末代今の時の僧侶も在俗者も、近頃の一宗の師ともなるべき算い人達も、皆この譯合ひを知らず、徒らに自性の彌陀、唯心の淨土などといふ誤つた見解に陥入つて、眞實淨土にて初めて得させて下される無爲涅槃の證果を嫌ひ貶しめ、定善、散善を執する自力根性に囚はれて、他力金剛の信心の味を全く知らずに居るのである。何といふ慨はしいことであらうか。

【餘義】 一、初め「末代の道俗」は、概括して標し、次の「近世の宗師」は、上の「道」の中より、特別に手近く出し給ふ。即ち上に擧げたる他力廻向の信心を知らざる自力我慢の眞相を示されたのである。

この文の中、「自性唯心に沈む」機類は何んであるか、と云ふことに就ては、古來、種々の説がある。智暹の『樹心錄』には、判然と、「沈<sub>ニ</sub>自性唯心<sub>ニ</sub>貶<sub>ニ</sub>淨土眞證<sub>ニ</sub>」は聖淨相對で聖道自力の人を指し、「迷<sub>ニ</sub>定散自心<sub>ニ</sub>昏<sub>ニ</sub>金剛眞信<sub>ニ</sub>」は要弘相對で、淨土門中の異流の人々を指すと云うてある。文面の一應の解釋としては、是でよいと思はれる。即ち「自性唯心」の自性は自己の本性が阿彌陀佛であるといふこと、唯心とは、我等の心が淨土である、この心を離れて別に淨土があると思ふは迷ひであるといふこと。故に之を「己心の彌陀」、「唯心の淨土」とも云はれてゐる。

華嚴、天台、眞言、禪宗等の諸大乘教というても、其の根柢を叩けば此の自性唯心の教へよりほかはないのである。自己の本性は、法爾の佛性である。久遠以來の迷執の鏽の爲めに佛性の鏡面は曇つてゐるけれども、鏽の底には本來の玲瓏たる佛性の光りは明かである。進んで云へば、煩惱の鏽そのものも、清淨の鏡と離れたものでない。全く同一のものである。そこに煩惱即菩提、生死即涅槃の眞理が横たはつてゐる。吾等は、この眞理を自覺し體得すればよいと説く。



徹底的の自力主義の原理は是よりほかはない。一切の諸佛と云ふも、各自固有の佛性を開發した點である。吾もこの固有の佛性を磨き出すことに努力せねばならぬと教へる。この見解に立てば、他力淨土の法門は、自己の佛性を信ずることが出来ない程に、愚になつてゐる衆生を、誘引するための方便説と貶さねばならぬ。即ち只愚俗の歡心を買はんがための幼稚な神話の宗教に過ぎぬと云ふのである。かの善導大師以前に通論家の人達によりて盛んに唱導せられた別時意趣説の根柢は、全くこの點から出てゐるのである。即ち彌陀如來を念ずることによりて、淨土往生の證果を獲ると云ふのは、一箇の方便説に過ぎぬ。單なる發願や念佛は、内容のない、力のない、功德のない概念である。眞の證果は、左様な空漠な原因によりて獲らるる筈がない。無上畢竟の證りを獲るには、夫に相應する、充實した原因を作らねばならぬ。其方法は多劫の間、修行を積みて、佛性を開顯せねばならぬ。眞の佛性の開顯せらるる時が無上の證果を獲た時であると云ふのである。此説の如きは自力教の眞面目を正直に打ち出して、淨土の眞證を貶してゐるのである。

通論家の人々でなくとも、一切の自力宗の人々は皆この自性唯心に沈んで、淨土の眞證を貶してゐる。宗祖當時の叡山、南都の僧侶は申す迄もなく、法然聖人に反抗した、梅尾の明慧上人、笠置の解脫上人を初め、禪宗の榮西、道元諸師の如きも、皆この中に攝められねばならぬ。聖人の此の一句は實に一切の自力聖道の教へに對する破斥である。

二、つぎに、「迷定散自心昏金剛眞信」は、淨土門の異解者であることは、諸説の一致する所である。定機は心を一境に專注して、冥想、觀法に耽けることの出来る上根の人である。散機は、心を一境に止めることは出来ないけれども惡を廢めて善を修めることの出来る人々である。是等の人々は、各自別々の能力や特長を恃み、その自力の手で、他力の行を勵まんとするのである。故に之を表面から見れば、淨土の經釋を學び、淨土

念佛を勵み、淨土往生を願うてゐるけれども、其裏面を見れば、自力疑心に拘はりて、絶對他力に入らずにゐるのである。そして彼等は夫を少しも自覺せずにある。自分は眞の淨土の法門を修めてゐると思つてゐるのである。法然聖人の門下の人々は、大概この類であつた。「御傳鈔」によれば、決然として信不退の座に着いた者は僅に五六輩に過ぎず、他の三百餘人の門侶は、一言ものぶる所はなかつた。故に著者覺如上人は、この別序の文を引き「これ恐くは、自力の迷心に拘りて、金剛の眞信に昏きがいたすところ歎」と申された。蓮師も亦「御文」二帖目十五通に、

抑、日本において、淨土宗の、家々をたてて、西山、鎮西、九品、長樂寺とて、其ほかあまたにわかれり。これすなはち、法然聖人のすすめ給ふところの義は、一途なりといへども、あるひは、聖道門にてありし人々の、聖人へまわりて、淨土の法門を聽聞し給ふに、うつしく、其理、耳にとどまらざるによりて、我本宗の心をいまだすてやらすして、かへりて、それを淨土宗にひきいれんとせしによりて、其不同これあり。と仰せられた。誠に自力の迷執は深い。我等は一度、自力修行の不可能を覺りて、他力の淨土門に歸しても、根本の自力の迷執は益々固くなりて、眞實の誓願を受け込まぬ。吾等は常に客觀の事物に對しては、立派に乘ることを公言するけれども、自らの主觀は、容易に改造することは出来ぬ。動もすれば、周圍の改造を以て主觀の改造と思ひ込むのである。淨土門の異解者は、皆これであつた。彼等は、自力宗、乘てて、他力宗に歸依した其表面にあらはれた態度は、實に公明である。そして自らも自力根性を棄つたと思つてゐる。併しながら夫は單に周圍の改造に過ぎなかつた。從來の自力宗の經釋が、他力宗の經釋となり、自力宗の儀式が他力宗の儀式となつた迄であつた。自分の胸奥に潜んでゐる自力我慢は、少しも變更する所のないのは少しも氣付かなかつた。我等の久遠以來の自力の迷執は、一時の歡喜、隨喜の涙位で、洗はれるものではない。我等は知らず識らずこれ等の法悦



を宗教の第一義と心得、自力の策勵によりて、此の感味を獲んとするやうになる。其の努力の進行と結果はどうなるかと云へば、各自の性能や、先天的の能力の相違によりて、信仰が異なるやうになる。否、恐くは鎮西流のやうに只終生、戦々兢兢として如來に哀願するやうな種子根性となるか、或は、自己を忘れて、直ちに超越的に、親のものは我ものといふ西山流の生佛不二の駄々息子根性に陥るのである。この前者は際立てて兩極端を示してゐるが、この中間にも多くの種類がある。そしてその誤謬の本は、定散の自力根性を自覺せぬことに起因してゐるのである。一分に「も自力を執すれば、他力金剛の眞信は獲られぬ。故に聖人は、『和讃』に、

定散諸機各別の 自力の三心ひるがへし  
如來利他の信心に 通入せんとねがふべし

と仰せられた。

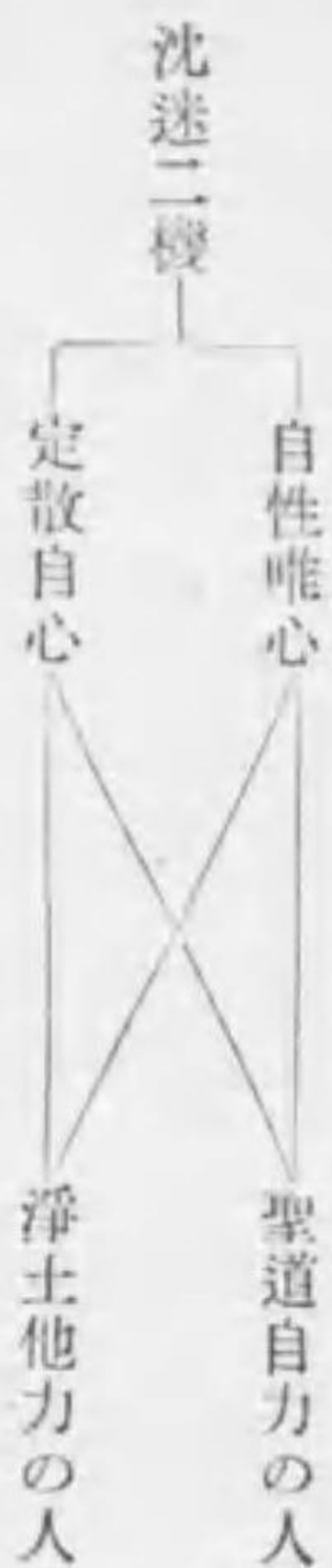
三、以上は文面の當相より、味うたことであるが、更に進んで考ふれば、自性唯心の深淵は、單に聖道自力の人々の陥いつてゐる處でなくして、淨土門の人々も、矢張り陥いる難處である。西山の證空上人が、「生と佛とは、本來一如である。我等は、十劫の昔、彌陀正覺の一念に成佛了つた」等と説いて、高遠なる生佛不二説を談するが如き、又、成覺房幸西もこの生佛不二説に立ちて、衆生の本來具する理佛と、本門の彌陀とは同一なりと云ひ、この自覺を極説して稱名の不必要を立てたるが如きは、明らかに自性唯心に沈んだものと云はねばならぬ。覺如上人は其著「報恩講式」に、

念佛修行の人、多しと雖も、專修專念の輩、甚だ稀なり。或は自性唯心に沈んで徒に淨土の眞證を貶し、或は、定散の自心に迷うて、宛も金剛の眞信に暗し。

と述べられたのは、この點を示されたことである。

之と同様の行方に於て、聖道自力の人々も亦、定散の自心に迷うて、或者は淨土の觀法を修め、或者は「無想離念」(一)「立相住心」(二)の觀佛をなし、或者は、三福九品の修善を勵んだことである。(『愚禿鈔』下十四丁参照)

かやうに文面の中に立ち入つて、具體的に味へば、『樹心錄』に定めたやうに、「沈<sub>二</sub>自性唯心<sub>一</sub>貶<sub>二</sub>淨土眞證<sub>一</sub>」は聖淨相對、「迷<sub>二</sub>定散身心<sub>一</sub>昏<sub>二</sub>金剛眞信<sub>一</sub>」は要弘相對と決着することは、餘りに型に嵌め過ぎた説と云はねばならぬ。即ち前述の通り、此の二句の文は文字通りに具體的に解すべきであると思ふ。聖人は別に、取り立てて仰せられぬ。只末代の道俗、近世の宗師が自性唯心に沈み、定散の自心に迷うてゐると嘆かせられたのである。聖道自力の人も、淨土他力の人々も、多くはこの二つの邪路に彷徨してゐると仰せられるのである。そして事實は、其の仰せの通りである。故に之を圖示すれば、



四、誠に久遠劫來の人間の自性は、我執の念である。洗へども清め難く、焼けども失せぬ、傲岸不遜の毒我である。この我は、一切の清淨と無我と慈悲に反抗する根本である。これが、宗教の形を取るときに、自性唯心か、若くば定散自心となるのである。表は自己の靈體(自性唯心)を説き、道德、哲學(定散二善)の理想を説いて、自らを夫に没頭してゐるつもりでゐるけれども、眞實の自我は、依然として迷妄のままにゐる。かくして、其美はしい高遠の理想も學説も、徒なる概念となつてゐることも知らずに握んでゐる。恰も死兒に美服を着せて、



抱きかかへてゐるやうなものである。我聖人は、其淺ましき自力疑心を自覺せられた。道に徹するとは絶對的に謙虛となることである。これは如何して獲られるかと云へば、理想を破壊することである、概念の宗教を毀つことである。根本的に云へば、自分といふものを自覺することである。我心は理想を完成することは出来ない、眞善を實行することは出来ぬ。一念に變り、一刹那に移る、動亂定めなき心である。この心を土臺にする者は、顛覆せねばならぬ。故に聖人は本卷三心釋に、

一切の群生海は、無始より已來、乃至今日今時に至るまで、穢惡汚染にして、清淨の心なし、虛假詭偽にして、眞實の心なし。

と仰せられた。これ實に我聖人の痛切なる懺悔である、自我に當面せられた端的の叫びである。これがそのまま廻向の信念である。然るに此心そのものを何の批判もなく肯定して、その上に、佛性を見、淨土を見、若くは修善を試みんとするは、空中に樓閣を築かんとするよりも、愚なことである。然るに當代古今の人々は、一世の師表と仰がるる人に至る迄、この夢幻の如き樓閣を夢み、多くの民衆は亦、その夢みる人を、更に夢みてゐる。そして、自己の眞を覺らず、本願の眞意を顧みるものはない。聖人の感慨は、凝つて利刀の如き本文となつて表はれたことである。

第四章 佛説と論釋

爰愚禿釋、親鸞信順諸佛如來眞説、披閱論家釋家宗義、廣蒙三經、光澤、特開一心華文、且至疑問、遂出明證、誠念佛恩深重、不恥人倫哂言。

【讀方】ここに愚禿釋の親鸞、諸佛如來の眞説に信順して、論家釋家の宗義を披閱す。ひろく三經の光澤をかうわりて、ことに一心の華文をひらく。しばらく疑問をいたして、つひに明證をい出す。まことに佛恩の深重なるを念じて、人倫の哂言をはぢず。

【字解】一 論家 龍樹、天親の二菩薩をいふ。

二 釋家 曇鸞、道綽、善導、源信、源空の五師を指す。

三 三經光澤 三經とは淨土眞宗正依の三部經をいふ。『佛説大無量壽經』『佛説觀無量壽經』『佛説阿彌陀經』。光榮ある三經の恩澤の義。

四 一心華文 天親菩薩の著『淨土論』のこと。本書は他力の一心を説示せる名文なる故に一心の華文といふ。

【文科】聖人御自身の見解が經論釋の深旨に根ざしてゐることを示す一段。

【講義】爰に、愚禿釋の親鸞は、三世諸佛の出世の本懐たる『淨土三部經』の眞實の教説にしたがひ、淨土一家の七高僧の御説き下された一宗の釋義を熟讀玩味して、廣くは『淨土三部經』の廣大なる恩澤にあづかり、別



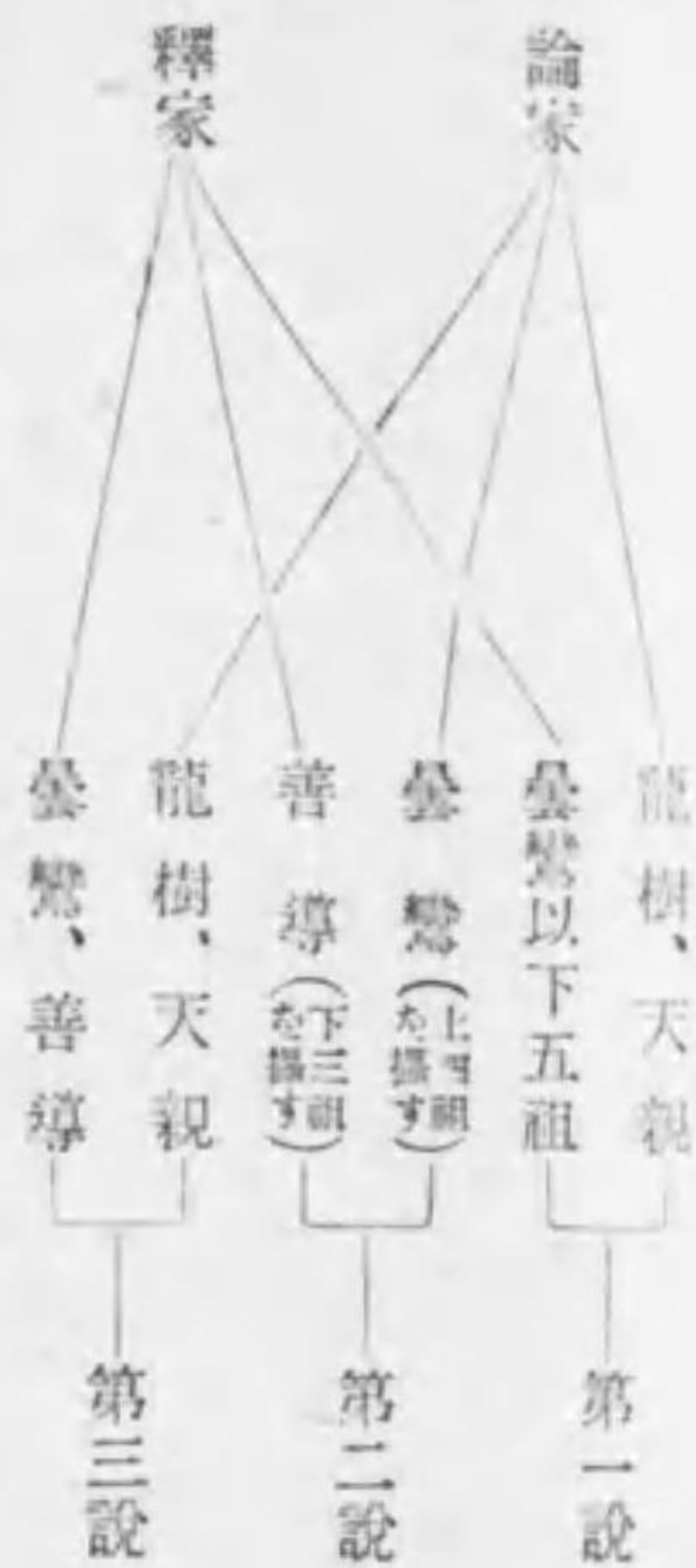
して天親菩薩の『淨土論』に依つて、今この「信卷」に於て、初めに二つの疑問を出し、問答往復して、最後に、經釋の明白な證文を出し、義理を決着いたして居る。この「信卷」の選述は如來の御恩徳の深重なるを思ふ餘りいたしたので、人々のあざけりを耻ぢ恐れはしないのである。

【餘義】一、「諸佛如來」とは、釋迦如來と、餘の一切諸佛を指す。これ等一切諸佛の出世の本懐は、彌陀の本願を説くことである。故に「諸佛如來眞説」とは、阿彌陀如來の選擇本願である。能説の人は釋迦諸佛、所説の法は、彌陀の本願である。『文類聚鈔』の終りに聖人は此の點を明かにしてをられる。

誠に知ぬ、大聖世尊、世に出興し給ふ因縁は、悲願の眞利をあらはして、如來の直説とし玉へり。凡夫の即生を示すを、大悲の宗教と爲すと成り。茲に因て諸佛の教意を關ふに、三世の諸の如來出世の正しき本意、唯阿彌陀の不可思議願を説かんと成り。

誠に諸佛の教へは、彌陀の本願である。吾等は唯この本願に信順するばかりである。「教へのほかに安心なく、安心のほかに教へはない」は此處であるとは、先輩の尊い言葉である。

二、更に「諸佛如來直説」は淨土の三部經を指し、「論家」は龍樹、天親の二菩薩を指し、釋家は曇鸞大師以下の和漢の五祖を指し給ふ。若し又「信卷」の内容より翻つて考ふれば、「論家」は、曇鸞大師を指し、「釋家」は善導大師を指すとも云はれる。何故かと云へば、「信卷」引用の文は、多く二師の著書に依るからである。即ち上四祖（龍樹、天親、曇鸞、道綽）を曇鸞師に攝し、下三祖（善導、源信、法然）を善導大師に攝して、論家、釋家と仰せられしことも見られる。或は又「論家」は龍天二師、釋家は他の五祖を指すが、正しくは曇鸞、善導二師を指すといふ説もある。何れにしても大した影響のない説である。



三、最後に一言すべきは、我聖人は、「信卷」に於て、何故に曇鸞、善導二師のやうに法然聖人の『選擇集』の文を引かれなかつたか、と云ふことである。此の點に就いて先輩は二義を擧げてゐる。

一、文に約す。この時は、元祖は行中攝信の化風で行が表になつてゐるから、「行卷」には多く引いたけれども、「信卷」には引かぬ。

二、文義に約す。この時は、「信卷」全體は『選擇集』『三心章』の眞意を發揮するにあるから、『選擇集』の眞意は、當卷全體に行き互つてゐる。故に引かぬ。

これで充分意義を盡してゐると思ふ。殊に第二の説は、内容的に元祖、我祖の精神的一致を語つてゐる心地よき説である。三一問答には、

彌陀如來、三心を發すと雖も、涅槃の眞因は唯信心を以てす

の如きは『選擇集』『三心章』の「涅槃之域には、信を以て能入と爲す」を承けられたことは明かである。其ほか「三心章」に引かれたる善導の三心釋は、同様に當卷に引用されてゐる。二祖の内鑑冷然たることは、火を親



るよりも明かであると云はねばならぬ。

### 第五章 總結

忻<sup>ニ</sup>淨邦<sup>ヲ</sup>徒衆厭<sup>ニ</sup>穢域<sup>ニ</sup>庶類雖<sup>レ</sup>加<sup>ニ</sup>取捨<sup>ヲ</sup>莫<sup>レ</sup>生<sup>ニ</sup>毀謗<sup>ヲ</sup>矣

【讀方】淨邦をねがふ徒衆、穢域をいとふ庶類、取捨をくはふといへども、毀謗を生ずることなかれ。

【字解】一 淨邦 極樂淨土のこと。

二 穢域 穢れた境域。娑婆世界のこと。

三 庶類 人々の意。

【文科】終りに本書に對する誹謗を諷めて、本序を結びたまふ。

【講義】宗教に眼の開かぬ人ならいざ知らず、苟も、淨土を願ひ、娑婆を厭ふ人達ならば、どうぞ、この書を見て、是と思ふ所があらば取り、非と思ふ所があらば捨てるもよいけれども、決して、謗法の大罪を犯して下さるな。

## 第二編 眞實信（信卷）

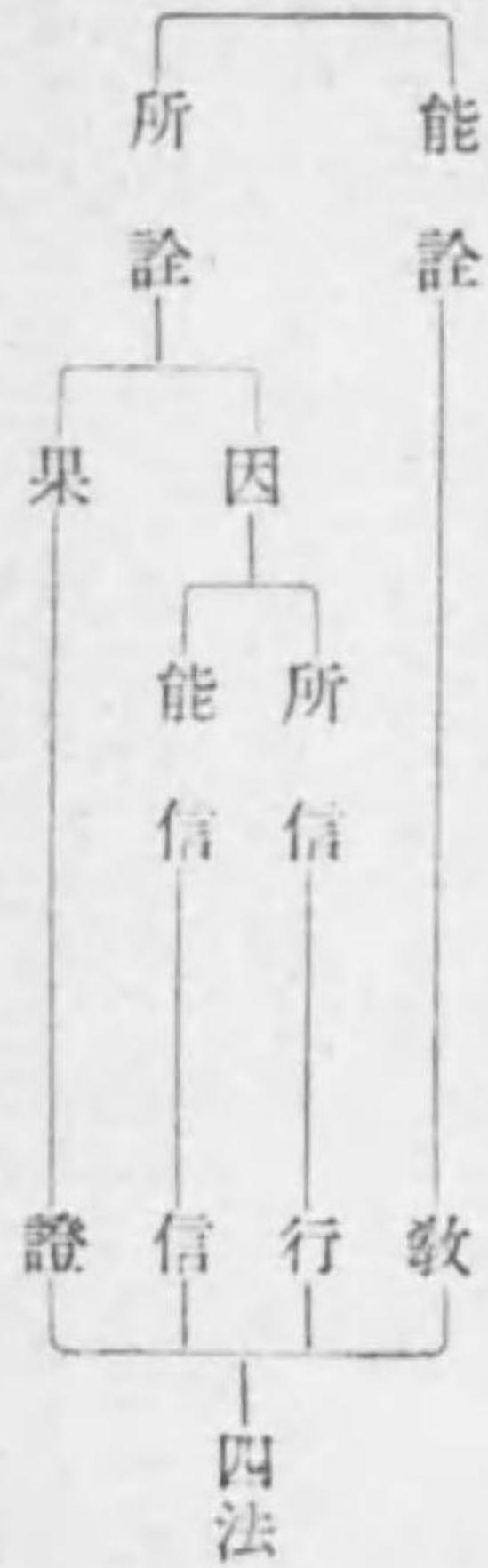
### 第一章 解題

#### 第一節 題號

#### 顯淨土眞實信文類三

【講義】淨土眞宗の信を顯はす文類。

【餘義】「行卷」に於て、淨土眞宗の眞實の行を説き明し終つたから、當卷に於いて、其眞實行を信する眞實の信を説き示し給ふのである。教、行、信、證の四法の次第は、上四一頁に於て、詳説したことであるが、更に説明の便利上、再び圖示すれば、





「行卷」に於て所信の行體は、心ゆくばかりに説き示され、そして常に行に離れぬ信を顯はされた。初めに「謹んで往相廻向を案ずるに、大行あり、大信あり」と標し、進んで私釋（三八七頁）には、「爾れば眞實の行信をうれば、心に歡喜おほきが故に、歡喜地と名く。乃至、何に況んや、十方の群生海、斯行信に歸命すれば、攝取して捨てざるが故に、阿彌陀佛と名づく云々」とて、行信を不離一體にせられ、最後に「凡そ誓願に就いて眞實の行信あり、亦方便の行信あり」と述べて、「正信念佛偈」を添へ、飽までも行信の不離を闡明なされた。

斯様に、「行卷」に於ては、常に行の中に信を含んでをつたけれども、「行卷」は飽までも「行卷」である。其正しく明す所は淨土眞實の大行である。初めに標された「大行あり、大信あり」の大信は正しく當卷の正しき所明である。藥の調合は既に了つた。今や正しく病者の吞む場合に臨んでゐる。人は何故に藥を吞まねばならぬか、如何にして吞むか、呑んだ結果はどうなるか。當卷はこれ等の問ひに對する完全なる解答である。誠に吞む人がなければ、折角調合せられた藥も其甲斐はない。單に甲斐がないと云ふよりは、藥其物の存在も無意義となるのである。これと同様に藥がなければ、吞むことは出来ぬ。「末燈鈔」に、

信の一念、行の一念、ふたつなれども、信を離れたる行もなく、行の一念をはなれたる信の一念もなし。乃至これ皆彌陀の御ちかひと申すことをこころべし。行と信とは、御ちかひを申すなり。云々

と行信の不離を述べられてある。然らば此の行信不離の具體的内容は如何なるものであるか。言ひ換へれば、この言葉に盛られたる眞の宗教的生命は如何なるものであるか。これぞ誠に大なる問題である。我聖人は、九歳の御出家より五十二歳の「本典」選述まで、大凡四十有餘年の深刻なる宗教經驗を蒐めたる當卷に於て、これに關する大教示を發表せられたのである。

第二節 選 號

愚禿釋親鸞集

高田本には、釋の字なし。

第二章 標 學

【大意】この「信卷」上下二卷に互りて、説き明すべき信を標し給ふ。この十字、御草本、御眞本、高田本ともに別序の次、本文標題の前にあり。

至心信樂之願 正定聚之機

【字解】一 正定聚之機 三定聚の一。正しく佛になるべき身に定められた機類。第十八願の他力念佛の機類は、現生に正定聚の位に入る。

【文科】「信卷」一卷に説き明す信を標學する一段。

【講義】この卷に明す信といふのは、第十八願至心信樂の願成就のもので、私共はこの如來廻向の信心を因として淨土往生の果をうるのである。以下「信卷」一部に互りて廣説せらるる廣大圓滿の信心は、この本願のほかはない。即ちその信心を獲た人は、正定聚の位に入つた機類である、今はここに本願の法とそれを受ける機を標し給ふ。眞實信はこれよりほかはないのである。

【餘義】一、第十八願名は、下に五名ある中に、特にこの「至心信樂之願」を擧げられたのは、どう云ふ理由



であるか。

それは第一に、この願名は、願文に親しい。他の四名は、皆この願の意味を取つて名づけたのであるが、この名は、第十八願の特色を闡明はしてゐる願文その儘を取りて名づけたものであるから、何人も拒むことは出来ない。

第二には、「至心信樂」の名は、十九、二十の二願と區別するに最も適當である。第十九願は「至心發願」、第二十願は「至心廻向」である。自力の至心發願を以つて定散の二善を修むることを誓ふは、第十九願である。他力の至心たる名號を自力で稱へて如來に廻向けることを誓ふは、第二十願である。然るに第十八願は、如來廻向の至心（名號）を廻向の信心を以つて信することを誓はせられた、絶對他力教である。故にこの「信樂」の二字は他の發願、廻向に比較して信心正因の第十八願の特色を遺憾なく發揮してゐる。殊に「當卷」は、信卷であるから、法然聖人の須ねみられた「念佛往生之願」といふ名目よりは、適に適應はしい。「念佛往生之願」は、行中に信を攝めた名目であるから、特に信心を詳説する當卷には不適當である。故にこの名を標せられた。

二、つぎに願名の下なる割註に「正定聚之機」と標せられてあるが、若しこれを「行卷」の例に従へば、「淨土眞實之行」に對して「淨土眞實之信」、「選擇本願之行」に對して「選擇本願之信」とでもありさうなものであるが、ここには唯「正定聚之機」と標せられた。この意味合ひを味はねばならぬ。

「行卷」の割註に關しては、前に委しく説明してあるが、要するに「淨土眞實之行」とは、聖道方便の行に對して、淨土眞實の正定聚であるとして決定した上、更に進んでこの正定業は我等凡夫の作つたものではなく、如來が因位に於て、他の行を選びすて南無阿彌陀佛の大行を選ばれたのであると標せられたのが、「選擇本願之行」の意味である。されば二種の割註は畢竟、六字名號一つである。即ち第十八願の機に信ぜらるる所信の對象であることが知られる。

善々は最初に之を心得た上で、漸次に進まねばならぬ。形式の上から云へば、「行卷」の體裁は、どうしても所信の對象を説いたものである。故に聖人は、信仰の對象を、二方面より懇切に説示せられた。一は成就つた行、その二はその行の根本たる親心のやるせなきことを仰せられた。この所信の眞意義を、私共の會得した所が、信仰である。もう一つ云へば、所信の法が、活ける人の上に感應せられた所に、救済が實現せられる。この實感、色味のほかに、行もなければ、信もない。即ち信の對象が、人と一致した時に、「金剛心之行人」とか、「至心信樂之行人」（此下の「六要鈔」）と云はれる。ここで行と信とが生きて來るのである。故に「淨土眞實之行」「選擇本願之行」は、「信卷」にては至心信樂の行者とならねばならぬ。若し之を文面の一致を求めて「淨土眞實之信」「選擇本願之信」とするならば、徒に血のない法から法へ廻轉するだけで、草葉を渡る風のやうなものとなつて仕舞ふ。聖人が、「行卷」の「淨土眞實之行」を受けて、「正定聚之機」とせられた所に、宗教的妙趣があるのである。そして又、斯様な所は、眞の宗教上の經驗ある人に取りては尋常茶飯事であつて、特に意を須ねむることを要せぬ程に顯著にして大いなる事項なのである。之を信なくして、單に外から研究することになると、實際に云いふ爲いすることになる。宗教上のごときは、或場合には、際立て論ずる時に、却つて其眞意に觸れてをらぬことに驚かねばならぬ。

三、斯様に行信は常に不離である。客觀的に本願の御手許で不離であるばかりでなく、本願之行が私共の上に信受せられた時に於ても不離なのである。この下、存覺師の「六要鈔」の釋は有難い。

註に、「正定聚之機」と言ふは、これ至心信樂の行人、即ち攝取不捨の益を蒙るが故に、現に生死と流れを分つ義を明す也。

と。即ち「淨土眞實之行」を信じた人が、現世に於て攝取の光益を蒙り、不退の位に定めらるることを申され



たのである。存師は「機」の字に着眼せられて、選擇本願を深く信する人であるから、「至心信樂之行人」と云はれた。宗教書は、常にこの「人」の上に味ふことを忘れてはならぬ。殊に當卷の如きは、「能信」を説かれたものであるから、常にこの「機」を「我機」として味はねばならぬことである。「和讃」に、

五濁惡世の有情の

選擇本願信すれば

不可稱不可説不可思議の

功德は行者の身にみたり

『御文』五帖目に、

一念に彌陀を頼みたてまつる行者には、無上大利の功德を興へたまふことを云々  
と仰せられた。皆この「正定聚之機」のことである。

然らば「正定聚之機」の内容は如何なるものであるかと云ふ疑問が起る。『尊號眞像銘文』本四丁に曰く、不退と云ふは、佛に必ずなるべきみとさだまる位なり。これすなはち正定聚のくらゐにいたるを、むねとすと、ときたまへるみのりなり。

と仰せられた。即ち必ず佛になるやうに定められた身が「正定聚之機」である。他力の廻向によりて、不退の位に入らせて頂いた機は、裏から云へば罪惡深重の機である、必墮無間の機である。この毒惡難化の機が、大悲の念力に呼び醒され、御與への至心信樂の因によりて、同時に正定聚の果を獲るのである。この人を指して、「正定聚之機」といふのである。

四、かやうに「至心信樂之願」等の標擧は、上「行卷」に對すれば、行信、能所、機法の關係あり、下「化卷」に對すれば、十九、二十の二願に對する機の差別を示すこととなる。即ち第十九願の「邪定聚之機」に對し、第二十願の「不定聚之機」に對して、「正定聚之機」となるのである。

### 第三章 眞實信

#### 第一節 略顯

【大意】 これより正しく淨土眞實の信を説き示されるのであるが、先づ初めに大略をつまんで示されるのがこの一段である。

第一項の總標には、「行卷」に「往相廻向を按ずるに大行あり大信あり」と標して、大行を廣く明すに對して、ここには正しく「信卷」の正所明たる大信をあげられたのである。

第二項に入つて、第一科には眞實信の相を出し、第二科にはその眞實信が、第十八願成就であることを示し、第三科にはその十八願の願名を列ね、第四科には大信心の獲難きをのべ、第五科にはその大信の利益を示す。

#### 第一項 總標

#### 謹案ニ往相廻向ニ有大信

【讀方】 つつしんで往相廻向を案ずるに、大信あり。

【字解】 一 往相廻向 往相とは我等凡夫の淨土へ往生する因果。是れ如來の與へ給ふ所であるから、廻向といふ。即ち如來より賜はりたる淨土往生の因果のこと。

【文科】 他力廻向の大信を總標する一段。

【講義】 義に「教卷」に於て、淨土眞宗には、往相廻向、還相廻向の二種の廻向あることを説いた。その往相



廻向の中に教行信證の四法のあることも説いた。そのつぎに「行卷」に於て、手近く往相廻向を頂いてみると、大行、大信の二つがある譯合ひを示し、その大行のことは、大體「行卷」に於て申し述べた次第であつた。今この「信卷」に於ては正しく、その往相廻向の中の大信を親しく味ははさして頂くのである。

第二項 正顯

第一科 大信の相

大信心者則是長生不死之神方  
忻淨厭穢之妙術  
選擇廻向之直心  
利他深廣之信樂  
金剛不壞之眞心  
剛不壞之眞心  
易往無人之淨信心  
光攝護之一心  
希有最勝之大信  
世間難信之捷徑  
證大涅槃之眞因  
極速圓融之白道  
眞如一實之信海也

【讀方】大信心はすなはちこれ長生不死の神方、忻淨厭穢の妙術、選擇廻向の直心、利他深廣の信樂、金剛不壞の眞心、易往無人の淨信心、光攝護の一心、稀有最勝の大信、世間難信の捷徑、證大涅槃の眞因、極速圓融の白道、眞如一實の信海なり。

【字解】一 長生不死之神方 長いきせしめて死なない不思議な方法。元は仙術に名く。聖人これを他力信心に轉用せらる。他力信心を獲れば無量壽の如來となる。故にこの信心は長生不死の神方である。

二 忻淨厭穢之妙術 淨土を忻ひ、穢土を厭はしむる不思議な術。他力信心のこと。凡夫は眼の前の苦樂等に心迷ひて、生死の厭ふべきこと、淨土の忻ふべきことを知らずにある。然るにこの信徳によりて、自と忻淨厭穢の妙味を味ふことが出来る。こゝに即ち深い人生に覺した如來の眞實徳である。

三 直心 正直心。他力信心のこと。如來廻向の信心は、（直心）を離れ、（直心）がなければならぬ。

四 金剛不壞 金剛は七寶の一。黄金の中より世で、色は紫石英のやう、百鍊すれども脆くせず、方寸の大きさでも、よく數十里を照すと稱せらる。他力信心の堅固にして壞れざるに譬へるのである。

五 淨信 清淨なる信心。これ「如來會」の第十八願成就文に出づる文字で、淨の一字にて如來清淨の信心、廻向の信心たることが知られる。

六 心光攝護 如來が大慈悲心をもつて護り給ふこと。光は智慧を表はす。悲智圓滿の胸に攝め取りて捨て給はぬこと。

七 大涅槃 梵語マハーニルワナ (Mahā Nirvāṇa)、大滅度、大圓寂靜等と譯す。灰身滅智の消極的涅槃にあらず、大眞理、大活動の證果をいふ。即ち大乘の涅槃、如來の涅槃をいふ。

八 白道 白は汚れなきことを表はす。即ち善業を指す。如來の清淨眞實なる善根のこと。道は本願の大道。故に白道は他力廻向の信心のこと。言葉の據處は善導大師の二河白道にいづ。かしこには食眞の水火二河の間に四五寸の白道ありといひて、吾等の煩悶の中にある信心に譬へてある。

九 眞如一實 眞如法性のこと。この眞如は唯一眞實にして、一切諸法の本體である。故に一實といふ。

【文科】大信心の相を示したまふ一段。

【講義】さて今この大信心のすがたを一口に申してみると、この大信心は、無量壽の生命を與へて、決して再び死ぬといふことのないやうにして下さる不可思議の方法である。また私共をして淨土を忻ひ、穢土を厭はしめて下される不思議の術の具して居るものである。阿彌陀如來の選びに擇んで御與へ下された信心で、邪偽は毛筋程も交つて居らない正直の心である。他力より與へて下された、深くして底なく、廣くしてほとりのない佛智の信心である。堅きこと金剛の如く、いかなることがあつても壞れるといふことのない眞實心である。この信心を



頂きさへすれば、淨土に生れさして頂くことは恰も掌を反すが如く易々としたもので、それ程の勝徳のある信心であるが、却つてそれがために、凡夫は疑ひを起し、中々容易に頂かれない眞實清淨の信心である。阿彌陀如来がその心光を以て攝取し護念して、その御力一つで、この水に畫をかくやうに變り易い凡夫心に得させ下される金剛不壞の一心である。三千年に一度花咲くと云はれて居る優曇華のやうに、誠に希な、そしてこの上のない勝れた大信心である。一切世間にこれ位信じ難い御法はない程、あまりといへばあまりに手取り早い成佛の近路である。大涅槃の證果を開かして頂く眞實の因である。ホンの一念に直ぐ様、功徳といふ功徳が悉く行者の身に充ち満ちて、命終れば直ぐ様に生死即涅槃、煩惱菩提體無二と、融通無礙に證らして下さるる大道である。理を極め實を盡して唯一無二の大功德の寶海たる信心である。

【餘義】一、「行卷」の「大行あり、大信あり」を標して、「大信あり」と標し、直ちに十二句を以て「大信心」を嘆徳せられた。この嘆徳の文を、一見すれば、徒に誇大な文字を羅列して、獨斷的に信徳を述べられたやうに思はれるが、吾々は、この文字の底に、聖人の深い感味を窺ひ、更に當卷に表はれたる聖人の痛切なる告白に聞き、此等の型に嵌つたやうな文字の中に流るる不盡の宗教的生命を掬うることを獲るのである。この豊麗なる十二句を味ふことによりて、吾々は一面精緻なる思想の形式を知り、更に其中に盛られた活々たる靈趣を味ふことが出来る。故に古來の碩學は、深く眼をこの文に注いで、句の配列を論じ、出據を求め、語義を解釋するに努めてゐる。従つて様々に説は傾れてゐるが、要するに、聖人の眞意は、往相廻向の大信心が人生に於ける絶對的の價値を有することを力説せらるるにあると思ふ。吾々は唯この見解に立ちて味うてゆけば、煩瑣な事柄に煩はさるる憂ひはないのである。素より語例や語據も見ねばならぬことであるが、聖人は夫等の文によりて、寄木細工のやうに作文せられたのではなくして、胸中の感味が泉の湧くやうに溢れ、常に愛讀せられた經釋の文字によつて

發表せられたのである。この考へなしに、徒にこれ等の文を解釋し又は學習することは、全く無意味なことである。私はこの考への下に、出来るだけ本文に親しき解釋に進みたいと思ふ。

二、左に大體上、大谷派の圓乘院師の説に依りたる科文を掲ぐ。





不死の要術也」の文に依ると見ゆ。更に此文を生むに至つた事實を求むれば、有名なる曇鸞大師の逸話である。鸞師が、佛道を修むるために、生命の短きを憂へて、陶隱居を訪ひて、仙經を授り、長安に歸りて偶々菩提流支三藏に邂逅ひて此事を語ると、三藏は、長生不死の法として、此「觀經」を授けられた。鸞師は驚き喜びて、仙經を焼き捨て「觀經」を色讀し、不死の信仰的生命を獲られた。聖人は最初に、これだけの背景と生命を有する一句をあげられた。

誠に吾等の最初に自覺する所は、この生命の念である。現世の欲樂も、感味も、肉體の生命の上に咲く花に過ぎない。肉體の根が枯れば、花は自と萎んでゆく。故に一般人の最初に冀ふ所は、この肉體の生命である。否、吾等は死の床に於て最も痛切に求むる所は、亦この肉體の生命である。されど肉體の生命は、我等が如何に烈しく求めても、一定の期間に限られてゐる。吾等は更に肉體以外に、他の生命を求めねばならぬ。我聖人は曇鸞大師とともに、この他力信念の上に不朽の生命を得せられたのである。信仰に蘇つた最初の叫びは、實にこの生命の感じである。吾等は、信念を獲ざる前は、肉體の死せざる中に、早や生命の死を感じた。吾等は地上の何物にも、不朽の生命を感ずることが出来ない。藝術にまれ、哲學にまれ、信仰以外の其他の一切の欲望物は皆この心の玩具にして、この心其物の生命とはならなかつた。我聖人は吉水入室の時、この不朽の生命を獲られたのである。信徳を擧ぐるに當つて、第一にこの「信は不朽の生命である」と申されたことは、極めて味が深い。第二「忻淨厭穢之妙術」は、善導大師の「般舟讚」の「厭へば則ち、娑婆永く隔り、忻へば則ち、淨土常に居す」の文に依ると見ゆ。信は煩惱の炎熱を拂ふ涼風である。吾等は沙漠の旅のやうな人生の行路に於て、常にこの大信心の綠蔭に蘇生する思ひがある。又、吾等が暗黒の世に、光明を認め、濁つた胸に、清淨を感ずるは、實にこの忻淨厭穢の妙術たる此の大信心の徳である。清淨先生曰く、「嗚呼、他力救済の念は、能く我をして、迷倒

苦悶の婆娑を脱して、悟達安樂の淨土に入らしむるが如し。乃至、然るに今や、濃濃濁々の間黒世裡にあつて、夙に清風掃々の光明海界中に遊ぶを得るもの、其大恩高德、豈區々たる感謝嘆美の及ぶ所ならんや。」とは、この信徳を味はれた尊い發現であると思ふ。

第三「選擇廻向之直心」以下三句は、順次に第十八願の三信に依られしと見ゆ。即ち「直心」は「至心」に當る。吾等は信念の徳によりて、衷心より誠を感ずることである。他人の自己に對する惡を容れ、心の奥底より感謝の念に咽ぶ。これ等の心は決して吾等の心ではない。如來が選擇して成就せられた廻向の至心である。即ち、「正直心にして、邪偽雜るなき」心である。

第四「利他深廣之信樂」は、三信の第二の信樂である。「疑蓋、開離ることなき」の心である。即ち二心なく如來を信する心である。この心も亦吾等の作つた心でない、如來廻向の心である。海の如く深く、虚空の如く廣い、利他大悲の心である。我胸に於て、小やかな信念は、かやうな廣大な大心海に、根ざしてゐることに驚かねばならぬ。

第五「金剛不壞之真心」は第三の欲生心である。善導大師の三心釋の中、この欲生心の下に、「斯信、深心することなほし金剛の如し」と仰せられた。即ち往生決定の信念が、金剛のやうに堅く、如何なる異學、異見、別解、別行の人々が、經釋を引いて、其信念を壞らうとしても、決して亂さるることはないと云ふのである。かやうな堅固の心は、どうしてえらるるか云へば、信心の智慧によりて、生れて來るのである。眞實に自己の實相を省察すれば、右へも左へも、どちらへも逃げ得る道がないことに驚かねばならぬ。自力の手足を働かさず、只このまま救済し給ふ本願を信するばかりとなる。この心の源を求むれば、如來の「助けねばおかぬ」といふ大悲の欲生心にほかならぬ。



第六「易往無人之淨信」は、「如來會」の願成就の「一念淨信」の文に依ると見ゆ。吾等の信心が、如來の心であるといふことは、我聖人の既に實驗せらるる所であつたが、これを經文の上に求むる時は「如來會」の「淨信」の文字であると喜ばれたのである。凡夫の汚濁の心から、淨信が生れる筈がない。一念の淨信は佛心でなくてはならぬと、我聖人は、この淨信の文字を、度々引用せられた。斯様に、如來廻向の淨信を獲れば、淨土へ往生することは、いと易いことであるが、自力に拘はりて、信心を頂く人がすくないから、往生する人は罕であるといふのである。「銘文」本六丁に、

易往而無人といふは、易往は、ゆきやすしとなり。本願力に乗すれば、本願の實報土に生るること疑ひなければ、ゆきやすしとなり。無人といふは、人なしといふ。人なしといふは、眞實信心の人は、ありがたきゆゑに、實報土に生るる人罕なりとなり。(御文二帖目 第七卷)

「易往無人」は、如來廻向の「淨信」の背景とでも云ふべきであらう。吾等は「易往無人」の背景によりて、鮮かなる「淨信」の相を見る。

第七「心光攝護之一心」は、圓乘院師は、第六と等しく、三信即一心の成就文としてあるが、今は次の文の機に對して、「觀經」の法を明した文とした。即ち「觀經」の第九眞身觀の文「一々の光明、徧く十方世界を照し、念佛の衆生を、攝取して捨てたまはず」等の一段を、善導大師は、共著「觀念法門」十一丁に取意して、現生護念増上縁である、と中された。我聖人は、「銘文」末五丁に、「觀念法門」の此文を解して、

まことの信心ある人をば、常に照したまふとなり。てらすといふは、かの佛心光に攝めとりたまふとなり。佛心光は、すなはち阿彌陀佛の御ところに、攝めとり給ふとしるべし。

信心の人は、常に佛の心光に攝護せらるるといふのである。尙ほ一歩進んで我聖人は、「唯信文意」十三丁に、

無礙光佛の心中に、攝め取り給ふ故に、金剛の信心となるなり

とも仰せられた。他力の一心歸命といふことは、如來の攝取不捨といふことである。ここに絶對他力の妙趣が、言外に横溢するを感じる。

第八「希有最勝之大信」は「觀經」の流通分の「此人はこれ人中の分陀利華なり」に依ると見ゆ。他力の信仰は、最も勝れた希なる御力である。この信を獲る者は、實に人中の分陀利華である。上の「心光攝護」は法の方より、信徳を嘆じ、今は機に寄せて、信徳を讃へたのである。

第九「世間難信之捷徑」は、「阿彌陀經」の「難信の法」に依ると見ゆ。「和讃」に、

十方恒沙の諸佛は、

極難信の法をと

五濁惡世のためにとて 證誠護念せしめたり。

「極難信之法」であるから、衆生をして疑ひを齎さしめんがために、十方諸佛は證誠を立てられた。されど此反面は、衆生の自力では信ぜられぬ法であることを示してゐる。吾々がいつまでも自力を固執してゐる間は、諸佛の證誠も其甲斐はないのである。故に吾等は、難信の法であると經驗するならば、我自力我慢を省みねばならぬ。「正像末和讃」に、

十方無量の諸佛の 證誠護念のみことにて

自力の大菩提心の かなはぬ程は知りぬべし

この「難信」といふ背景によりて、「愚鈍ゆき易き捷徑」(體)が有難く頂ける。

第一〇「證大涅槃之眞因」とは、他力の信心が、大涅槃を證する眞因であるといふのである。表に示すやうに古來より此句は、「如來會」に依つてゐると云はれてゐる。そは我祖が、「如來會」の十一願成就の文を、多くの感



興を以て味はれたからである。其の文に曰く、  
 阿難よ、彼國の衆生、若し當に生るべき者は、皆悉く無上菩提を究竟し、涅槃處に到らん。何を以ての故に。  
 若し、邪定聚及び不定聚は、彼因を建立することを了知すること能はざるが故に。  
 とある。「彼因」の「彼」とは涅槃をいふ。邪定、不定の人々は、涅槃に至る眞因を了知することが出来ない。  
 只正定聚の人、即ち他力廻向の信心を獲た人が、その因を了知したのであるといふ。即ち涅槃の眞因を了知する  
 とは、信心を獲ることである。我聖人は、この異譯の經文の上に、裏より判然と、涅槃の眞因を説示してあるこ  
 とを見て驚喜せられたのである。

第一「極速圓融之白道」は、信仰の内容を示したものである。信仰とは、絶對清淨の悟りのことでない。吾  
 等凡夫の迷心の中へ、佛心の入り満ちて下さることである。善導大師の「二河喻」に「中間に白道四五寸といふ  
 は、即ち衆生の貪瞋煩惱の中に、能く清淨願往生心を生ぜしむる也」とある。清淨願往生心は廻向の信心であ  
 る、即ち白道に喻へられたのである。この廻向の佛心は、貪欲瞋恚の凡心の中へ、一念聞信の立に、圓に融け  
 込んで下さる。夫が信心である。二河喻の所謂、貪瞋二河中の白道が夫である。信仰の内容は、この佛凡一體で  
 あると云ふのである。「華嚴經」に配したのは、同經が圓融無礙の法門を談する一代經中の大立物であるから、  
 それを取り込んで「極速圓融」と仰せられたと見るのである。

第一「眞如一實之信海」は、進んで信仰の絶對眞實を讚美せらる。「一念多念證文」廿一丁に、  
 眞實功德とまうすは名號なり。一實眞如の妙理、圓滿せるが故に、大寶海にたとへたり。一實眞如とまうす  
 は、無上涅槃なり。  
 と仰せられた。この文は、名號の徳を申されたのであるが、一念に彌陀を頼み奉る所に、この名號の無上大利の

功德は興へられる。即ち名號の功德はその優、信心の徳となる。否、名號が人にあはれて信心となるのである  
 から、信心の體は名號である。故に「眞如一實之信海」と仰せられたのである。之を「涅槃經」に配したのは、  
 上の句を「華嚴經」に配したやうに「涅槃經」をここへ取り込まれたものと見るのである。

第二科 大信の出據

斯心即是出於念佛往生之願

【讀方】 この心すなはちこれ念佛往生の願よりいでたり。

【字解】 一 念佛往生之願 第十八願のこと。此願を支那の註釋家は十念往生の願と名づくるに反して、善導大師は上  
 盡一形下至十聲一聲の見解に立ちて、唯念佛一つで助けるといふ本願であるといふので、念佛往生之願と名づけられた。即  
 ち十念といふ文字に拘泥せず、却つて十念は切りつめて云へば一念であると解し、總じて念佛往生と斷ぜられたことは、善  
 導大師の功績である。故に法然聖人は之を承けて「選擇集」に念佛往生之願と標し、我聖人亦之を相承せられたのである。  
 即ち念佛往生之願は第十九諸行往生之願に對するのである。善導、法然二祖は、この願をもつて四十八願中の王本願とし、  
 大悲の至極を表はす願とせられたのである。

【文科】 先に示した大信の源泉を説く一段。

【講義】 處で、このやうな廣大無礙の大信心は、どこから生れたのであらうか。阿彌陀如來が、因位の時、御  
 誓ひなされた第十八願から生れたのである。

【餘義】 この下に第十八願の内容を論すべきであるが、それはつぎの餘義、第十八願名論を見ていただきたい。

第三科 十八願名

斯大願名選擇本願亦名本願三心之願復名至心信樂之願亦可名往相信心之



願也

【讀方】この大願を選択本願となづく。また本願三心の願となづく。また至心信樂の願となづく。また往相信心の願となづくべきなり

【文科】信心成就の願たる第十八願の名を列ね給ふ一段。

【講義】斯の大願は、彌陀如來が、私共のやうな造無一善、具諸不善の凡夫をただのただで助けたい救ひたいといふ大悲の思召から、選びに擇んで、三信十念を誓ひ、信する一つ稱ふる一つで、この泥凡夫を光り輝く佛にして下されるのである。それであるから、この第十八願を「選擇本願」、「本願三心の願」、「至心信樂の願」と名づける。またこの願に誓はせられた三信に依つて、凡夫が淨土へ往生することが出来るのであるから、「往相信心の願」とも名づけるのである。

【餘義】一、第十八願名に就いて、この「信卷」には、五名を挙げ、「略本」には、この中、選擇本願、本願三心の願を除いて、他の三名を擧げてある。初めに願名を解釋し、つぎに排列の次第を調べて見よう。

(一) 念佛往生之願 この名は、元祖法然聖人より相承せられたるものであるが、源は善導大師に出てゐる。「禮讚」前序に、

但、信心をして求念せしむれば、上は一形を盡し、下、十聲一聲等に至るまで、佛願力を以て往生を得易し。元祖法然聖人は、この文を承けて、「選擇集」「本願章」の終りに、

諸師の釋には、別して十念往生の願と云ふ。善導獨り總じて、念佛往生の願と云へり。諸師の別して十念往生の願と云へるは、其意即ち周からざる也。然る所以は、上一形を捨て、下一念を捨つるが故なり。善導

の應じて、念佛往生の願と言へるは、其意即ち周し。然る所以は、上一形を取り、下一念を取るが故なり。

かくの如き理由によりて、元祖は善導大師の眞意を探りて、念佛往生之願といふ名目を第十八願に冠するに至つた。これは、上(一五八頁)に詳説せる如く、元祖は一願該攝の法門によりて第十八願の一願を以て、王本願として、生因の願となし、他の四十七願は欣慕の願とせられたのである。彌陀如來因位の昔、法藏比丘たりし時、五劫の選擇攝取せられた所は、實にこの念佛一行であつた。故に念佛往生之願と云ふのである。即ち第十八願には三信十念を誓うてある。三信は信心にして、十念は口稱の念佛である。善導元祖二師は、當時自力聖道門の教へる諸善萬行に對して、念佛一行の旗幟を押し立てられたことであるから、この第十八願中の十念の念佛を表面に力説して、三信は、其の裏面に置かれた。「和語燈錄」廿一丁には、三信を略せる理由をのべて、

衆生稱念必得往生と知りぬれば、自然に三心を具足する故に、此理をあらはさんがために略し給へる也。と仰せられたのは、この間の消息をよく示してゐる。

然るに親鸞聖人は、本願の眞意を探り、善導元祖二師の幽意を發揮せんがために、五願分相の法門を立て、口稱念佛を、第十七願の誓ひとなし、曇鸞大師の「論註」下の讚嘆門によりて、如實不如實の義を承けて、善導元祖の勸め給ふ口稱の念佛は、決して無信單行の念佛ではない、信心を獲て稱ふる他力の大行であると決せられた。即ち第十七願の大行を所信となし、その所信が信する人の上にあはるる時に、往生の業事成辨し、念佛往生の眞面目があらはれると云ふのである。されど、我聖人が分相門の建立とともに、善導、元祖の該攝門をも鼓吹せられたことは、「末燈鈔」廿七によりて明かである。



彌陀の本願と申すは、名號をとなへんものをば、極樂へむかへんと、誓はせたまひたるを深く信じて、となふるが、めでたきことにて候也。

即ち第十八願を、「稱ふるものを助ける」の本願と仰せられたのである。これが念佛往生之願と名づけらるる所以である。

斯の如く、我聖人が、第一に念佛往生之願と標せられたことによりて、吾等は二つの意味を知ることが出来ると思ふ。第一は、上に述べたやうな、謙虚の念を以て、善導、法然二祖の系統的相承を示されたことである。第二は内容的に行信不離を示さんがためであると思ふ。即ち「信卷」の正所明たる大信心が、念佛往生之願より出づると云ふことは、稱ふる者を助くるの仰せを、信することが、大信心であるといふ意味である。即ち明かに行信不離を力説せられた御恩召を觀得することが出来るのである。蓮如上人は、「御一代問書」(九下)に「聖人の御一流には、彌陀をたのむが念佛なり」と道破せられて、信と念佛の同一味を説かれた。ここに味ふべくして、云ふべからざる宗教的妙趣があるのである。法然聖人が、第十八願によりて、念佛一行を押し立てられた裏には、其念佛を信する信心の他力廻向たることを含み、我聖人が眞實の五願を別開して、第十七願を所信とし、第十八願を能信とせられたことは、單なる説明の便宜上須ゐられたる形式ではなくして、上の法然聖人の念佛一行の眞意を打ち出して信と念佛の具體的同一を説き、眞の宗教的實驗味を披瀝せられたのである。吾等は、常にこのふくゆかな宗教的實驗味を忘れず、いかに理論的に、法門の水際(水際)の立つ所でも、單なる理智に訴へて、解決し去るやうなことを致してはならぬと思ふ。行信交際の詳細は下六五〇頁、並に七七七頁を見て頂きたい。

(二) 選擇本願 此願名は、廣くは四十八願に通ずるけれども、此處には第十八願を指す。「選擇集」「本願章」には、「選擇とは、便ちこれ取捨の義也」と云ひて、法藏菩薩の四位の選擇によりて四十八願の成立せることを述べ、其の第十八願の下には、  
即ち今、前の布施持戒乃至孝養父母等の諸行を選び捨てて、專稱佛號を選び取る。故に選擇と云ふ也。  
と云ひ、勝劣、難易の二義を以つて、念佛一行の優秀を説き、更に獨留念佛章には、  
凡そ四十八願、皆本願なりと雖も、殊に念佛を以て往生の規となす。  
とて、念佛往生之願(第十八願)を以つて、四十八願中の王本願と定められた。我聖人はこれ等の眞意を取りて、特に第十八願に、選擇本願の名を冠せられた。

もと聖人にありては、選擇本願の名は第十八願のみにあらず、第十七、十一、二十二の三願にも名づけることであるが、それは、四十八願の特色を發揮する分相門の場合であつて、今は四十八願を、第十八の一願に總括する該攝門の分齊であるから自と特殊の意味をもつてゐるのである。尙ほ適切に云へば、次にあげた念佛往生之願を此の願名にて説明せんとせられたのである。即ち第十八願の「乃至十念」の念佛は、實に彌陀の因位に於て、選擇攝取せられた大行であることを示さんがために、其の念佛往生之願は即ち選擇本願であると、折り返して仰せられたことである。丁寧な説示とは云へ、云はば重複であるから、簡潔を主とする「略本」に略された。

(三) 本願三心之願 以下三名は、我聖人の特別に用ゐられた願名である。夫故に「行卷」の例に準じて、「亦名く可し」といふ言葉使ひをせられた。聖人の卑謙の念は、時々雲間に現はるる龍身のやうに、吾等の驕傲の眼を射ることである。

この願名の中、「三心」の言葉は、自力他力に通ずる。即ち「觀經和讃」の「定散諸機各別の、自力の三心」と云ふは夫である。今はその自力の三心を簡び捨てんために、「本願」の二字を添へられた。本願とは、彌陀の本意たる第十八願を云ふ。故に本願三心とは第十九、第二十の二願の方便の三心に對して第十八願の眞實の三心



といふ意味である。其三心を誓ひたる第十八願といふことを西派の道隱師は其著「略讚」に、此願名は下の三一問答を生むの本であると云つてをられる。旨趣の深い言葉であると思ふ。本願の三心が、行者の上には一心歸命となる。この信仰上に味ひ深い問答が下の三一問答である。あの波瀾萬丈たる一段と、この本願三心之願といふ名目が、この絃とあの絃と共鳴するやうに、互に相呼應してゐると云ふ所に、我聖人の深意も汲み取られ、不言の中に脈絡の通うてゐる當卷の深みに接することが出来る。

(四) 至心信樂之願 この願名の解釋に就いて二説ある。一には至心信樂とは、眞實信心の異名であると云ひ、二には、至心信樂之願は、具には至心信樂欲生之願であるが、其欲生は信樂に攝めて、文字を略したと云ふ。併し大體に於て、意味の上には一致してゐる説である。併し大體に眞實信心とするよりも、願文によりて、特に「至心信樂」と仰せられたことであるから、後の説が適切であると思はれる。欲生は第十九、第二十の二願の三心にも通じてゐるから、第十八願の特色としては至心信樂の文字である。「三經往生文類」の初めに、

また眞實信心あり。すなはち念佛往生の悲願にあらはれたり。信樂の悲願は、云々

と標して、第十八願文を出されてある。我聖人は、第十八願の主眼として、この信樂の二字を選ばれた。故に欲生を略して、至心信樂之願と命名せられたのである。

夫ならば「至心」も「欲生」と等しく、十九、二十の三心に通じてゐるから、夫を略して、簡明に信樂之願と標せられないのであるかと云へば、之にも種々の説がある。第一には、三心の體は一淨信である。即ち信樂の一をあげても缺くる所はないが、その上に二つをあげ、三つをあげてもよい。今は至心信樂の二つだけを挙げたといふ。第二には、至心信樂は、願力廻向の體であるから、其體によりて、願名とせられたといふ。第三には願名の排列上から立論してゐる。我聖人の命名せられた三名の中、第一の「本願三心之願」は、三信全體を掲げ、第二の

「至心信樂之願」は、初めの二信をあげ、第三の「往相信心之願」は、三心即一の信心一つをあげたのであるといふ。斯の如く、三、二、一といふ排列の順序上、欲生を信樂に攝して、「至心信樂之願」と標せられたと云ふのである。

どの説も相應の理由があるから、寧ろ此三説を合採にしたらよいと思はれる。即ち第十八願の主眼は信樂であるが、さればとて、其主眼だけを挙げねばならぬ理由は毫もない。今の場合の如きは、其主眼に至心の文字を添ふれば、益々豊富に第十八願の面目は表はれるのである。「如來の至心によりて成ぜられた信樂」、「如來の至心を體とする信樂」又は簡單に「眞實の信樂」といふ意味となりて、信樂の内容が、ふくゆかに表現れる。此種の事柄は、乾燥な思辨のみに奔らず、宗教的情操の上から見れば、圓に聖人の眞意を了解することが出来ると思ふ。

(五) 往相信心之願 三信即一心の上に就いて、この願名を立てられた。往相信心は、具には往相廻向之信心と云ふべきである。我聖人は、往相廻向の願として、三願を挙げられた。即ち第十一願は眞實證、第十七願は眞實行、第十八願は眞實信である。眞實證の第十一願は、「略本」に、往相證果之願と云ひ、眞實行の第十七願は、同書に、「往相正業之願」と名づけた。之と同様に、眞實信の第十八願は、「往相信心之願」と仰せられたのである。

二、願名の排列に就いては、初めに善導元祖二師を承けて念佛往生之願と標し、他流の諸師も共に許す一般的名をあげ、次に元祖によりて、其願名の内容を説明する選擇本願を出だされた。かやうに寛より狭に進み、本願三心之願以下は、已證の願名を出し、其中にも、三心、二心、一心と、寛より狭に及び、最後の「往相信心之願」に於て、恰も錐の先のやうに、最も鋭く第十八願そのものを、顯彰せられたのである。



第四科 大信の難得

然常没凡愚流轉群生無上妙果不難成眞實信樂實難獲何以故乃由如來加威力故博因大悲廣慧力故

【讀方】 しかるに常没の凡愚、流轉の群生、無上妙果の成じがたきにはあらず。眞實の信樂、まことにうるることかたし。何を以ての故に、乃し如來の加威力によるがゆゑに、ひろく大悲廣慧の力によるがゆゑに。

【字解】 一 凡愚 愚の凡夫といふこと。

二 加威力 吾等凡夫に加被し給ふ如來の威神力。本願力に對して、之を果力と稱す。正しく本願力が實現れて、救済の力となつた所である。果上の大威神力のこと。

三 大悲廣慧力 『如來會』の文による。廣大なる智慧力のこと。ここには本願力の替名である。上の果上の威神力に對して、之は因位の本願力である。

【文科】 大信心の獲難い由を示し給ふ一段。

【講義】 それであるから、曠劫以來、生死の海に沈み切りて出離の縁のない凡夫や、三界六道の暗を輪廻して解脱の光をみることの出来ない衆生にとつては、この上ない佛果の御證を聞くことが難かしいのではなくて、眞實の他力廻向の信心が甚だ得難いのである。他力廻向の信心さへ頂けば、自然に佛果の證は開かして頂くのである。それなら、何故に他力廻向の信心が左程に得難いかといふと、この信心は凡夫手造りの信心ではない。全く彌陀如來が衆生の上に加へ給ふ威神力と、大悲の廣大な智慧の御力とに依つて得させて下されるのである。それにも拘らず、自分の小さな計を慕つて他力の廻向に依らず、佛智の不思議を疑ふから他力の信心が得られないのである。

である。

【餘義】 一、此一段は文字餘りに簡勁であつて解し難い。然るに、『略本』には之を委しく説示されてある。今試みに、其の全文を擧ぐ。

然るに、薄地の凡夫、底下の群生、淨信獲難く、極果證し難し。何を以ての故に、往相の廻向に由らざるが故に、疑網に纏縛せらるるに由るが故に、乃し如來の加威力に由るが故に、博く大悲廣慧の力に由るが故に、清淨眞實の信心を獲れば、是心、顛倒せず、是心、虚偽ならず。信に知ぬ、無上の妙果成じ難きにはあらず、眞實の淨信、實に得ること難し。云々

斯様に、信を獲ぬ理由として、如來廻向に依らぬことと、自力疑心に拘はることの二因をあげ、又獲信の理由として、此の下と等しく、如來の加威力と、大悲廣慧力の二因をあげ、つぎに、妙果は成じ難いことではない、信心が獲難いのであると結んである。すらすら滞りなく會得せられる。

二、然るに、この下には、「眞實の信樂は獲難い」と標し、其理由として、如來の加威力に由ると、大悲廣慧力に依るの二因を、突如としてあげてある。甚だ其の意を取り難い。

されど、ここは文辭が、非常に強くなつてあることを頭におけば容易く會得せられる。何故かと云へば、「信心の獲難いのは、如來の威神力によらねばならぬから」と云ふ意味に過ぎないからである。即ち「如來の加威力に由る」と「大悲廣慧力に因る」の二句を、獲信難の理由と見るのである。何故に他力の信心が獲難いのであるかと云へば、如來の威神力より發起せしめ給ふ所であるからである。即ち、自身の努力によりて獲らるる信心ならば獲難いとは云はれぬ。吾等は自力の三信ならば、容易に起すことが出来るからである。然るに自力の計ひを加へず、他力廻向の信心を頂くといふことは、實に難中の難である。我聖人は、御自身も親しく、此難信の味を



經驗せられ、又御布教の際、多くの人々の難信の有様を御覽になりて、其の理由をここには、簡勁に「如來の御力によるがため」と仰せられたのである。この言葉の裏を返せば、「自力疑心が捨て兼ねるため、如來の御力に由り兼ねるため」となる。同じことであるが、「略本」は、親しく機情に立ち入りて母の如く懇篤に示し給ひ、此の一段は父のやうに、烈しく凡情を拂うて、他力信仰の特性を、説示せられたのである。

因みに、これと同じ行き方の文は、「化卷」(五十一)に「大信心海は、甚だ以て入り難し。佛力より發起するが故に」と云ふ文である。これによりて一層、明瞭となるやうに思はれる。

三、更に、此一段の造語は、「心地觀經」「報恩品」に、「菩提の妙果成じ難からず、眞實の知識、實に遇ひ難し」に依られたと云ふ説がある。暗合か、有意かは、判然せないけれども文の體裁としては面白い一致である。大理想は實現するに難くはないが、それを實現するやうに導く師に遇ひ難い、と云ふことは、徒に終局の結果を掴うとしてはならぬ。唯その結果を生む所の原因を獲ることを心掛けよ、と云ふ意味である。所が、吾々の實狀はどうかと云へば、常に効果を獲ることが急であるから、此の凡情の急所を衝いて「無上の妙果、成じ難きにあらず」、それは、信を獲れば必然的に結ぶ果實であるが、其信心が獲難いのであると、烈しく我々の自覺を促し給ふ所である。斯様に頂けば、「無上の妙果成じ難きにあらず」の句も、「如來の加威力に由るが故に」等の二句も、共に「眞實の信樂、實に獲ること難し」の一句を中心として、其意義を深からしめてをることが知られて來る。

四、最後に、加威力等の二力に就いて、初めの「如來加威力」は釋迦如來の佛力、つぎの「大悲廣慧力」は彌陀の佛力とし、其證據の文は、「略本」の「二尊の大悲に緣りて、一心の佛因を獲たり」であると云ふ説があるが、これはあまりに穿ち過ぎた説と思ふ。今は二力共に彌陀の佛力であると云ふ説が正しいと思ふ。そして「如來加威力」は、如來の光明の威神力、活動力で、つぎの「大悲廣慧力」は、如來の慈悲と智慧との御力を指すのである。古來、この二力を、光明と名號に配し、果上力と因願力等に配してゐるが、吾等は、分相的の説明を會得するとともに、亦之を元に戻して一つの不可思議なる佛力の兩面であることを忘れてはならぬ。即ち如來の光明の活動力は、そのまま大悲廣慧の力である。二にして一、一にして二。この宗教的妙趣の處に圓融、相即、不<sub>レ</sub>等の言葉が、その役目をなすのである。

第五科 大信の利益

遇獲淨信者、是心不顛倒、是心不虛僞、是以極惡深重衆生得大慶喜心、獲諸聖尊重愛也。

【讀方】 たまたま淨信をえば、この心顛倒せず。この心虛僞ならず。ここをもて極惡深重の衆生、大慶喜心をうれば、もろもろの聖尊の重愛をうるなり。

【字解】 一 淨信 清淨なる信心、他力廻向の信心のこと。

二 大慶喜心 信心の異名。慶喜金剛の信心のこと。信心を獲ると同時に、慶喜胸に溢る。その喜びの方面より信心を大慶喜心といふ。

三 聖尊 諸佛如來のこと。

【文科】 信徳の廣大なることを示し給ふ一段。

【講義】 それであるから、億劫にも得難いこの信心を得れば、凡夫の心は終日終夜、妄想顛倒に襲はれ通しに襲はれ、露微塵の眞實といふことなく、虚偽づくめではあるが、如來を信する信心のみは、顛倒を離れ、虚偽を



離れ、いつまで経つても、眞實のすがた美しく、退轉せず、繼續して下されるのである。かういふ意味合ひであるから、十惡五逆の大罪を負うた衆生が、この慶喜金剛の信心を得奉ると、諸佛如來は深く御喜び下されて、この衆生を尊び重んじ寵愛して下さるのである。

### 第二節 經文證

【大意】上に於て大信の相、大信の出據、大信成就の第十八願等を明したつたから、これよりは進んで經釋の文を引いて眞實信を證明し、讚嘆せらるるのである。  
この下は經文を引かるる所で、第一項因願文、第二項成就文、第三項獲信利益文である。

#### 第一項 因願文

##### 第一科 『大無量壽經』の文

至心信樂本願文大經言 設我得佛十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不取正覺唯除五逆誹謗正法<sup>上</sup> 聖人<sup>上</sup> 聖人<sup>上</sup> 聖人<sup>上</sup>

【讀方】至心信樂の本願の文、大經にのたまはく、設ひわれ佛をえたらんに、十方の衆生、心を至し、信樂して、我國に生れんと欲うて、乃至十念せん、もし生れずば正覺をとらじ。ただし五逆と、誹謗正法とをばのぞくと。已上

【字解】一 十念 十聲のこと。  
二 五逆 殺父、殺母、殺阿羅漢、出佛身血、破和合僧の五の逆罪。委くは下、「信卷末」の終りをみよ。

【文科】『大無量壽經』の第十八願文をあげらる。

【講義】至心信樂の本願、即ち『大經』の第十八願に曰く、若し我れ、佛となるであらうときに、十方世界の衆生、我が與ふるところの至心信樂欲生の他力の三信を得て、念佛を稱へるものが、我が眞實の淨土へ往生できぬことがあるならば、正覺はとるまい。唯五逆罪のものと、正法を謗るものとは、この限りではない。

##### 第二科 『無量壽如來會』の文

無量壽如來會言若我證得無上覺時餘佛刹中諸有情類聞我名已所有善根心心廻向願生我國乃至十念若不取菩提唯除造無間惡業誹謗正法及諸聖人<sup>上</sup> 聖人<sup>上</sup> 聖人<sup>上</sup>

【讀方】無量壽如來會にのたまはく、若しわれ無上覺を證得せんとき、餘の佛刹のなかのもろもろの有情の類、わが名をきき巴りて、所有の善根、心々に廻向せしむ。我が國に生ぜん願じて、乃至十念せん、もし生ぜずば菩提をとらじ。ただし無間惡業をつくり、正法およびもろもろの聖人を誹謗せんをばのぞくと。已上

【字解】一 無上覺 無上菩提、この上ない證。如來の正覺のこと。  
二 佛刹 佛國。諸佛の國土。

三 無間惡業 無間地獄へ墮在すべき惡業。即ち五逆罪のこと。因から云へば五逆罪。果から云へば五無間業である。又一説には、五逆罪を作る者は、他處へ赴かず、間隔なく、必ず地獄の苦みを受けねばならぬ故に、無間業と名くとも云ふ。

【文科】異譯の第十八願をあげて正依の文を助顯し給ふ一段。



【講義】『無量壽如來會』に曰く、もし我（法處比丘即ち法藏比丘）この上ない佛の證果を開いた時に、自餘の佛國のありとあらゆる衆生が、我が南無阿彌陀佛の御名の謂れをきき聞いて信すれば、われはその一念の時にあらゆる善根功徳を悉く行者に廻向して仕舞ふであらう。その衆生が我が國に生れたいと願うて、十聲の念佛を稱へるであらうに、もし我が淨土に生ることが出来ないやうなことがあれば、我は菩提のさとりを開かぬであらう。ただ無間地獄に墮つる五逆罪を造るものと、正法と諸佛菩薩聖者を誹謗するものはこの限りではない。

第二項 成就文

第一科 『大無量壽經』の文

本願成就文經言諸有衆生聞其名號信心歡喜乃至一念至心廻向願生彼國即得往生住不退轉唯除五逆誹謗正法

【讀方】本願成就の文、經にいはいはく、あらゆる衆生、その名號をききて、信心歡喜せんこと乃至一念せん。至心に廻向したまへり。彼國に生ぜん願すれば、すなはち往生をえ、不退轉に住せん。ただし五逆と誹謗正法とをばのぞくと。已上

【文科】『大經』成就文をあげて本願の三心が機受の一心であることを示す一段。

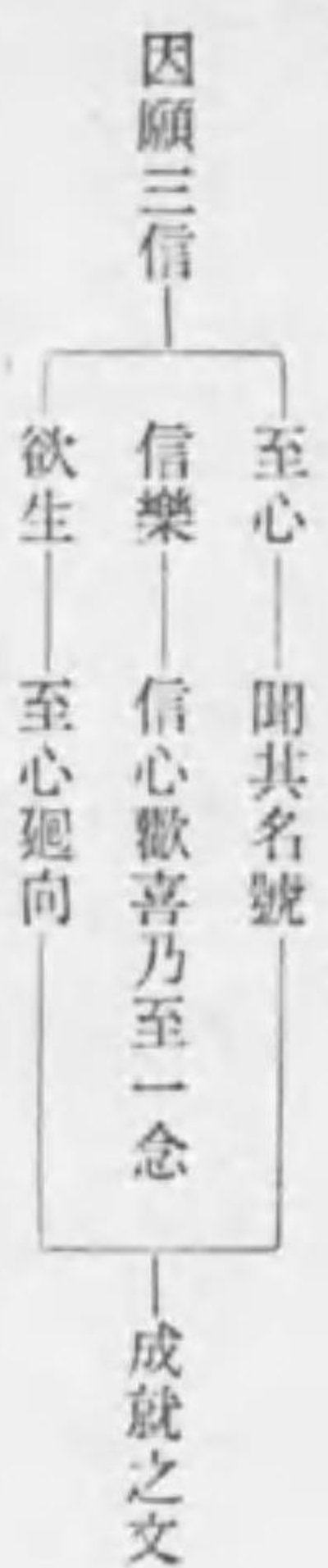
【講義】『大無量壽經』下卷の初めに出て居る第十八願成就の文に曰く、十方世界のありとあらゆる衆生が、この南無阿彌陀佛の名號の謂れをきいて心が開け、歡喜を生じ、一念の信心をおこすならば、如來は至誠の心を以て、一切の功徳善根を悉くその衆生に廻向して下されるのみである。この衆生が彼の如來の安樂淨土へ往生したいと願ふならば、直に往生することが出来るので、この娑婆に居ながら、二度と退轉するやうなことはない正定

聚の位に定まるのである。唯、五逆罪を作るものと、正法を誹謗するものとは、この中から除かれるのである。

【餘義】一、第一項、第二項に互りて、『大經』第十八願の因願と成就の文が引用されてある。そして『如來會』の文は、正依の『大無量壽經』の文を助顯せんがためである。即ち因願の至心、信樂、欲生の三信は、行者の機に彰はるる時は、一信心であることを示さんがために成就の文を引かれたのである。

これ等の因願の文と、成就の文の委しいことは下（六九八、八〇一頁以下）に述べることであるが、ここには、大體に於て、因願の文と成就の文の配當を知る必要がある。

二、第一は、三信分相の義。



因願の「至心」が「聞其名號」に當ることは、下の至心釋に、

「至心は則ちこれ、至徳の尊號を其體となす也」

とあり、如來の清淨な眞心は、名號の中に圓に現はれて、親しく私共の心に臨んで下さる。

又信樂が信心歡喜に當ることは、下の信樂釋に、

如來、苦惱の群生海を悲憫し、無礙廣大の淨信を以て、諸有海に廻施し給ふ。これを利他眞實の信心と名づく。

とあり。即ち私共が、如來廻向の淨信を頂いた所が、「信心歡喜」であることは明かである。



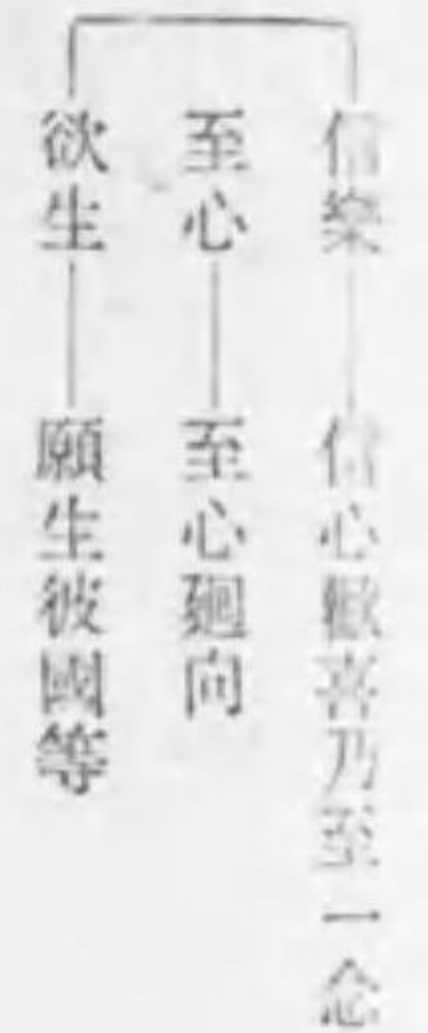
最後に、「欲生」が「至心廻向」に當ることは、下の欲生釋に、  
 利他眞實の欲生心を以て、諸有海に廻施し給ふ。欲生は、即ちこれ廻向心なり。  
 と判然と仰せられてある。即ち「我國へ生れんと願ぜよ」と云ふ如來の欲生心は、あらゆる功德を施し給ふ至心廻向の御心である。

第二は、三信即一の義。この時は、本願の三信を機に受ける時は、唯一信樂であると云ふ義である。本願三信機受一信樂——信心歡喜、即ち「聞其名號」の「聞」は「信心」であつて、至心の體たる名號の謂れを聞き開いた了解である。そして歡喜は、信心の泉より迸る悦豫の念、「一念」は信心開發の時刻の極促せることを彰はし、至心廻向は、今胸中に開發せられた信念は、全く如來の廻向し給ふ所であることを示す。「願生彼國」は願往生心、「即得往生住不退轉」は往生決定することにして、共に信一念のところに具はる。かやうにして願成就の文は、全く因願の三信が、行者の機に彰はれて、一信心となることを説示した文となるのである。故に下の信樂釋の下に三信は唯一信心であることを彰さんがために、成就文を引いて、「本願信心願成就文」と命名し、態と信樂と云はず、そして其引文も、「乃至一念」だけに止めて、「至心廻向」以下の文を引かず、簡明に三即一の義を引證せられてある。

第三、承上起下の義。此の説は覺如上人の「願々鈔」六丁に出てある。

至心廻向の四字は、成上起下とならふなり。成上と云ふは、かみの信心歡喜を引起すること、法藏因中の至心より生ず。起下といふは、しもの住不退轉の前途を達すること、また至心に廻向したまへる如來大悲の無縁の慈悲より成ぜらるるものなり。

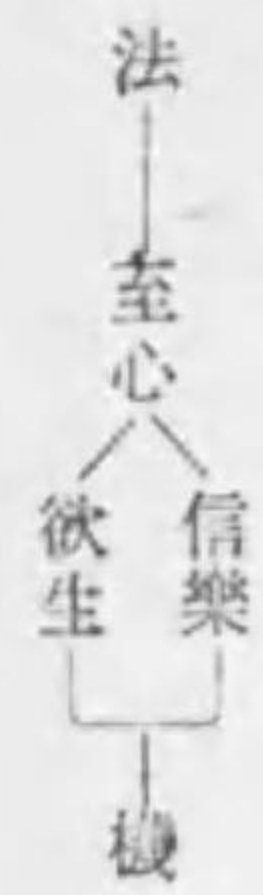
即ち此義は、「ならふなり」の語勢によりて、親賢聖人より、如信上人に傳はり、ついで覺師に傳へられた口傳の説であることが知られる。之を圖示すれば、



此説の根柢は、如來の大悲廻向を示すにある。即ち信心も往生も、皆如來の與へ給ふ所にほかならぬ。夫を打ち出したのが此「至心廻向」の四字である。信心歡喜の廻向であることを示すは、上を成するのである。願生彼國等の願往生心や往生の定ることも廻向であると示すは、下を起すのである。至心廻向が中間にありて、信心と往生を私共に與へるといふ説である。「一念多念證文」の初めに、

至心廻向といふは、至心は、眞實といふことばなり。眞實は、阿彌陀如來の御こころなり。廻向は、本願の名號をもて、十方の衆生に、あたへたまふ御のりなり。

とあるは、此説の根柢をなしてゐるやうに思はれる。汝の借金は私が引受けて返してやると、親が其子に云うたとする。此場合、其子が親の慈悲を喜んで、云はるる通りになつたとすれば、親が子に、「大丈夫だ、私の云ふことを信するがよい」と云ふことも、「借金を返して、身の立つやうにしてやる」と云ふことも畢竟、「親たる自身を信用させたい」「身の立つやうにしてやりたい」といふ親の眞實心のほかはないと云ふのである。この説を機法に分てば、





三、三義ともに理義明かな説である。第一の三信分相の義は、教理的に信心の生起と因果を明し、第二の三信即一の義は、實踐的に、信の一念の絶對性を示し、第三の承上起下の義は、深重の大悲によりて、信心の起ることを彰はしてゐる。

第二科 『無量壽如來會』の文

無量壽如來會言他方佛國所有有情聞無量壽如來名號能發一念淨信歡喜愛樂  
所有善根廻向願生無量壽國者隨願皆生得不退轉乃至無上正等菩提除五  
無間誹謗正法及謗聖者上

- 【讀方】 無量壽如來會にのたまはく、他方の佛國の所有の有情、無量壽如來の名號をききて、よく一念の淨信をおこして歡喜せしめ、所有の善根、廻向したまへるを愛樂して、無量壽國に生ぜん願せば、願にしたがひてみなうまれ、不退轉乃至無上正等菩提をえん、五無間、正法を誹謗し、および聖者を謗らんをばのぞくと。日上
- 【字解】 一 不退轉 梵語アワイワルチカ (Avivartika) の譯。原音は阿毗跋致、阿惟越地と音譯せられてある。佛道修行の過程において、既に獲たる功徳を決して退失することなきをいふ。正定聚のこと。
- 二 無上正等菩提 阿耨多羅三藐三菩提の譯。佛の證りのこと。
- 三 五無間 五無間業。五逆罪のこと。一、極無間地獄へ墮在すべき業因なる故にいふ。
- 四 正法 正しい教法。
- 五 聖者 佛と僧を指す。

【文釋】 經の第十八願成就の文をあげて正依の成就の文を對讀したまふ一頁。

【講義】 『無量壽如來會』の第十八願成就の文に曰く、他方の佛國の一切の衆生が、無量壽如來の御名南無阿彌陀佛の御謂れをききひらいて、一念の清淨眞實の信心をおこし、如來の方から廻向して下されたあらゆる善根功徳を歡喜び、愛好しみ、無量壽佛の國に生れたいと願ふならば、すべてみなその願の通りに直に往生の利益を得ることに定まるであらう。その衆生は娑婆にゐながら不退轉の位に入り、命終れば直ぐ極、この上ない佛の果證を開かして貰ふであらう。ただし五無間業を作るものと、正法と佛菩薩聖者を誹謗するものは、この中から除かれるのである。

【餘義】 一、この「如來會」の成就文中、我聖人の最も重要視せられた文字は、「一念淨信」である。正依の大經の成就の文には、只「信心歡喜乃至一念」とある。これだけでは、因願の「乃至十念」と等しく稱名の一念と見られぬことはない。聖人は、成就の文の上に、信の一念の證文を見たいと思はれたのである。然るに異譯の本經に「一念淨信」の文を見て、非常に喜ばれたのである。

正依の成就文には、一念の文字は、信心の下にあるが、ここには「一念淨信」とあるから、信の一念であることは明白である。聖人が御自督の上に、信の一念の絶對性を感得せられたことが、今や明かに聖教の上に、而も異譯の根本經の上に證明せらるるに至つたのである。

即ち正依には「信心」とある所を、ここには「淨信」とある。これ「清淨の信心」の意味である。この淨信は凡夫の迷妄汚濁の心から出づる筈はない。如來の清淨心であることは明かである。即ち淨信の淨の一字の上に、他力廻向の意義を認めることが出来るのである。

二、つぎに「歡喜愛樂」の四字に就いて、高田本、坂東本には、「歡喜せしめ」として上の一念淨信に屬し、



「所有の善根廻向したまへるを愛樂して」と、愛樂を下につけてある。然るに又、「三經往生文類」には、能く一念の淨信を發して、歡喜愛樂せむ。所有善根廻向せしめたまへり。

と點して、歡喜愛樂を上にも屬されてある。大體の上から云へば、此の相違は文面の相違に過ぎないと思はれるが、併し斯様な際立つて異つてゐるに就いて、聖人の御眞意を知らねばならぬ。此點を明かにするには、此の文の意を會得することが近道である。即ち歡喜愛樂の念は、一念の淨信と同時にあるのである。信心と歡喜は時間的に別々に起るものでない。疑ひの霽れた信そのものに、歡喜が孕まれてあり、眞の歡喜愛樂には、必ず信があるのである。それでこの一段の文も、「三經往生文類」のやうに、「歡喜愛樂」を、一念の淨信に屬する方が至當である。従つてこの時は、下の「所有善根廻向したまへり」は、其一念の淨信とともに、名號の大善大功德が廻向せられる、と云ふことになる。此の場合には、三信の中、信樂を主とした時である。故に下の信樂釋（七四〇頁）には「三經往生文類」と同じく、「能く一念の淨信を發して、歡喜（愛樂）せむ」と點せられてある。

然るに、如來の欲生心、即ち至心廻向の方面を主とする際には、「所有の善根廻向したまへるを歡喜愛樂して」となるのである。即ち一念の淨信の所に、如來は大善大功德を廻施し給ふ、其廻向の功德を歡喜愛樂するといふことになる。故に下の欲生釋の下の此の文點は歡喜愛樂を下に屬してある。これにて聖人の御思召が會得せらるることである。

三、上述によりて、高田本、坂東本に、歡喜を上にも屬し、愛樂を下にも屬せられたことは此二意を示さんがためであることが、自と解せられるやうに思ふ。即ち無量壽如來の名號を聞いて、一念の信心を發す時の喜びは、同時に、大善大功德を廻向せられた時の喜びである。如來の三信が、吾等に彰はれた一念同時に歡喜愛樂があるののである。聖人は、この根柢に立ちて、其場合に應じて、四字全體を上にも屬し、下にも屬し、又は二字づつ分ちて上下に配せられた。故に完全にするには、此の四字を上下に配して、二度讀むことにすればよいと、先輩は申してをられる。

第三項 獲信利益の文

第一科 『大無量壽經』の文

又言聞法能不忘見敬得大慶 則我善親友是故當發意上曰

【讀方】 またのたまはく、法を聞てよく忘れず、みて敬ひ、得て大に慶ばば、則ち我がよき親友なり。是のゆゑに當に意をおこすべしと。

【文科】 『大經』下卷の偈文をあげて信徳を示す。

【講義】 また前に引いた『大無量壽經』に曰く、名號の御謂れをきき聞いて忘れず、願力を心の中に浮べ見て、我が身はわるき徒ら者とへり下り、法を敬ひ、大慶喜心を得れば、その衆生こそ、眞に我が（釋迦如來自らを指し給ふ）善き親友である、それであるから、衆生等よ、みな速に無上道心を發せよ。

第二科 『無量壽如來會』の文

又言如是等類大威徳者能生廣大佛法異門上曰

【讀方】 又のたまはく、是の如き等の類は大威徳の者なり。よく廣大佛法の異門に生ぜん。上曰



【字解】一 廣大佛法異門 極樂淨土のこと。極樂の衆生をして、直ちに無邊廣大の佛法を證らしむる彌陀の淨土は、諸佛の淨土と異なる特殊の世界であるからである。

【文科】 異譯を引いて正依を助顯する中、此の文は大威德者の文である。

【講義】 また『無量壽如來會』下卷に曰く、是くの如き眞實信心の人々は、誠に廣大なる威德を身に具へた人である。この人々のはかの廣大佛法の異門である極樂へ容易く往生することが出来るのである。

又言如來功德佛自知 唯有世尊能開示 天龍夜叉所不及 二乘自絕於名言 若諸有情當作佛 行超普賢登彼岸 敷演一佛之功德 時逾多劫 不思議於中間 身滅度 佛之勝慧莫能量 是故具足於信聞及諸善友之攝受 得聞如是深妙法 當獲重愛 諸聖尊如來勝智徧虛空 所說義言唯佛悟 是故博聞諸智士應信我教如實言 人趣之身得甚難 如來出世遇亦難 信慧多時方乃獲 是故修者應精進 如是妙法已聽聞 常令諸佛而生喜

【讀方】 又のたまはく、如來の功德は佛のみ自らしるしめせり。ただ世尊ましましてよく開示したまふ。天龍夜叉の及ばざるところなり。二乘自ら名言をたつ。もしもろもろの有情、まさに作佛して、行、普賢にこえ、彼岸にのぼりて一佛の功徳を敷演せんとき、多劫の不思議を逾ん。この中間において、身は滅度すとも、佛の勝慧はよく量ることなけん。このゆゑに信聞およびもろもろの善友の攝受を具足して、是のごときの深妙の法を聞くことを得ば、まさにもろもろの聖尊に重愛せら

ることをうべし。如來の勝慧は衆生に攝し、所說の義言はただ佛のみまじりたまへり。このゆゑにひらく諸智士をききて、わが教如實の言を信ずべし。人趣の身うることはなはだかたし。如來の出世に遇ふことまたかたし。信慧おほきとき、方に乃し獲ん。このゆゑに修せんもの精進すべし。かくのごときの妙法、すでに聽聞せば、つねに諸佛をしてしかもよろこびを生ぜしめたまつるなりと。抄出

【字解】 一 天 八部衆の一。梵天、帝釋、四天王等の天部のこと。

二 龍 八部衆の一。龍神、難陀龍王、跋難陀龍王等を指す。

三 夜叉 八部衆の一。梵音ヤクシャ (Yaksha)、藥叉、閻叉と音譯す。勇健、暴惡等と譯す。能く虚空を飛行する故に、捷疾鬼とも稱せらる。之に三種あり、天夜叉、虚空夜叉、地夜叉なり。この中、地夜叉は飛行することが出来ないといふ。

四 普賢 普賢菩薩。梵語サマンタパドラ (Samantha-bhādra)、三曼多跋陀羅と音譯す。普は普通、賢は賢善。その徳、法界に普きが故にこの名あり。利他大悲の行を司る。華嚴三聖の一として釋尊の脇士となり、六牙の白象に乗る。

五 善友 善知識のこと。

六 攝受 好意をもつて迎へること。

七 聖尊 諸佛のこと。

八 博聞諸智士 諸智士とは彌陀如來の眞實報土のこと。諸智は一切智をいふ。「如來の諸智を疑惑して」等と、彌陀如來の智慧を諸智と稱す。今は彌陀の智慧の淨土といふ意味にて諸智士といふ。因みに現在の『如來會』には「博聞諸智士」とあり、此時は博學の智者といふ意味であるが、今は聖人の御引用に従ふ。

九 人趣 五趣の一。人間世界。娑婆世界のこと。

【文科】 異譯助顯の中、この文は如來功德の文である。

【講義】 また同じき『無量壽如來會』に曰く、阿彌陀如來の功德、語を換へていへば名號の功德は佛果の位に



上り給へる如來のみ知るしめし給ふ所である。それであるから、この名號の功德は大聖世尊のみ、獨り善く説き述べて下されたのであつて、天、龍、夜叉等の八部衆の到底、心も語も及ばぬ所であり、聲聞も菩薩も名字言句を絶して、何ともかとも思うたり言うたりすることの出来ない所である。

茲に譬喩を設けて曰へば、一切の衆生が一時に佛となつて、その大慈大悲の行徳は因位の普賢菩薩のそれに超え勝れ、大涅槃の彼岸に登りつめて、その佛力を以て、阿彌陀一佛の功德を説き述べ給ふに、それも一劫や二劫ではない、不可思議といふ數にもつもられぬ程の大數の多劫の間説き述べても説き盡されず、遂に説き盡されずして、すべての佛達が涅槃の雲に隠れ給うても、なほこの阿彌陀佛の殊勝の御智慧をば量ることが出来ないのである。

名號の御謂れを信する信と、その御謂れをきく聞と、それから、善知識の哀愍の御心からかけて下される護念と、この三者が具足して、是くの如き不可思議な微妙な御法を聞いて信することが出来れば、諸佛世尊の敬重と寵愛とを受けることが出来るのである。

彌陀如來の殊に勝れ給へる智慧は廣大にして、虚空とその涯を同じうしてゐる。その彌陀如來の殊勝の智慧を説き述べ給うた『大經』の義理合は、唯果上の佛のみ悟り給ふ所で、因位の人の伺ひ知る所ではない。それであるから、智者も愚者も善人も悪人も、すべて押しなべて、この彌陀如來の眞實報土のことをきいて、我が（釋迦如來自らを指し給ふ）所説の法門、義理に契うて詐偽のない眞實の語を信ぜよ。

凡そ人間界に生を受けるといふことは、非常に難しいことで、如來の御出世に遇ひ奉ることも至つて難いことである。信心の智慧も、多生曠劫の中で、たまさかに今初めて得させて頂くのである。それであるから、この念佛修行の人達は精を出して聴聞いたさねばならぬ。是くの如き甚深微妙の法門を聴聞すれば、諸佛如來は常にこれを自分のことの如く、喜んで下されるのである。

### 第三節 釋文證

【大意】上に經文を引き了つたから、是より下は七祖の論釋より、他力信心の證文を引用せらる。發覺、善導、源信の三祖の文を撰びて、餘の四祖をこの中に攝在せしむる御意である。

初めに『論註』の讚嘆文の釋を擧げられた。此の文は鸞師が稱名憶念に就いて、如實、不如實の義を立て、如實の修行は、信心一つであることを明かにせられた文である。此の文を引けば、第一に龍樹菩薩の『易行品』の眞旨は自ら彰れ來る。即ち『同品』九丁に、

若し人、善根を植ゑ、疑へば則ち華開かず。信心清淨なる者は、華開いて則ち佛を見たてまつる。

と、信疑の得失をあげて、「稱名憶念」「念我稱名」の内容を明かにせられたことが、この三三不信の釋に來りて、非常に明瞭となつてゐる。

次に天親菩薩の『淨土論』の眞精神は、云ふ迄もなく、この剴切なる註釋書なる『論註』の中に含まれてゐることは明らかである。論の「世尊我一心」等の一心も、『論註』に來りて、初めて本願の三信を合したる行者歸命の一心たることが知られるのである。即ち上の文に於て、鸞師は、三三不信をあげたりて「是故に論主、建に我一心と言へり」と云はれた。

『淨土論』の根柢たる一心は、『論註』に於て、初めて煩惱具足の我等が起す所の他力の信心であることが知られて來た。

次に道轉禪師の力説せられた三三不信の釋は、鸞師の此文に依られたことは明かであるから、上二祖と等しく、此文中に攝在せらるることである。斯の如く、『論註』の此の文は七祖の中、上の四祖を代表する。

次に廣く善導の釋文を引いて、三心の眞意を述べ、深く他力信心の内容を明かにせられた。善導大師の三心釋は、源信和尙の上には、『往生要集』中本三丁に引かれ、法然上人の上には『選擇集』「三心章」の根柢となつてゐる有名なる釋文で



ある。従つて此の釋文は下二祖を攝在することは、云ふまでもない。但し此處に源信和尚の文を引かれたのは、上に引きたる三倍即一の一心は、即ち金剛心である、菩提心であると、一方には信徳を嘆じ、一方には上の諸文を總括する意味に於て引かれたのである。更に委しくは、各文の下の餘義を見て頂きたい。

第一項 曇鸞大師の釋文

第一科 『論註』の文

論註曰稱<sub>レ</sub>彼<sub>レ</sub>如來名<sub>ニ</sub>如<sub>レ</sub>彼<sub>レ</sub>如來光明智相<sub>ニ</sub>如<sub>レ</sub>彼<sub>レ</sub>名義<sub>ニ</sub>欲<sub>ニ</sub>如<sub>レ</sub>實修行相應<sub>ニ</sub>故稱<sub>レ</sub>彼<sub>レ</sub>如來名者謂<sub>レ</sub>稱<sub>ニ</sub>無礙光如來名<sub>ニ</sub>也

如彼如來光明智相者佛光明是智慧相也此光明照十方世界無有障礙能除十方衆生無明黑闇非如日月珠光但破室穴中闇也

【讀方】 論註には、かの如來のみなを稱し、かの如來の光明智相のごとく、かの名義のごとく、實のごとく、修行し相應せんと欲ふがゆゑにといへり。稱彼如來名といふは、いはく、無礙光如來のみなを稱するなり。

如彼如來光明智相といふは、佛の光明はこれ智慧の相なり。この光明、十方世界をてらすに障礙あることなし。よく十方衆生の無明の黒闇をのぞく。日月珠光のただ室穴のうちの闇を破るがごときには非ざるなり。

【字解】 一 論註 上下二卷。具には『淨土論註』。曇鸞大師の著。天親菩薩の『淨土論』を註釋したるものにて、上卷の終りには、八番の問答を出して、惡人救濟の眞意義を明し、下卷の終りには、他利利他の深義を釋して絕對他力救の眞意義を明してある。眞なる註釋書ではなくして、大師の大いなる人格にあらはれた信印書である。

【文釋】 『論註』の文によりて光明智相を示す一段。

【講義】 曇鸞大師の『淨土論註』に曰く、『淨土論』に「彼の如來の御名を稱し、彼の如來の光明智相の如く、彼の名義の如く、如實に修行し相應せんと欲するが故に」とあるが、この中、彼の如來の御名を稱するといふは、無礙光如來の御名を稱へ奉ることをいふのである。

つぎに「彼の如來の光明智相の如く」とあるが、その光明といふは、智慧の相である。即ち智慧の體が外にあらはれたが光明である。この如來の光明は、十方の世界を照し給ふに、少しも障り礙げとなるものはない。十方世界のすべての衆生の胸に輝る無明煩惱の黒闇までも悉く照し破つて下さるのである。世間の日輪や月輪や又は珠玉の光が、纔に室とか窟とかの中の間を照し破るに比べられるものではない。

【餘義】 一、無礙光如來の光明名號の徳は、能く我等の一切の無明を破ると云ふ。然らば其の無明とは如何なるものであるか。

てい武に明無

古來、これに就いては種々の説に分れてゐる。存覺師は此の下の『六要鈔』に、一切の言の中に、惑障、業障、報障、諸の不善を攝むべし。

と云はれ、一切の無明とは、我等のあらゆる業煩惱のことであるとせられた。他説には、總無明、別無明に分ち、總無明は、一切の惡業煩惱を指し、別無明は、不了佛智の疑惑をいふと説く。或は根本無明、枝末無明、又は相應無明、不共無明の名目を擧げてをる人もある。

これ等の諸説を取捨するに先立ち、吾等は此破闇滿願の場合を明瞭に會得しておく必要がある。さうでない徒に平坦な説明に流れて、文の眞意義を逸する恐れがあるからである。其破闇の場合は、云ふまでもなく、信の一念である。吾等が如來を信する一念に、如來の光明と名號の徳によりて、吾等の一切の無明が破られるのであ



る。此の場合を明瞭にしておけば、無明の宗教的意義は自と明かになるのである。

二、性相決判の上、若くは心性研究の上から云へば、迷事、迷理の無明、根本枝末の無明、俱生分別の無明等、闇夜に道を取り違へる如き、凡て眞智を缺いた痴闇を指して無明と名けられるのであるが、正しく宗教的實驗の上から云へば、自力迷情の疑心を指すものと云はねばならぬ。「口傳鈔」上四丁に、

しかるにいま宿善ときいたりて、不斷難思の目輪、貪瞋の半腹に行度するとき、無明やうやく暗はれて、信心たちまちに明かなり。云々

『改邪鈔』上二には、

この娑婆生死の五蘊所成の肉身いまだ破れずと雖も、生死流轉の本源をつなぐ自力の迷情、共發金剛心の一念に破れて、知識傳持の佛語に歸屬するをこそ、自力をすてて、他力に歸するともなづけ云々

とある。共に聞信一念の所に、自力疑心の闇の破れることを詳述せられてある。令諸衆生の佛智が、吾等の胸中に攪入する時は、心一ばい閉くなり、軽くなり、自力疑心、煩惱妄念の闇は消えうせる。此の信の内容は、深く廣くして、不完全の人智の知る所でない。

かやうに、信の一念の時に、久遠劫來はりつめた我等の自力我慢が仆れて、如來の心光と一味になる。之が無明の破れる時である。故に此の場合、無明とは自力疑心の迷情を指すのである。法然聖人が「生死の家には疑を以て所止となす」と道破せられたのは、從來自力教の見地より説示れる無明の意義を棄てて、本願を疑ふ自力の我情を以つて、生死に迷ふ根本無明であるとせられたことは、無明の宗教的眞意義を打ち出された卓見と云はねばならぬ。

三、上に總無明は一切の惡業煩惱、別無明は不了佛智の疑惑を指すといふ説をあげたが、この説も、上に述べ

たやうな意味に於て、初めて生命づいてくるのである。これを單に聖教の諸文を解釋する範疇としては、何等の意味もなくするのである。

即ち聞信の一念に、自力疑心の闇が霧れると共に、「塵數の如く遍滿する」煩惱、「無明業障のおそろしき病」の惡業が、皆な佛智の不思議によりて消滅し、同時に無上大利の功德が興へられる。之を今の文に、「能く衆生一切の無明を破し、能く衆生一切の志願を滿て給ふ」と云はれたのである。「和讃」に、

無礙光如來の名號と　かの光明智相とは

無明長夜の闇を破し　衆生の志願をみて給ふ

とあるはこれである。

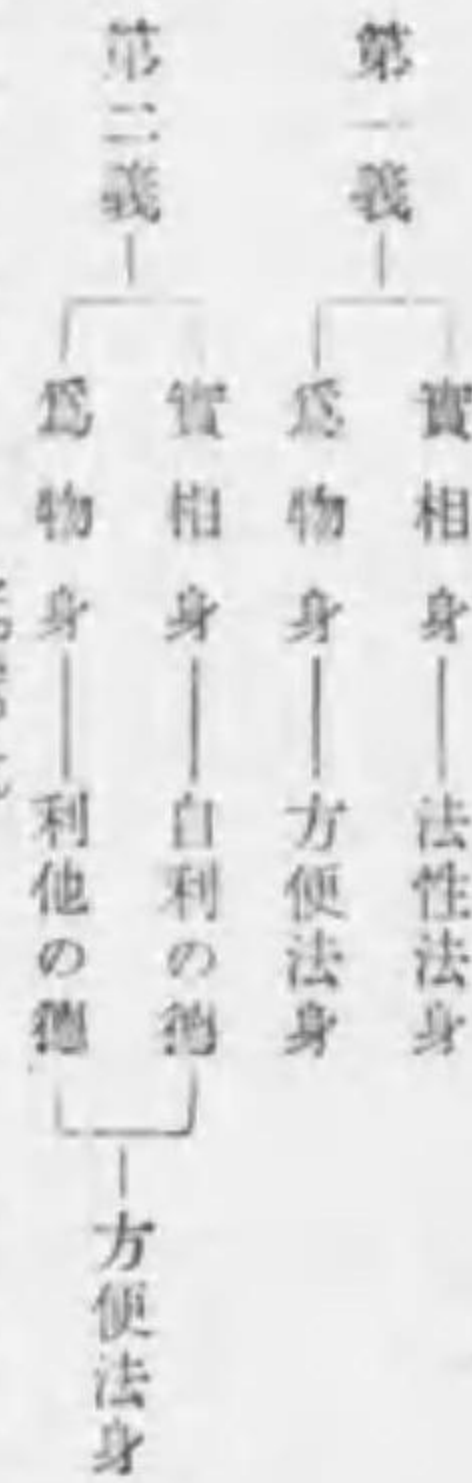
如彼名義欲如實修行相應　者彼無礙光如來名號能破衆生一切無明能滿衆生一切志願然有稱名憶念而無明由存而不滿所願者何者由不如實修行與名義不相應故也云何爲不如實修行與名義不相應謂不知如來是實相身是爲物身

【讀方】 如彼名義欲如實修行相應といふは、かの無礙光如來の名號は、よく衆生一切の無明を破し、よく衆生一切の志願をみてたまふ。しかるに稱名憶念すること有れども、しかも無明なほ存して、しかも所願を滿てざるはいかんとならば、實のごとく修行せざると、名義と相應せざるによるが故なり。いかにが不如實修行と、名義と相應せざるとする。いはく、如來はこれ實相の身なり、これ爲物の身なり、としらざるなり。

【字解】 一 名義不相應　名義は、六字名號の義といふこと。即ち名號の謂れと相應せぬこと。名號の謂れを開き開かざること。



二 實相身、爲物身 『六要鈔』に二義をあぐ。



今は第二義に従ふ。即ち實相身とは、方便法身の彌陀如來が、眞如實相を證りて、自利圓滿の徳を具へ給ひしに名く。又爲物身は、如來の自利の徳その儘が利他の徳であることを示して、爲物身といふ。爲物は、「物の爲め」一切有情の爲めといふこと。

【文科】『論註』の文によりて破關滿願と實相身、爲物身を示す一段である。

【講義】「彼の名義の如く、實の如く修行し相應せんと欲する」といふは、いかなる意味かといふに、彼の無礙光如來の名號には、衆生の一切の無明、殊には佛智不思議を疑ふ疑無明を破り、衆生の一切の志願、殊には往生淨土の願を滿して下さるる功能がある筈であるのに、口には御名を稱へ、心には如來を憶念ひ奉つても、なほ、佛智を疑ふ疑無明が晴れやらす、往生いかかと案じて、往生極樂の願を満足することの出来ないのは、どういふ譯かといふと、一は如實に修行せず、一は彌陀如來の名義と相應せないからである。そんなら、いかなることを不如實修行といひ、名義不相應といふかといふに、阿彌陀如來の實相身、爲物身に在ますことを知らないのといふのである。即ち阿彌陀如來が、眞如法性を證り盡し給うた自利圓滿の大能力の方であること（實相身）、その大能力の如來が同時に、私共を助けんがために御苦勞下された私共のための如來（爲物身）で在することが知れないから、ほつこりと疑がとれず、往生極樂の願が満足されないのである。これが、名號を稱へながら、その謂れ

を疑うて助からうか助かるまいかと案する不如實修行であり（信不具足）、また、名號の謂れをきき聞かぬ名義不相應といふものである（聞不具足）。

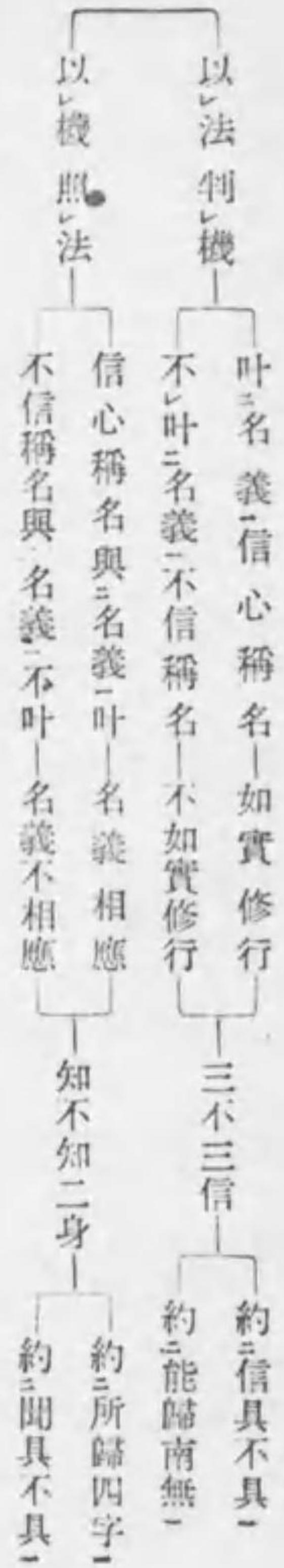
【餘義】一、稱名憶念しても無明の關破れず、志願の滿されないのは何故であるかと云へば、「不如實修行」と、「與名義不相應」のためであると云ふ。然らばこの二つは、どんな相違があり、又どんな關係があるであらうか。

初めに如實修行の如は「叶ふ」、實は「名號の實義」、即ち名號の實義に叶ふ稱名のことである。名號の實義に叶ふとは、信心のことである。此故に如實修行とは、信の上の稱名といふことである。この反對に、名號の實義に叶はぬ稱名が、不如實修行である。『樹心錄』には、信不具足のことであるといふ。即ち機に就いて、信心の具不具を闡明されたのである。そして之を詳細にしたのが、下の三不信である。

つぎに名義と相應すとは、稱名が、名號の實義に相應ふことを云ふ。上の如實修行は、機の信相を主としたのであるが、これは法の實義に叶ふ方を主としたのである。之と反對なるを名義と相應せぬと云ふ。故に『樹心錄』には、上の信不具足に對して、之を聞不具足であると云うてある。即ち名號の謂れと相應せぬと云ふことは、名號の謂れを聞き聞かぬことであると云ふ。この内容を打ち出したのが、下の實相身、爲物身云々である。

二、斯の如く、「不如實修行」と「與名義不相應」とは、畢竟は同じことであるが、暫く機法に配して味ふばかりである。即ち名號の實義に叶はぬ信不具足の稱名は名號の義と相應せぬ聞不具足の稱名である。従つて名號の義を聞き聞いた稱名ならば、そのまま信具足の稱名である。如實修行は機につき、名義相應は法につく。この二つが兩々相俟つて、稱彼如來名の眞が闡說せられるのである。試に南條神興師の『論草』に依りて之を圖示すれば左の如くである。





法の名義に叶ふか叶はぬかと云ふことを以つて、機の信心の具不具を判ずるのが、三不信である。即ち南無の機を主として明すのである。つぎに機の信心稱名を以つて、法の名義に「派り」、法の名義の何たるかを觀照するは、知不知二身である。即ち聞法の具不具を主とするのである。かやうに法の謂れを以つて、機の信相を自覺し、機の信相より法の謂れに「派る」。信仰の妙味は、此間より泉のやうに湧き出づる。「和讃」に、

不如實修行と云へること

一者信心あつからず

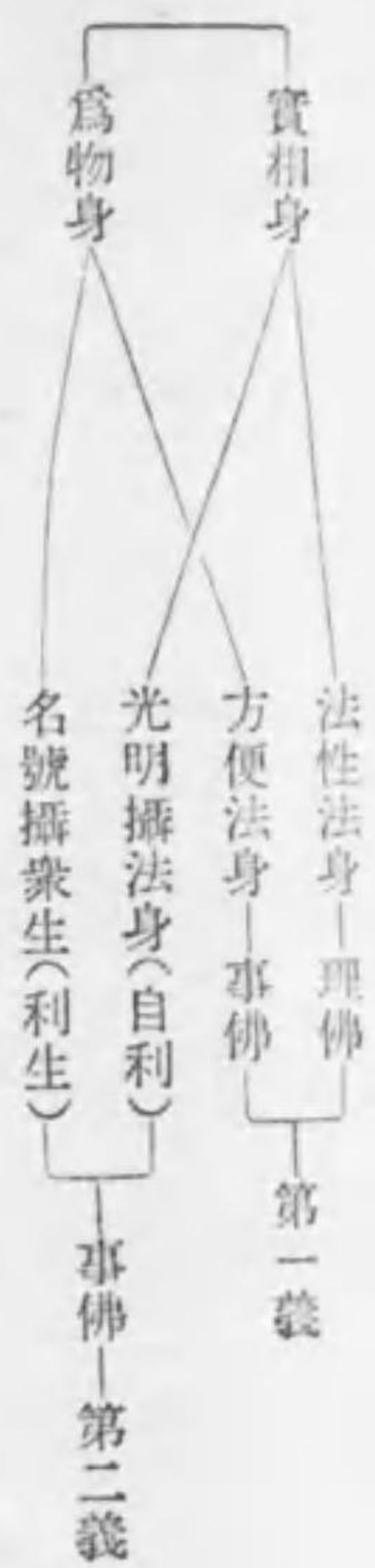
決定の信をえざるゆへ

如實修行相應は

不如實修行は、三不信であるとし、如實修行は只信心一つであると決せられた。名義相應不相應はこの裏面に含めてある。廣略圓融自由に説示せらる。

三、名義と相應することは、實相身、爲物身の何たるかを知るにありと云ふ。然らばこの二身を知ること、重要なことである。

『六要鈔』には、二義を擧げてある。



そして第二義が本文に親しいと評取してをられる。併し第一説と雖も會得の出来ぬことはない。如來は一如法界より表はれ給ひし方便法身に於てをらるるからである。「和讃」に、

無明の大夜をあはれみて

無礙光佛としめしてぞ

とあるは、法性法身より影現せられし方便法身が、無礙光如來であることを示されたものに相違ない。そしてこの法性方便二身の名は、「論註」に説示せられあるに於ては、尙更である。これは一義として取るべき説であると思ふ。

法身の光輪きはもなく  
安養界に影現する。

されど存覺師を初め、古來多くの人々が、第二義に依る所以は、深い宗教的旨趣を有してをるのである。吾等を救済し給ふ如來は、空漠なる理想の佛でない。現り活きて、私共の心靈上に働いて下さる現實の如來であらせられる。即ちこの二身は、今現に救済の御手を垂れ給ふ如來を、自利利他の二方面より名けた名前である。即ち眞實の功德を成就せる自利圓滿の身が實相身である。そして其自利の實相身は、其儘、衆生化益のためであるから爲物身であらせられる。一報身如來の二徳を二身と分ちて、如來の徳用を知らして下さるのである。吾等が虚假雜毒の自性を自覺する時に、如來の清淨眞實身を拜し、幼兒の母に縋るやうに、如來に歸入する時に、攝取



不捨の爲物身に抱かるることである。  
因みに古來の諸説を圖示すれば、



これ等の説は、皆夫々の意義を有してをる。従つて解釋の當體たる如來が、不可思議の徳用を備へ給ふことであるから、これ等の諸説を皆な包含しても尙ほあまりあると云はねばならぬ。此種の問題に關しては、吾等は一應の取捨の後は、靜に自覺の上に味ふべきであると思ふ。

又有三種不相應一者信心不淳（常倫の反、又音純也。又厚也。朴也。朴の字の音はト也。聲名なり）若存若亡故二者信心不一無決定故三者信心不（也。朴の字の音はト也。聲名なり）相續餘念間故此三句展轉相成以信心不淳故無決定無決定故念不相續亦可念不（也。朴の字の音はト也。聲名なり）相續故不得決定信不得決定信故心不淳與此相違名如實修行相應是故論主建言我一心（也。朴の字の音はト也。聲名なり）上

【讀方】 また三種の不相應あり。一には信心淳からず、（常倫の反、又音純也。又厚也。朴也。朴の字の音はト也。聲名なり） 存せるがごとく、亡せるが如きの故に。二には信心一ならず、決定なきがゆゑに。三には信心相續せず、餘念間つるがゆゑに。この三句展轉してあひ成ず。信心淳からざるをもつてのゆゑに、決定なし。決定なきがゆゑに念相續せず。また念相續せざるがゆゑに決定の信をえず、決定の信をえざるがゆゑに心あつからざるべし。これと相違せるを如實修行相應と名づく。このゆゑに論主建に我一心と言まへりと。已上

【文科】 『論註』によりて三不信を示す文。

【講義】 また名號を稱へながら、名號の義と相應せない信心があつて、これに三種の相がある。一には信心の淳厚でないこと（淳の字は常倫の反切で音はジュン即ち純と同音である。また厚淳と熟する字である。てあつて意味である。又朴の意味がある。即ち朴素なことをいふ。この朴字は音はトである。そしてこの朴は藥名である。即ち或は信じ或は疑ひ、信する中に疑の交つて居ることである。二には信心が專一にならず、我を助け給ふは彌陀一佛と、心の定らぬことである。三には信心が時々變つて、彌陀一佛といふ思ひが相續せぬことである。彌陀一佛の思ひが、餘行餘善に心をかけ餘佛餘菩薩に思ひをかける他の思ひに妨げられて相續せぬことである。



而してこの三句は互に相影響して愈々名義不相應となつてゐるので、信心が淳厚でないから、決定の心がなく、決定の心がなくから、一念の信心が相續せないのである。又、一念の信心が相續せないから、決定信が得られず、決定信が得られないから、信心が淳厚にならないのである。これを三不信と名けるが、この三不信と相反して居る淳心、一心、相續心の三信を如實修行、名義相應と名けるのである。而してこの淳心、一心、相續心の三信は、本願の三信を一つに收めた一信樂の三面のすがたで、とりもなほさず、願成就の信心歡喜の一念である。それであるから、天親菩薩は、『淨土論』を御書きになる最初に「我一心」と宣うたのである。

【餘義】一、古來、本願の三信（至心、信樂、欲生）は願の體、この三心（淳心、一心、相續心）は信相であると云はれてゐる。即ち本願の三信は、成就文に於て、一信心であることが知れ、其信心は天親菩薩の宗教的實驗の上から、一心と彰はされた。斯くの如く、法の上の三信は、親しく機に感應せられて一心の信心となつたが、其信心の内容を打ち出したのが、この淳、一、相續の三心であると云ふのである。云はば太陽の光線が、レンズを通つて七色を示すやうに、太陽の光線は三信、レンズの一點を通る所が一心の信心、七色となつて出た所が、この三心であるといふのである。

二、之に就いて古來二つの解釋がある。一は、上に略述したやうに、一信心の上に、この三相があると云ふのである。本文にも現に「一者信心不淳」等と各々に「信心」の文字を冠してあり、文の終りには亦「この故に論主建に我一心と宣へり」と云うてあるにても知れる。即ち淳心は、信心の純朴なるをいふ。人為の虚飾を離れた生れたままの清醇の心を指す。信心の至醇なる相である。つぎに一心は無二の心、二心なく如來に歸する心である。又專一の心である。専ら如來に心を注いで、餘へ心の散らぬ心である。第三に、相續心は、彌陀一佛を專念する心の相續するをいふ。眞信仰は、永續性をもつてゐる。夫は強ち時間的に常に意識の上に自覺せらるると云ふのでない。時間の概念を超越したる純粹持續である。

かやうに信仰の内容を打ち出した所、レンズの一點を通つた光線は、自と各種の色彩を示すやうに、一信心の上に三つの心相があるといふ。

第二説は、信相とすることは、第一説と同じであるが、此三心を本願の三信に配して解釋するのである。上の喩を取つて云へば、レンズの一點を通つた七色の光線は、初めレンズに來つた白色の光線其者であると云ふ。白色の太陽の光線に、七色あることは、レンズを通つた七色の光線によりて知ると同じ理由である。この意味に於て、今の三心は本願の三信に配當することが出来る。第一の淳心は虚飾なき眞實心であるから本願の至心に當り、第二の一心は二心なく信する信樂、第三の相續心は、往生一定の思ひが一生相續する欲生心に當る。斯の如くに單に道理の上から一致すべき筈であると云ふばかりでなく、一々文字を配して符節を合せたやうである。故に『安樂集』上三十丁には此の三不信を懇切に解釋して、

此三心を具して、若し生れずんば、この處あることなし  
と結ばれた。本願の「若不生者」と、「觀經」散善觀の初め「具此三心者必生彼國」の文字を取り合はせて、この三心を解釋せられることは、此三心を本願の三信と同一に見られたことを示すものである。我聖人は、道綽禪師の此解釋を注目せられ、『正信偈』に、

三不信を、慇懃に誨ゆ  
と仰せられ、『二門偈』には、  
縱令、一生に惡業を造れども、三信相應すれば、これ一心なり。一心は淳心なれば、如實と名く。若し生れずんば、この處あることなし。



と、明白に道綽禪師の釋を承けて、本願の三信と、此の三心を同一にしてをられる。今の本文の終りに「この故に論主、建に我一心と言へり」とあるによりても、覺師が、三信即一の信心を一心と仰せられたやうに、此三心を同じく一心と結ばれたことは明かである。この下の『六要鈔』にも、存覺師は、本文に三心を結ぶに「我一心」の文を以てせられたことを解して、

上に三信を擧げて、其心を開くと雖も、三信相成して、遂に別心に非ず、之を以て之を謂ふ。只これ開合して、其意（三信即一心）をあらはさんがために、此義を結ぶに、此文（我一心）を引く也。仍て下の私釋（三問答）に、専ら三心一心の義を成す。尤もこの理に叶ふ。殊に信受すべし。

と、淳、一、相續の三心を三信として、判然と本願の三信と同一にしてをられる。

三、上の兩説は、何れも取るべき説である。殊に第二説は、善美を盡してゐるやうである。云ふまでもなく信仰は文字に制限せらるべきでない。本願の三信は、機に感應せられて、一信心となり、その信心はこの三心、此三心は同時に本願の三信である。ここに圓融無窮の活きた信念の面目を見ることが出来る。

四、「淳字」の字訓。『六要鈔』には、  
常倫反、又音絶也。又厚ト朴也。朴音也。  
とあり、寛永本には、  
常倫反、又音純也。又厚ト朴字音ト也。  
とあり。倫が倫となり、絶が純と訂正されてあるが、「御草本」には明かに、  
常倫反、又音純也。又厚ト朴也。朴音也。  
とあり、「御真木」（『高田本』にはなし）にも、

常倫反、又音純也。又厚ト朴也。朴音也。

とありて、終りの數字の地位を變へたるのみで、全く一致してゐる。今はこの兩本の説に順ふ。淳の音純によりて純一なることが知れるが、又厚淳と熟するによりて、淳の意を益々明かならしめる。即ち「淳を略した符號である。故に淳は輕薄でない、「手あつい」ことである。然るに又厚字の意を豊にするために重ねて「朴」といふ訓をもつてせられた。朴は厚朴のこと、ほうの木又は榛である。ともに素朴な飾り氣のない木である。この木の皮をもつて薬を製する故に「薬名也」と云はれたのである。故に淳心の淳は質朴な手厚いこと、計ひを離れた純一の心を指すのである。

第二科 『讚阿彌陀佛偈』の文

讚阿彌陀佛偈曰、諸阿彌陀德號、信心歡喜慶、所聞乃暨、一念至心者、  
廻向願、生皆得往唯除、五逆謗正法、故我頂禮願、往生。

【讀方】 讚阿彌陀佛偈にはく、（曇鸞和尙の造たり） 諸もの阿彌陀の德號をききて、信心歡喜して、聞く所をよろこばんこと、いまし一念に暨ぶまでせん、至心の者廻向したまへり。生ぜん願すればみな行くことを得しむ。ただし五逆と謗正法とをばのぞく。故にわれ頂禮して往生を願すと。

【字解】 一 『讚阿彌陀佛偈』 曇鸞大師の著。『大無量壽經』によりて、彌陀の淨土の依正二報、並びに主伴莊嚴を讚誦す。凡て百九十五行。流麗雄渾の宗教的讚歌。

二 至心者 阿彌陀如來をいふ。

【文科】 『大經』成就の文を取意した『讚阿彌陀佛偈』の文である。



【講義】曇鸞大師の御造りなされた『讚阿彌陀佛偈』には左の如くいうてある。ありとあらゆる衆生が、阿彌陀如來の至徳の尊號をさき聞いて、信心歡喜し、名號の御謂れを有難や尊とやと慶んで、一念の信を得れば、眞實の至心の人たる阿彌陀如來は、その時、一切の功德善根を悉くその人に廻向して下されるのである。それであるから、いかなるものでも淨土へ往生したいと願へば、皆往生を得させて下さるのである。ただし、五逆罪造るものと正法を誹謗するものとはこの限りではない。かういふ譯合ひであるから、私は如來を敬禮し奉つて往生を得させて頂きたいと願ふのである。

第二項 善導大師の釋文

第一科 『定善義』の文

光明寺觀經義云、如意者有二種、一者如衆生意隨彼、心念皆應度之、二如彌陀之意、五眼圓照、六通自在、觀機可度者、一念之中、無前無後、身心等赴、三輪開悟、各益不同也。

【讀方】光明寺の觀經義にのたまはく、如意といふは二種あり。一には衆生のところのごとし。かの心念に隨ひてみなこれを度すべし。二には彌陀のおんところのごとし。五眼まどかにてらし、六通自在にして、機の度すべき者を觀はして、一念のうちに前なく後なく、身心ひとしく赴き、三輪開悟して、おのの益すること同じからざるなりと。

【字解】一 五眼 肉眼、天眼、法眼、慧眼、佛眼。

二 六通 六神通。天眼通、天耳通、他心通、宿命通、神足通、禪定通。

三 三輪 彌陀の身口意の三業のこと。神足輪(身)、教誨輪(口)、記心輪(意)。佛は是等を以て大車輪の瓦礫を碎くやうに、善等の煩惱を摧破し給ふ故に三輪といふ。

【文科】『定善義』の文によりて、如來の攝化自在を示し給ふ一段である。

【講義】光明寺に御住ひなされた善導大師の『定善義』には左の如くいうてある。觀經に神通如意といふ語があるが、この如意といふに、二通りの意味がある。一には衆生の意の如しといふ意味で、衆生の方に宿善あつて、佛を念するやうになれば、如來は衆生の念する意の如く濟度なされるといふ意味である。二には、阿彌陀佛の御意の如しといふ意味であつて、如來は五眼を以て、十方法界の何物をも悉く圓かに照し、六神通を具へ、自在無礙に在すから、濟度すべき衆生があれば、悉くこれを知り給ひ、十方界いかなる所でも、一念同時にすがたをあらはし、佛身も佛心も等しく赴き給うて、身口意の三業をはたらかして、衆生を導き、衆生の機類に従つて、そのみ意の如く各々特殊の利益を與ふのである。

第二科 『序文義』の文

又云此五濁五苦等通六道受、未有无者、常逼惱之、若不受此苦者、即非凡數攝也。

【讀方】またはいはく、この五濁五苦等は、六道に通じて、受て未だなき者はあらず。つねに之に通惱す。もしこの苦を受けない者は、すなはち凡數の攝にあらざるなりと。

【字解】一 五濁 末世に起る五種の悲しむべきこと。劫濁(時代の墮落)、見濁(人々の見解が汚れること)、煩惱濁(煩惱が烈しくなること)、衆生濁(人間が悪くなること、即ち人間の徳義の衰へること)、命濁(人の壽命が縮まること)。



- 二 五苦 生苦、老苦、病苦、死苦、愛別離苦。又は、生老病死苦、愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦、五陰盛苦をいふ。
- 三 六道 地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上をいふ。
- 四 凡數 凡夫の仲間。

【文科】『序文義』によりて人生の實相を示したまふ一段である。

【講義】また同じき善導大師の『序分義』には左の如くいうてある。五濁五苦等の痛ましきは、六道輪廻の衆生の中、これを受けて居らないものはないのである。皆この悲慘に逢うて苦しみ悩んでゐる。もしこの苦惱を受けないものがあるならば、それは凡夫の仲間ではない。

第三科 『散善義』の文

又云從何等爲三下至必生彼國已來正明辨定三心以爲正因即有其一二一明世尊隨機顯益意密難知非佛自問自徵無由得解二明如來還自答前三心之數

【讀方】またはいはく、何等爲三より、しも必生彼國にいたる已來は、まさしく三心を辨定してもて正因とすることを明す。即ちその二あり。一には世尊、機にしたがひて益をあらはすこと、意密にしてしりがたし。佛みづから問うてみづから徴したまふにあらずば、解を得るに由なきことを明す。二には如來かへりて自らさきの三心の數を答へたまふことをあかす。

【文科】『散善義』を引く中、三心正因の科文をあげて三心の總標とせられるのである。

【講義】また同じき大師の『散善義』に曰く、『觀經』の文の中、「何等爲三」から「必生彼國」に至るまでの文字は、三心といふは至誠心、深心、難信發願心なりと定めて、この三心が、淨土往生の正しき因であるといふことを説き給ふのである。この中また科段が二つに分れて、一に「何等爲三」は、佛の設法は相手の衆生の機に従うて利益を興へ給ふので、佛意は隱密であつて到底餘人の伺ひ知ることの出来ない所であるから、佛が自ら、「何等をか三となす」と自ら問ひ自ら徴し給ふのでなければ、餘人は解ることが出来ないことを示すのである。二に「一者至誠心」以下は、如來が自ら先きの微問に對して、三心とはこれであると答へ給ふことを示すのである。

經云一者至誠心至者眞誠者實欲明一切衆生身口意業所修解行必須眞實心中作不得外現賢善精進之相內懷虛假貪瞋邪偽奸詐百端惡性難侵事同蛇蝎雖起三業名爲雜毒之善亦名虛假之行不名眞實業也  
若作如此安心起行者縱使苦勵身心日夜十二時急走急作如灸頭燃者衆名雜毒之善欲迴此雜毒之行求生彼佛淨土者此必不可也何以故正由彼阿彌陀佛因中行菩薩行時乃至一念一刹那三業所修皆是眞實心中作

【讀方】經にのたまはく、一者至誠心、至といふは眞なり、誠といふは實なり。一切衆生の身口意業の所修の解行、かならず眞實心の中に作したまひしを須みんことを明さんと欲ふ。ほかに賢善精進の相を現することをえざれ。うちに虚假をいだけばなり。貪、瞋、邪偽、奸詐百端にして惡性やめがたく、事蛇蝎におなじ。三業を起すといへども、なづけて雜毒の善とす。また虚假の行となづく。眞實の業となづけざるなり。



若し此の如き安心起行をなすは、たとひ身心を苦勵して、日夜十二時に、念にもとめ念になして、頭燃をはらふがごとくするもの、すべて雜毒の毒となづく。この雜毒の行を廻して、かの佛の淨土に生ぜんことをもとめんと欲するは、此れかならず不可なり。何を以ての故に。まさしくかの阿彌陀佛、因中に菩薩の行を行じたまひしとき、乃至一念一刹那も、三業の所修、みなこれ眞實心のうちに作したまひしに由(以)周の反。經也。行也。從也。用也)つてなり。

【字解】一 解行 解は智慧、行は修行。證にいたる智慧と修行。

二 蠲 木喰虫。毒虫である。

三 一念 短かき時刻。六十刹那、又は九十刹那を一念とすといひ、又は一刹那の譯であるといふ。

四 一刹那 梵語クシヤナ (ksana)、極めて短き時刻、この一刹那の間に百一生滅ありといふ。

【文科】『教善義』の文を引く中、衆生心の虚假と、如來心の眞實を示し給ふ一段である。

【講義】經文には一には至誠心というてあるが、この至誠心の至も眞、誠も實といふことである。それで、この至誠心といふは、一切の衆生が身口意の三業に修め行ふ所の安心起行は、凡夫手造りのものでは役に立たぬ、凡夫自力の企を止めて、必ず、如來が、因位永劫の昔、眞實至誠の心の中に作し給うたものを用ゐねばならぬといふことを示さうといふ御思召なのである。それであるから、凡夫は凡夫らしくして、徒らに外相のみ、賢いふり、善人ぶり、精進に修行するふりを見せて、これを以て淨土に往生したいなどといふ非望を抱くな。何故ならばいかに外相は美しく整うても、凡夫の内心には生れつきの虚偽が満ち満ちて居つて駄目だからである。貪欲、瞋恚、邪偽の煩惱は、百色千色に分れて雲の如くむらがり立ち、凡夫の好悪の自性は到底改め難いのである。丁度、毒蛇や蝎のやうな奴である。それであるから、こんな凡夫が、いかに立派な三業の善根を積んでもそれは皆毒の轉つた善と曰はれる。虚假の行と曰はれる。決して眞實の行業とは曰はれないのである。

それであるから、このやうな自力の安心、自力の起行をするものは、たとひ、身心を苦しめ勵まして、晝夜なしに勤め勵んで、丁度髪の毛についた火を拂ふやうに一生懸命にやつてみても、すべてこれは毒の雜つた善である。斯ういふ毒の雜つた行業を廻向して、それで彌陀如來の淨土へ往生したいと願うてみても駄目のことである。何故なれば、彼の阿彌陀如來は、因位永劫の昔、菩薩の行を修行し給うた時には、ホンの一念の間も、一刹那の間も、身口意三業の行業を悉く雜り氣のない眞實を以てなし給うたに由(この由の字は以由の反切で、音イフである。訓は經る、行く、従り、用ゐるの四義である。もと、この由の字は緣由、來由と熟する字で、よりておこるわけの場合に用ゐる。かやうなわけによりて等これである。この緣由、來由の意味は上の經、行、從、用の四訓で明かに助顯せられるのである)つてである。

【餘義】一、此下に善導大師の至誠心の釋文を引かれてあるが、我聖人獨特の炯眼は、僅に此釋文の訓點を施すことによりて、鮮かに絶對他力教の眞意を發揮せられるのである。即ち御自身の信仰經驗の上から善導、法然二祖の精髓に徹入られたのである。

此文の通常の解釋を云へば、初めは勸門である。即ち行者の安心起行は必ず眞實心をもつてせねばならぬ。つぎは誡門にして其裏より述べたもので、貪瞋をやめ、虚假を離れ、内外相應せねばならぬ。この勸誡二門の教へに相應するのが眞實であると云ふのである。故に其の訓點は、

欲<sub>レ</sub>明<sub>下</sub>一切衆生身口意業所修解行、必須<sub>レ</sub>眞實心中作<sub>上</sub>。不得<sub>レ</sub>外現<sub>三</sub>賢善精進之相<sub>二</sub>内懷<sub>中</sub>虚假<sub>上</sub>。

となるのである。それであるから、文段から云へば、「欲明一切」より「眞實心中作」までは勸門、「不得外現賢善」より「所施爲趣求亦皆眞實」までを誡門とし、内の心も、外の身口も、共に眞實でなければならぬと云ふ文



意と見るのである。

二、單に文面だけを見る時は、どうしても斯様に解釋せねばならぬが、これを實際上、身に引き當て味ふ時には、直ちに此文面の底に流るる意義を感得せざるを得ない。我聖人は、期せずして其の眞意に徹到せられた。即ち講義に述べたやうに、「須」字を「用」字の意味にして「もちゐ」と讀ませ、「眞實心中に作したまへるを須ゐることを明さんと欲す」とせられた。通常の解釋から云へば、吾等凡夫に、眞實心より解行を起せ、と勤める言葉であるが、今は如來の眞實心より作し給へる解行を須ゐよと勤められるのである。意味はまるで顛倒して來る。従つて其つぎの文も、「ほかに賢善精進の相を現することを得ざれ」と云ひ放ち、其因故として「内に虚假を懷けばなり」と訓まれた。文字を其儘にして僅かに訓點をかへ、そして非常に深遠なる意義を發揮せらるる卓見は、只驚くのほかはない。試に此の解釋を聖人の他の聖教の上に求むれば、『唯信鈔文意』五十二に、

不得外現賢善精進之相と云ふは、淨土をねがふ人は、あらはに、かしこきすがた、善人のかたちをふるまはされ、精進なるすがたを、しめすことなかれとなり。そのゆへは、内懷虚假なればなり。内はうちといふ。このころのうちに、煩惱を具せるゆへに虚なり、假なり。虚はむなく、實ならず。假はかりにして、眞ならず。しかれば、いまこの世を、如來のみにて末法惡世とさだめたまへるゆへは、一切有情まことのころなくして、師長を輕慢し、父母に孝せず、朋友に信なくして、惡をのみこのむゆへに、世間出世みな、心口各異言念無實なりとおしへたまへり。乃至、この世のひとは、無實のころのみにして、淨土をねがふひとは、いつはり、へつらひのころのみなりときこへたり。世をすつるも名のころ、利のころをさきとするゆへなり。我聖人が、至誠心を解し給ふに、毫も眞實心になれと勤めずして、絶對的に如來廻向の至誠心を須ゐよと勤め給ひし眞意は、この引文の上に躍動してゐる。これといふも、教を單に教として解釋せずして、その教を實際御

自身に味はれたからである。聖人は深く自己を省察し、自己は如何なるものであるかと云ふことを、痛切に考へられた。そして眞に自己の眞相に徹せられた時に、人生の眞相を見透され、眞に虚假不實の身であると感ぜられた時に、末法惡世の人生を感ぜられた。人間には些少の眞實もない。もしあるならば、如來廻向のものであらねばならぬ。この如實の人生を見られたために「世間出世みな心口各異」とか「淨土をねがふ人も、いつはり、へつらひのころのみなり云々」の恐ろしい御言葉がでるのである。

如來は現に、吾等と呼んで、五逆十惡具諸不善と仰せられ、人生を指して、惡時惡世界と仰せられた。そして善導大師も「自身現是罪惡生死之凡夫」と叫ばれた。そして我聖人御自身の上にも、明かに其罪惡不實たることを信知してゐらせられる。されば善導大師の眞意は、決して不眞實の者に、眞實になれと仰せらるる筈はない。如來廻向の眞實を須ゐよと仰せられたことであると讀まれたのである。眼光紙背に徹するとは、眞にこのことであると云はねばならぬ。

三、つぎに、「貪瞋邪僞」以下は、通常の解釋に依れば、内に虚假を懷く勿れ等を受けて、容易に止め難き惡性を自覺して、精勵刻苦せよと勤められたこととなるが、我聖人は、上の誠門を廣説する文字と見られた。即ち外に賢善の相を現はしても、内に虚假不實の心を懷いてをるから駄目である、と云ふ理由を詳述したのが此の一段であると云ふのである。

此の見解によりて、「貪瞋邪僞、奸詐百端」等の毒々しい文字が一字一字、善導大師の痛烈なる内省の結果より發露せる告白となるのである。若し是を通常の解釋のやうに、惡性を自覺して道を修めよと云ふ意味になれば、この詳密なる人生の暴露の文も、ほんの眞實心に進むための方便となつて仕舞ふのである。

善導大師の「自身現是罪惡生死之凡夫」等と仰せられて、偏に「無疑無慮乘彼願力」と絶叫せられたのは、深



く自己の本性に當面せられ、「奸詐百端、悪性難侵」等と、人性の悪毒に驚かれた結果である。この境地に至れば、自己の上には、一の善も、一の力も認められぬ。只佛願にすがるとの念のみである。我聖人は、此の實驗を御自身の上に深く味はれて、此の解釋を試みられた。

四、「何を以ての故に、正しく彼の阿彌陀佛云々」は、通常の解釋によれば、上の誠門の釋を受けて、吾等が眞實心より解行と起さねばならぬ理由は、吾等の忻ひ求むる淨土の阿彌陀佛が、既に因位の修行の際には、一念一刹那も、清淨眞實でないことはなかつた。吾等もこの御心に相應するやうに、眞實心にならねばならぬと云ふのであるが、我聖人は、之と全く反して、先に彌陀の眞實心中より作し給へるを須ゐよとあつた、あの因故とせられたのである。如何に頭燃を拂ふやうに心身を苦勵するとも、拂ひ難い悪性心を以て、善を積んで廻向しても駄目である。左様な愚な自力心に惑はされてはならぬ。我彌陀は、既に我等に代りて、念々刹那に清淨眞實の念を以つて、名號を成就せられた。この如來廻向の名號を頂いた所が、至誠心であると云ふのである。

五、我聖人が、至誠心に就いて、斯様に徹底的の解釋を下されたことは前述の通り、元より御自身の信仰經驗に依ることは明かであるが、自ら亦、師法然聖人に依る所があるのである。法然聖人は「選擇集」「三心章」に於て、此の至誠心の釋を引用せられ、其の私釋に、

外には精進の相を示し、内には即ち懈怠の心を懐く也。若し夫れ、外を離して内に蓄へば、祇に出要に備へつべし（内賢外賢）。

内は假、外は眞なり。若し夫れ、内を離して外に播さば、亦出要に足りぬべし（内愚外愚）。

一、内賢外賢 二、内愚外賢 三、内賢外愚 四、内愚外愚

此中、第二の内愚外賢は、正しく前説の相であつて、他の三つの中、第一の内賢外賢は、通常の訓點に従うたもので、内外ともに眞實になつた相である。第三の内賢外愚は、文面には表はれてをらないけれども、第一と第四とより自と生れ來るべき相である。第四の内愚外愚は、實に本願の正機たる惡凡夫の自覺である。法然聖人が、是を指して、第一の内賢外賢と等しく「亦出要に足りぬべし」と仰せられた程、意義の深いものである。

我聖人は、此の第四の内愚外愚を以つて、法然聖人の此至誠心に對する見解と見られた。ここには言葉の都合上、賢愚と云ふ狭い言葉を須ゐてであるが、賢は賢善精進、愚は愚惡、貪瞋、邪偽である。法然聖人も、文字の上の解釋、即ち理想としては、内賢外賢を用ゐられたが、善導大師の眞實義、即ち事實としては、何處までも惡性の凡夫と自覺することが、至誠心であるとせられた。法然聖人の此幽旨を、赤裸々に打ち出されたのが、我聖人の上述の解釋である。即ち「愚禿鈔」の卷頭に、

賢者の信を聞いて 愚禿が心を顯はす。

賢者の信は 内は賢にして、外は愚也。

愚禿が心は 内は愚にして、外は賢也。

と仰せられた。實に深刻い信仰告白である。教の上から云へば、眞實の心になつて、道を求めよ、虚假不實であつてはならぬ、といふは當然のことである。然るに我聖人は、眞實心を起さうとしては駄目である。只如來の廻向を須ゐよと云はれた。一見、奇矯のやうであるが、「眞實心になれ」といふ教へを深く味はれた最後の聲である。眞實心になれといふ教へを聞いて、眞實心になつたと思つてゐる人は、未だ眞に教へを聞かぬ人である。内省の足らぬ人である。即ち眞に此の教へを聞く人は輕々しく眞實心になつたと自惚れずして、反對に、自己の本性の陰忍と、執拗と、惡毒に驚くのである。此本性を自覺した所が、法然聖人の所謂、内愚外愚の自覺である。



是れが即ち如來の至誠心である。我聖人は、師聖人の美はしい内愚外愚の自覺の相を見て、更に御自身の悪性に驚かれ、「賢者の信は、内は賢にして、外は愚也。愚禿が心は、内は愚にして、外は賢なり」と、深く機相を割つて、懺悔せられた。

誠に第一者としての信仰味は、憍慢の我の折れた謙虚の念である。これを外より見れば、謙遜なる聖者と見えるのである。我聖人が師法然聖人の内愚外愚の自覺を指して、賢者の信と仰せられたのはここである。而も御自身としては信と云はずして、現實の心を打ち出して内愚外賢と告白せられた處に、美はしい謙虚の信が宿つてゐるのである。此間の消息は、實感なき人に取りては、多言も會得せしむることを得ず、實感ある人には、一言も決して少しとはせないのである。

六、「由」字の字訓は行卷(二七五頁)にも出でゐる。彼處には「以周反、行也、經也、從也、用也」とあり、今は「經也」を前に出してある。只是だけの相違に過ぎぬ。彼處は、「由稱名易故」といふ場合であつたが、今は如來が眞實心をもつて、廻向の行を成就せられたといふ一段で、文勢がここで一轉して、絶對他力に依らねばならぬといふ斷案の出る所で、極めて重要である。故に再び「由」字に、字訓を施して、字眼たることを示し給ふ。

以周の反切で昔イウ、緣由、來由の意で、よりておこるわけ、又はかやうなわけによりて等是である。之を上四訓にて、意味を豊富にせしめ、助けあらはさしむるのである。「經」は經る、如來因位に於て永劫の時を経たまひしことか。又徑と通じて徑路の義となり、往生の徑路の意ともいはる。「行」は行く又は行ひの意。今は行ひの方が如來因位の修行に通じて意味が深いやうである。「從」はより又は從ふの意。よりと云へば、如來より衆生へ與へ給ふの意味となり、從ふと云へば、如來の眞實に從ふ意味となる。どちらも取るべき説であると思ふ。「用」は須なること。如來の眞實心中に作し給へる至心の名號を須なる意味である。斯様に字訓を添ふれば、如來が眞實心中に作し給ひしに「由るから」といふ斷案が、明瞭するとともに、又意味が豊富になつてくる。どこ迄も細かに行き届かせられた聖人の精神の尊く思はると共に、本書の文字の一つ一つにも、聖人の血が波打つてゐることが偲ばれる。

### 凡所施 爲趣求 亦皆眞實

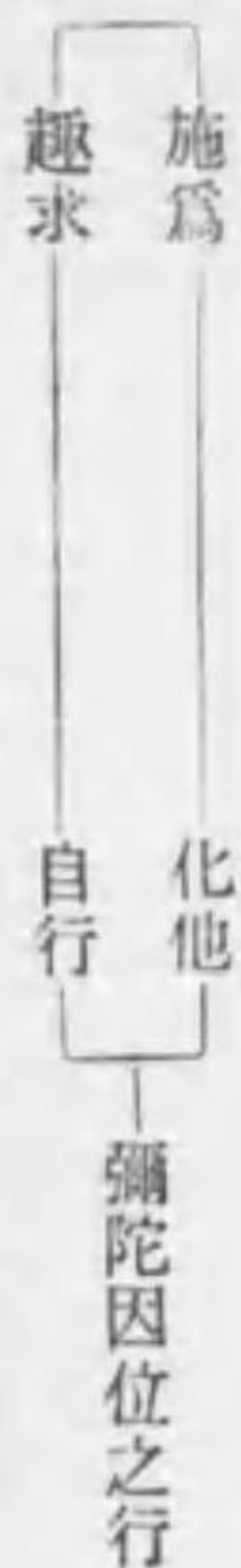
【讀方】 凡そ施したまふ所、趣求をなす、またみな眞實なり。

【文科】 至誠心中、機法の眞實を示さるる一段。

【講義】 扱て、上の様な譯合ひであるから、彌陀如來の方よりその出來上らせられた眞實を悉く衆生に廻施て下される。その廻向があらはれて、衆生の方にも淨土に生れたいといふ願生の思ひがおこる。この衆生の願生の思ひは如來の眞實がその儘あらはれて下されたのであるから、亦眞實である。

【餘義】 一、「所施爲趣求」の五文字の上にも、我聖人獨特の信仰的解釋が、他の常識的解釋と、水際立つて鮮かに現はれてある。

通常の解釋には、この句は上の文と一連の文と見、「施爲、趣求する所、亦皆な眞實なり」と讀み、



とするのである。即ち施爲は、彌陀因位の化他之行、趣求は、其自行である。鎮西の『傳通記』によれば、施爲



は法藏菩薩の下化衆生、趣求は其の上求菩提、之を因願に配當すれば、十二、十三、十七、三十一、三十二の五願は、趣求の願であつて、他の四十三願は皆、施爲の願である。併しかく配屬しても、もと四十八の一々の誓願は、自行化他に通ずる譯であるから、どの願も施爲であり、趣求である、と云ふ。西山の「楷定記」一によれば、施爲は行、趣求は願、即ち法藏菩薩の因位の願行とする。この兩説は、共に上の文を承けて、阿彌陀佛が、因中に於て、清淨眞實の心を以つて、修行をせられたことを述べたから、夫を總括して、凡そ施爲の化他も、趣求の自行も、共に眞實であると結んだ言葉と見るのである。通常の見解としては、文に親しいやうに思はれる。

二、併し我聖人は、此常識的の見解に反して、此一句を深い感興を以つて味はれた。即ち「愚禿鈔」下二丁に、「凡そ施したまふ所、趣求をなす、亦皆眞實なり」と讀み、

所施 彌陀の廻向

爲三趣求 衆生願生の信心

とせられた。かやうにして、上來述べ來つた至誠心の解釋を裏けて、ここに一點睛を施したのである。即ち最初に、彌陀廻向の眞實心を須むよと勸め、進んで、その理由として、衆生の惡毒なる心をあげ、一轉して、如來因位に於ける清淨眞實の修行を説いて、廻向の眞實なることを證明したから、ここに彌陀の所施が斯様に眞實であると等しく、衆生の趣求の念も亦眞實である。何故と云へば、此の衆生の趣求の信心は如來廻向の眞實心を須むだからである、とせられたのである。存覺師は、この下の「六要鈔」に此の點を明示してをられる。

「凡所施」とは、これ如來の施、佛はこれ能施、「爲趣求」とは、これ行者に約す。佛道の趣求なり。これ即ち佛に對して衆生は所施なり。これ如來施與の行を以て、即ち衆生趣求の行となす。能所異なりと雖も、俱にこれ如來利他の行なるが故に、之を眞實といふ。

佛は能施、吾等衆生は所施、既に能施は眞實であるから、夫を頂いた吾等の信念も亦眞實である。この時亦の字は強い意味を含んでくる。即ち能施の行が眞實である如く、所施の信念も亦眞實であるといふのである。良に實際の感味より云へば、機と法は離れたものでない。吾等の心中に湧き來つた信念それが即ち趣求の念である。能生清淨願往生心である。そして此自覺そのままが如來の眞實である。この趣求の信念を離れては、如來の能施を知ることが出來ぬ。我聖人が、單に他家のやうに、此の一句を法藏菩薩の自行化他といふ法の方にのみ屬せずして、その半を吾等の信仰上の實驗とせられた處に、宗教的妙趣があるのである。

又眞實有二種一者自利眞實二者利他眞實 不善三業必須眞實心中捨 又若起善三業者必須眞實心中作 不簡内外明闇皆須眞實故名至誠心

【讀乃】 また眞實に二種あり。一には自利眞實、二には利他眞實なり。乃至不善の三業は、かならず眞實心の中に捨てたまひしを須むよ。またもし善の三業を起さば、かならず眞實心の中に作したまひしを須むて、内外明闇を簡はず。みな眞實をもちあるがゆゑに至誠心となづく。

【字解】 一 内外明闇 内は出世聖者、外は世間凡夫。明闇は明は出世、闇は世間。又、明は智慧の明かなること、智者。闇は智慧なき無明のこと、愚者。

【文科】 至誠心の中、眞實の意義を示さるる一段である。

【講義】 それで、また眞實といふに二通りの種類がある。一つには自利の眞實、即ち自力の眞實である。二つには、利他の眞實、即ち他力の眞實である。乃至、如來は嘗て因位永劫の昔、衆生に成り替はせられて欲覺、瞋覺、害覺を生ぜず、欲想、瞋想、害想を起さず、



施言を遠離し、不善の三業を悉く捨てて下された。久遠の凡夫の私共はいか程勤んでみても、眞から不善の三業を捨てることの出来ない奴であるから、自力の廢惡を止めて、佛願にすがつて、如來の眞實心に捨てて下された御手柄をそのまま貰ひ受けるより外はない。また私共は、前からいふ通り、淨かな善の三業を修めることの出来ない奴であるから、如來の因位に眞實心を以て積んで下された善根功徳をそのまま頂くよりほかはない。それであるから、聖者でも凡夫でも、智者でも愚者でも、機の差別に拘りはらない。みな悉く如來の眞實を貰ひ受けるのであるから、至誠心と名づけるのである。

【餘義】一、此下の我聖人の解釋は、通常の解釋と非常に相違してをる。西山、鎮西に於ては、この自利利他を自行化他と解し、善導大師は、ここに自利利他の二つの標目を擧げられたけれども、只自利即ち自行だけの解釋を施して、利他即ち化他の方面を略された。夫は、自行を知れば、化他は自と知ることが出来るからと云ふのである。試に「傳通記」一によりて、この下に略された疏文を略出して、解釋すれば左の通りである。

また眞實に二種あり。一には自利眞實、二には利他眞實なり。自利眞實といふは、また二種あり。一には、眞實心の中に、自他の諸惡、及び穢國等を制捨して、行住坐臥に、一切菩薩の諸惡を制捨するに同じく、我も亦かくの如くせんと思ふ（以上は、總じて、厭捨惡、欣修善に就いて眞實心を明す）。二には、眞實心の中に、自他凡聖等の善を勸修す。眞實心の中の口業に、かく阿彌陀佛及び依正二報を讚嘆す。また眞實心の中の口業に、三界六道等の自他の依正二報の苦惡の事を毀厭す等（以上は別して三業の厭欣に就いて眞實心を明す）。不善の三業は必ず眞實心の中に捨つべし。又若し善の三業を起さば等（以上は、合せ、三業の遠近（始終）を結ぶ）。是を總別結の解釋と稱す。かやうに、此下は自利眞實（自行）の釋だけで、利他眞實（化他）の釋は態と略されたと解するのである。

二、然るに、我聖人は、此自利、利他を「論註」の自利利他の深義の解釋によりて、これを自力他力と見、傳通記に所謂總別の二文を自力眞實として「化卷」に引用して、ここには唯だ標目だけをあげ、最後の結の文たる「不善の三業」等を利他眞實（他力眞實）の文としてここに掲げられた。即ち「愚禿鈔」下に、「利他眞實に就いて、亦二種あり」と標して、上の所施趣求の文と、此の「不善の三業」等の文を擧げられてある。

我聖人のこの解釋は、上の解釋より必然的に流れ来るもので、毫も怪しむに足らぬ。疏文に、「又眞實に二種あり」と標しながら、自利眞實の解釋だけで、利他眞實の解釋が明示されてない。然るに單に文面に拘泥して、自利利他を自行化他としては此一段が非常に淺薄となつて仕舞ふ。これ上來既に「須眞實心中作」を「眞實心中に作すべし」と讀ますして、「眞實心中に作し給へるを須むよ」とよみて、他力眞實を力説せられた我が聖人に取りては不可能なことである。是に於て、眼光紙背に徹する聖人は、上の「眞實心中に作したまへるを須むよ」の筆格に従つて、殆んど必然的に、「不善三業必須眞實心中捨」等の文を「不善の三業は、必ず眞實心の中に捨てたまひしを須むよ」等と讀まるるに至つた。かくて、至誠心の釋の下に、自力眞實と、他力廻向の眞實の二つを明かにし給ひて、自力眞實は「化卷」に引き、他力眞實は、ここに引用せられたために、善導大師の幽意は、ここに初めて、圓に表出せられたのである。

二者深心言深心者卽是深信之心也亦有二種一者決定深信自身現是罪惡生死凡夫曠劫已來常沒常流轉無有出離之緣二者決定深信彼阿彌陀佛四十八願攝受衆生無疑無慮乘彼願力定得往生

【讀方】二には深心。深心といふは即ちこれ深信の心なり。また二種あり。一には決定してふかく、自身は現にこれ罪惡



生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねに没しつねに流轉して、出離の縁あることなしと信ず。二には決定してふかく、かの阿彌陀佛の四十八願は衆生を攝取し給ふ。疑なく慮なく、かの願力に乗じて、さだめて往生をうと信ず。

【字解】 一 曠劫 曠は遠の義、遠い昔から重きれた劫。長い長い時間のこと。

二 出離之縁 生死の世界を離れ出づる縁（手がかり）。

【文科】 七深心の中、初めに二種深心をあげたまふ一段である。

【講義】 三心の中で、第二が深心。この深心といふはいかなることかといふに、深く信ずる心といふ義で、不了佛智の疑ひを離れて、名號の御誦れを深く信ずることである。この深心が又二種に分れる。一には、我が身は、現在只今、朝から晩まで、悪をなし罪を作つて居る生死の凡夫であつて、久遠の昔からこの生死海に浮きつ沈みつして漚しなく、永劫の末かけても、自分の力では、到底、生死海を出離れることの出来ない奴であると、深く治定して信ずることである。二には阿彌陀如來の起して下された四十八願は、全くこの我等衆生を攝取して下さるための本願である。それであるから私共が、疑はずあやぶまず、仰せのままに、本願にすがれば、必ず往生を得させて下さるに間違ないと、治定して深く信ずることである。

【餘義】 一、此の深心に就いて、論ぜねばならぬこと、味はねばならぬことは、甚だ多い。先づ初めに、七深信の綱格、關係を見ねばならぬ。

これを知るに、「愚禿鈔」の此の下を繕ぐが、一番近道であると思ふ。同鈔、初めに「二者深心」と標して、本典と同じく二種深心をあげ、終りに、

今斯深信は、他力至極之金剛心、一乘無上之眞實信海也。

と斷案を下し、更に、

文の意を按ずるに、深信に就て、七深信あり、六決定あり。七深信者

第一の深信は、決定して自身を深信する、即ちこれ自利の信心なり。

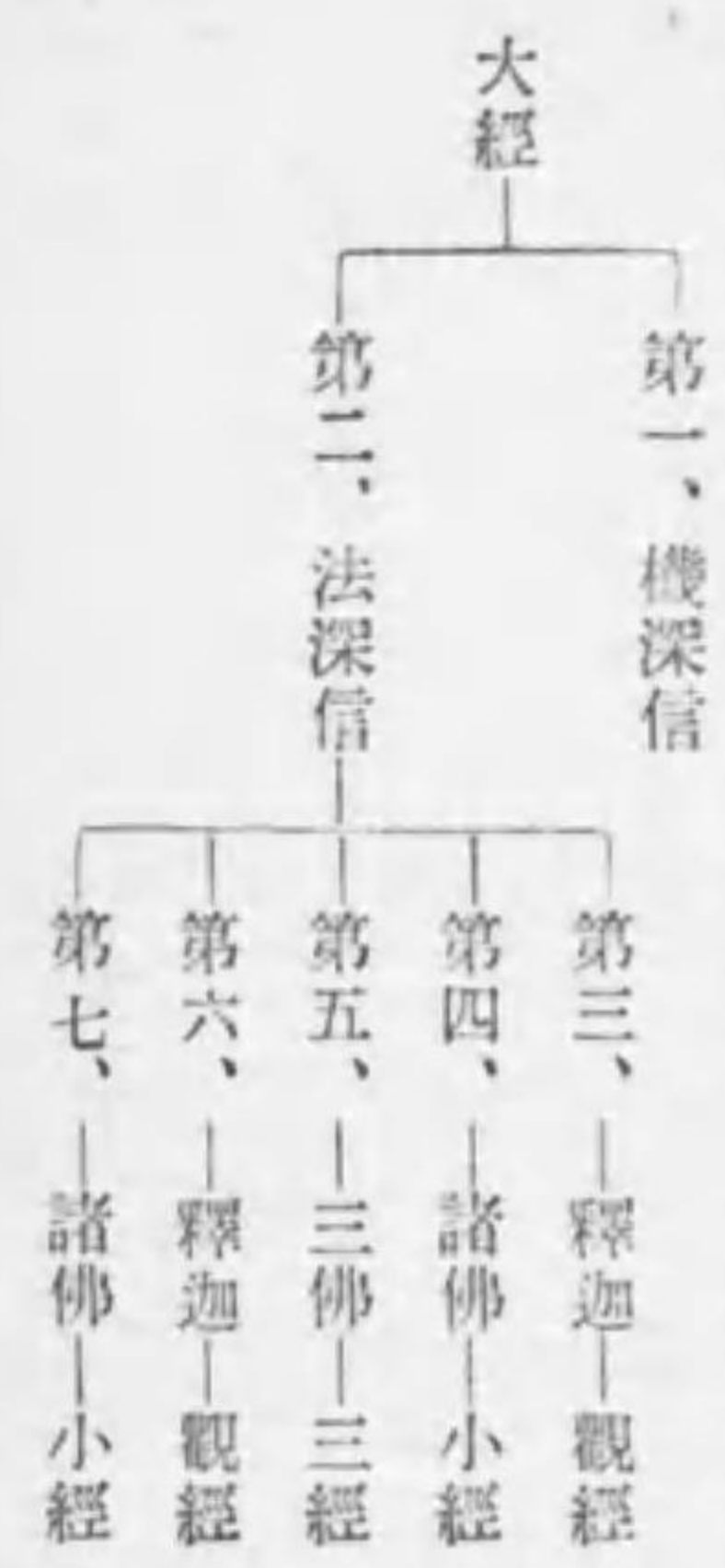
第二の深信は、決定して乘彼願力を深信する、即ちこれ利他の信海なり。

第三には、決定して觀經を深信す。第四には、決定して彌陀經を深信す。

第五には唯佛語を信じ、決定して行による。第六には此の經に依りて深信す。

第七には又、深心の深信は決定して自心を建立せよ。

この御指南によりて見るも、聖人が、七深信の中、特に機法二種深信を至要とせられたことが知られる。七深信の中、第一は機の深信、第二は法の深信、そして第三以下は、法の深信を廣説したものである。即ち第三より第六までは釋迦諸佛の言葉によりて、法の深信を信ぜしむるにある。そして第七深信は、法の深信を人行の二つに分ちて深信せしめる。人は釋迦諸佛、行は正行である。釋迦諸佛の言葉を信ずるが就人立信、その人の勧めを信ずるが就行立信である。二方面より云うたものであるが、歸する所は、彌陀如來の四十八願を信ぜしむるにある。この意味に於て、七種深信は全く機法二種深信に攝まることとなる。





二、上の『愚禿鈔』に、我聖人は「斯の深信は他力至極之金剛心」であると仰せられ、『略本』には、『禮讚』の文を引きて「深心即是眞實信心」と明瞭に仰せられた。即ち此の深信は本願の三信の一たる信樂に當るのである。而も信樂とは、如來の本願を二心なく深く信することである。若し信樂と深信と同一であるとすれば、信樂にも機法の二種あることとなり、無有出離之縁の惡機を歡喜し愛樂することとならねばならぬ。

この衝突は如何にして、和會するかと云へば、これは單に言葉の相違であつて、信心の體の相違ではないのである。信樂と云ふ時は、深く信するといふ法の深信が表になりて、機の深信は、其裏に隠れてをる。然るに此深心は、この信樂の内容を打ち出して、本願の正機を示されたのである。故に「化卷」(四六字)には、

大經には、信樂と言へり。如來の誓願、疑蓋雜はることなきが故に信と言ふなり。觀經には、深心と説けり。諸機の淺信に對する故に、深と言へる也。

と仰せられて、信樂と深心の同一を示さるとともに、言葉の相違の中に、自と相對する所の異なることを示された。信樂は、單に疑なく信するといふ信仰の一面を表はし、深心は、自力の淺信に對して、如來廻向の深い根柢ある信仰たる方面を表明せられたのである。従つて意味深遠なる二種深信となつたのである。更に言葉の源に就いて云へば、信樂は大經の三信の一であるから、法の方を表はし、深心は觀經の三心の一であるから、機に受けた方面を打出したのである。

三、然らば一信心たる深信と、二種深信の關係はどうであるかと云へば、此下の『六要鈔』には、

深等と言ふは、能信の相を明す。亦有等とは、所信の事を明す。これ即ち機法二種の信心なり。と云ひて、一心は能信、二種深信は所信の事である。一の燈火が、一室の上下を照すやうなものであると解してをられる。本願を二心なく信する信心が、機を照す時は、機の深信となり、法に向ふ時は法の深信となると云ふのである。

ふのである。

更に進んで、機の深信の内容に論及し

無有等とは、正しく有善無善を論ぜず、自の功を假らず、出離は偏に他力にあることを明す。衆道の諸教は盛に生佛一如の理を談すれども、今教は自力の功なきことを知るに依りて偏に佛力に歸す。之に依りて、此信殊に最要也。

と云うてある。前の解釋とともに簡單であるが、實に要領を得てゐる名釋である。故に多くの先輩は、存覺師のこの説に従ひて、一心二種の問題を解釋してゐるのは、尤の次第である。

上述の如く『六要鈔』には、衆道の諸教は、盛に生佛一如の理を談すれども、他力の教は、自力の無功を知りて、他力に歸するのであると云うてある。即ちこの自力無功と自覺することが、甚だ至要であるから、存覺師も、此機の深信は、殊に最要であると云うてをられる。

宗教の第一歩は、實に此自己を知ると云ふことである。眞に自己の何者たるかを自覺する所に、眞の信仰が生れてくるのである。吾々は、稍々もすれば、自己に徹底することを忘れて、如來を信じ、往生を願はんとする。

此時は、單に平安を得たい、力を得たい、落着場が得たい、といふ愆心だけが先に立ちて、本願の御目的である所の自分の本性は、心の奥に隠れてをる。夫であるから、いつ迄たつても本願の謂れを知ることには出來ぬ。吾々は初めに、外に向ひて如來を求めた心を、内に向けねばならぬ。

よもすがら、佛の道を求むれば

我心にぞ、尋ね入りぬる。

源信和尙の歌と稱せらるる此歌のやうに、我心に尋ね入る、即ち我心の何者たるかを自覺するのである。窺り



起る心の表皮を引き破り、引きちぎり、眞實の自分の相に徹する時に、平生には考へることすらも出来なかつた自己の眞相に驚くのである。善導大師は、其眞實の自己に當面されて、あの「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫」等と叫ばれたのである。併しこれは、決して善導大師だけの實感ではない。何人でも、如實に自己を見る時には、ここに衝からざるを得ない。これが機の深信である。されど眞にこの機に觸れた一念同時に、如來大悲の本願を信受する。「罪惡生死の凡夫」と感知し、「無有出離之縁」と自覺すると同時に、存覺師の所謂「自力無功を知りて、偏に佛力に歸」するのである。

故に機の深信と云ふことは、自力の行き詰まつたことである。吾等の久遠劫來の本性は此の自力我慢である。他人の心も、天地間の凡ても皆、自分の自由にしたい、思ふ通りにしたいと云ふ心である。この自己の本性に觸れ、自力無功を自覺して、精神的に叩き落ちた所が、大悲の至極に觸れた所である。機を信じて、その後或時間を隔てて法を信ずると云ふやうな生濫いものではない。人生の凡てが當にならず、自力の凡てが力とならず、只本願に向ふ其せつば詰まつた所である。そこが信仰の生れる所である。信仰其者である。折り返して云へば、この自己の眞相に觸れると同時に、本願を信知する。其處を文字に打ち出したのが、大師の機法二種深信である。暫く二つに分けたものの、實は一體の兩面であつて、分つことは出来ぬ。故にどれかの一つを擱んで、之よりほかはないと骨張してはならぬ。存覺師は、この點を注意せられて、深信は能信、二種深信は、所信の事であるとせられたのである。

能信  
機法

機法二種深信は、一體の兩面であつて、決して離るべきものでないと云ふことを示すために、存覺師は、この二深信を、能信の深心に對する所信とせられたが、然らば、能信と所信との關係はどうであるか。能信の關係は、情と機法二種深信の關係のやうなもので、實は判然と分つことは出来ないのである。即ち能信

とは、信じ手の側、所信は信ぜられるものからである。信ずると云ふことは、信ぜられる事のほかはない。又信ぜられる事は、信ずると云ふことを離れては、無意義である。一應分けて云へば「決定して深く信ずる」能信と、「罪惡生死の凡夫」「阿彌陀佛の四十八願」の所信の區別をつけるけれども、この二つが渾然として、一心をなすので、決して分つことは出来ぬ。即ち二種深信は、深心の内容である。深心其者である。信の一念に必ず具はる二種の信相である。故に我聖人は、上述の如く、「愚禿鈔」にこの二種深信を標して、「今斯深信は、他力至極之金剛心」等と仰せられたのである。説明の便宜上、機法とか、能所とかと云ふ籠籠を須むるのであるが、これ等は、電氣に於ける電線のやうなものであるから、吾等は、これによりて、活きた信力に觸れるばかりである。

四、彌陀を信ずると云ふことが、單に、一心歸命と發表せられた場合には、起らなかつた問題が、この機の深信の發表によりて起つた。夫は此の機の深信が、凡夫のみならず聖者にも通するのであるかと云ふ問題である。これを凡聖通局論と稱す。

この問題は、見方によりては、甚だ有益にして、興味あるものである。即ち言葉を換へて云へば、他力宗教に於ける聖者の意義とでも云ふべきである。所が一方他力教それ自身に於ても、龍樹、天親の二祖を菩薩と稱して聖者の部類に入れてあり、そして二祖の著書の上にも、この機の深信が明示されてないために、この問題は、内外の聖者に對する興味あるものとなつたのである。

従つて問題の起因は、甚だ簡單である。即ち聖者の意義である。自力の修道によりて得たる證りは、果して眞正なる證りであるかと云ふことである。所謂聖者と稱せらるる人々は、卓越したる能力を以つて、凡人以上の高尚なる精神生活をしてゐても、其中心に迷ひの根の斷ち切れてをらぬかどうかと云ふのである。聖道の教へにあ

他力宗教に於ける  
義の義

凡聖通局論



りては、盛んに衆生も佛も同一であると談じて、道を修めてをるけれども、或は天に向ひて、バベルの塔を築いてゐるやうな愚を演じてをるのではなからうか。素より漸次に努力すれば、凡人以上の高い立場の上に立つことが出来るけれども、上れば上るほど、裏心は益々絶對に對して取りつくことの出来ぬ惱みがあるのでないか。若しその惱みを感じずして、自己の現在の立場を樂み、夫を自負し、夫を固執するならば、知らず知らず憍慢の煩惱に捕へられてゐると云はねばならぬ。強く云へば、人間として生れた以上は、純善無漏の聖者と云はるる人は一人もなく、皆、中心には迷ひの根切れのしない所がありはせぬかと云ふのである。龍樹、天親二祖の如きも、善導大師の如く、明瞭に機相を打ち出されては無いけれども、一心に如來に乘託せられたことに依りて見れば、或は罪惡の根柢たる自我の眞相に觸れて、自力無功を自覺して、他力に歸せられたことかも知れぬ。聖者と凡夫の間には、境遇や思想の相違から、等しく自力無功を自覺するにも、其感味は種々に異なることであらうが、其自己の眞相に觸れる點に至つては、同一であるかも知れぬ。或は聖者の方が、自力の高い山上から叩き落ちる點に於て、一層明快に此機相を自覺するかも知れぬ。我聖人の胸中には、御自身の實驗上から、此凡聖是一の思想をもつてをられたことは明かであるやうに思はれる。

我聖人は『大經』下卷に於て、此凡聖同一の教へを味はれた。即ち大聖釋尊は、聖道門の代表的人物とも稱すべき彌勒菩薩に對して、

汝及び十方の諸天人民、一切の四衆、永劫より以來五道に展轉して、憂畏勤苦すること具に言ふべからず。乃至今世まで生死絶えず。佛と相値うて經法を聽受し、又復、無量壽佛を聞くことを得たり。

と仰せられた。ここに至りては、「無數劫より來、菩薩の行を修し」たる彌勒菩薩も、我々凡夫と、全く同一に見做されてをる。「五道に展々して生死絶えず」は機の深信、「復、無量壽佛を聞くことを得たり」は法の深信

である。我聖人は、この教へによりて、『唯信鈔文意』十四丁に、

大小の聖人、善惡の凡夫の、みづからが身をよしと思ふ心をして、身をたのみず、あしき心をさかしくかへりみず、また人をよしあしと思ふ心をして、ひとすぢに、具縛の凡夫、屠沽の下類、無礙光佛の不可思議の誓願、廣大智慧の名號を信樂すれば、煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり。

と仰せられ、「行卷」(九下)には、

大小の聖人、重輕の惡人、皆同じく齊しく、選擇の大寶海に歸して念佛成佛すべし。

と云ひ、『和讃』善導大師の下に「煩惱具足と信知して(機深信)、本願力に乗すれば(法深信)」の二種深信の次に、

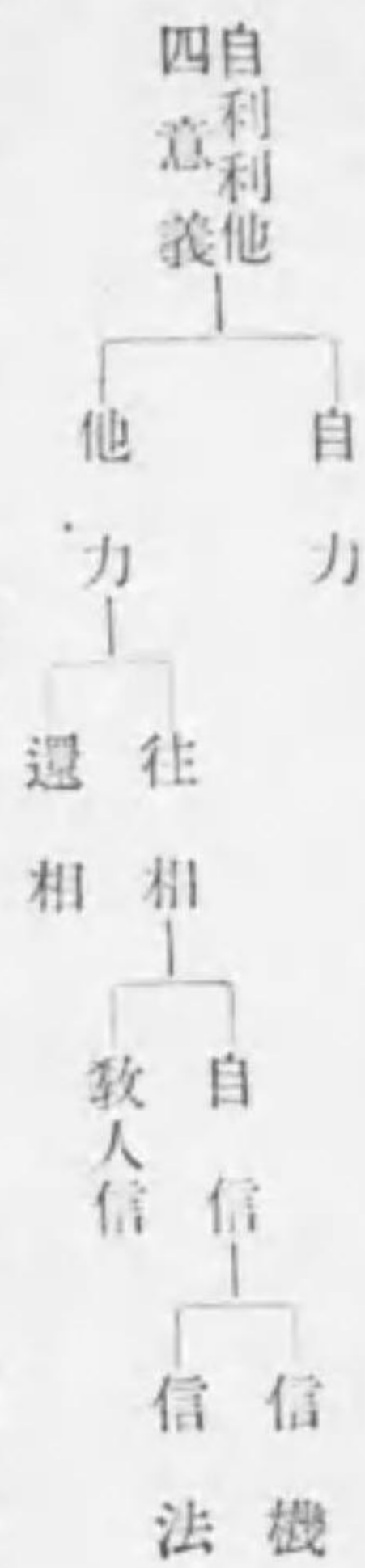
願力成就の報土には 自力の心行いたらねば  
大小聖人みなながら 如來の弘誓に乗ずなり。

と、凡聖同一を示された。我聖人の此確信は、單に教權によりて得られたのではなくして、深く自己を省察せられた結果である。人間は何處まで進んでも、煩惱の根を斷つことは出来ぬ。即ち自力の心を捨てることは出来ぬ。この點を見破つて、釋尊は補處の彌勒菩薩に對して、生死輪廻の身と知れど、自覺を促されたのである。ここに自力を執する人の悲みがあるのであるが、又その悲痛を一念自覺するならば、非常なる喜びが湧くのである。故に他力本願の教ふる所は、外儀のすがたを省みることには要らぬ。凡聖善惡のそのまま、姿を改めず、只自力の心をして、身をよしと思ふ心をして、本願に歸するのである。この自力の心をすつるは、出離の縁あることなしと信する機の深信である。そして亦、他力廻向の心である。

我聖人の凡聖同一論の前には、俗世間の稱讚を博する聖者徳者、並に各種の方面に能力を有する人々は、特に



橋傲なる我の真相を省みて、他力本願に本づかねばならぬ。  
 五 因みに上(六三一頁)に引きたる『愚禿鈔』の文中、七深信の第一に、「決定して自身を深信する、即ちこれ自利の信心也」とある。これに對して第二の深信を「即ちこれ利他の信海也」と云うてある。古來この自利利他の言葉を、上に述べた自利眞實、利他眞實の如くに自力他力と解して、自利の信心を自力の信心となし、機の深信自力を主張する人もあつたが、大谷派の香月院師は、我聖人の用ゐられた自利利他の言葉には、場合によりて、四種の異なる意義があることを闡明せられた。これは甚だ有益なる説であるから、左に之を圖解する。



第一の場合は、上の至誠心の下に出でたる自利眞實、利他眞實である。この時は、自利は自力、利他は他力の異名である。第二の場合は『愚禿鈔』下十七丁に出づる解釋で、往還二廻向を擧げ、第一の往相廻向の傍註に自利、還相廻向の傍註には利他とせられてある。この時は、圖の如く他力の中で、往相は自身の極樂往生であるから自利とし、還相は衆生濟度の爲めであるから利他とせられたのである。第三の場合は、往相の中で又、自利利他と分かれ、自信は自利、教人信は利他であると云ふ。『二門偈』に因の五念の中、初めの禮拜、讚嘆、作願、觀察の四念門は、自身の往生の行即ち自行であるから自利、第五の廻向門は、教人信即ち化他であるから利他であるとせられてある。第四の場合は、自信の上に自利利他の二つと分れる。機を信するは自利、法を信するは利他、今の『愚禿鈔』の信機信法を自利利他とせられたのは大である。

又決定深信釋迦佛說此觀經三福九品定散二善證讚彼佛依正二報使人忻慕又決定深信彌陀經中十方恆沙諸佛證勸一切凡夫決定得生

【讀方】 また決定して、ふかく、釋迦佛、この觀經の三福、九品、定散二善をときて、かの佛の依正二報を證讚して、人をして忻慕せしむと信ず。また決定して、ふかく、彌陀經のなかに、十方恆沙の諸佛、一切凡夫を證勸して、決定して生ずることをうと信ずるなり。

【字解】 一 三福 世福(世間の道德。父母に孝養すること。師長に奉事すること。慈心を以て殺生せざること。十善業を修めること)。戒福(佛の定められたる戒律。佛法僧の三寶に歸依すること。衆戒を守ること。威儀を犯さぬこと)。行福(大乘の教へる修行。菩提心を發し、因果の理法を信じ、大乘經典を讀み、他の行者に勧めること)。

二 九品 淨土の散善の機類を、行の勝劣に従つて九種に分類せるもの。上に三品、中に三品、下に三品を頌つ。之を上三福に配當すれば、



三 定散二善 定善は、慮を息め、心を凝して觀想すること(觀法によりて獲る善)。散善は、惡を廢めて、善を修めること(上の三福を修めること)。



四 依正二報 依報、正報のこと。依報は、有情の所依となる果報。山河、大地、衣服、飲食等を指す。正報は、依報に對す。正しく自己の業因によりて獲たる正しき果報。有情の肉體精神を指す。

五 十方 東西南北、四維、上下の十方。

六 恆沙諸佛 印度の大河恆河の沙の數程多數の佛の意、一切諸佛のこと。

【文科】 七深信の中、第三『觀經』深信、第四『彌陀經』深信をあげ給ふ。

【講義】 また、釋迦如來が、この『觀無量壽經』に三福と九品と定善散善とを説いて、彼の阿彌陀如來の淨土の依報莊嚴と正報莊嚴を示し、極樂淨土は斯ういふ淨土であると證誠し、斯ういふ結構な淨土であると讚嘆して衆生をして淨土を忻慕せしめ給うたことを治定して深く信ずるのである。

また、『阿彌陀經』の中に、十方世界の數限りもない多くの諸佛が、自ら證據に立ち給うて、すべての衆生に彌陀如來を信ぜよと、一様に勸めて下されたことを、治定して深く信ずるのである。

【餘義】 一、この第三深信は、『化卷』の第十九願の下にも引いてある。其理由はどうかと云へば、『觀經』は隱顯兩義があるから、此文にも兩義ありとて、『信化兩卷』に引かれたのである。即ち顯の義よりこの文を見れば、『觀經』は定散二善等を説いて、人をして淨土を忻慕せしめ、自力廻向の行を勵ましむることとなり、隱の義より見れば、『觀經』に定散二善等を説かれたのは、人をして淨土を忻慕せしむる方便であつて、遂に『大經』の眞實に入らしめんがためであると信ずるを云ふ。

二、第四深信も亦『化卷』第廿願の下に引用せられてある。これも『觀經』と等しく、隱顯の兩義があるからである。顯説より云へば、十方諸佛の證誠する所は、大善大功德の名號を稱へる力で往生を決定すると信ずることである。隱説より云へば、諸佛の證誠するのは、自力念佛を勵むことではない。只極難信の名號の謂れを信ぜ

しめて往生せしめんとすることを信ずることである。故に顯の義によりて『化卷』に引き、隱の義によりて、『信卷』に引用せられたのである。

又深信者仰願一切行者等一心唯信佛語不顧身命決定依行佛遣捨者即捨佛  
遣行者即行佛遣去處即去是名隨順佛教隨順佛意是名隨順佛願是名眞  
佛弟子

【讀方】 また深信する者あふぎ願はくば、一切の行者等、一心にただ佛語を信じて、身命をかへりみず、決定して行によりて、佛の捨てしめたまふ者をばすなはち捨て、佛の行せしめたまふものをばすなはち行じ、佛の去らしめたまふ處をばすなはち去る。これを佛教に隨順し、佛意に隨順すとなづく。これを佛願に隨順すとなづく。これを眞の佛弟子となづく。

【文科】 七深信の中、第五深信をあげ給ふ。

【講義】 斯ういふ工合に深く信ずる人達よ、すべての行者達よ、どうぞ願くば、專一の心を以て、唯、佛陀の御語のみを信仰し、自分の身も命も惜まず、押し切つて、念佛の一行に依り、佛の捨てよと仰せられる難行難修はこれを捨て、佛の行ぜよと仰せられる專修正行はこれを行じ、佛の去けよと仰せられる御淨土へ往生するがよい。これを釋迦如來の御教へに隨ひ、諸佛如來の御心に隨ひ、阿彌陀如來の本願に隨ふと名けるのである。斯ういふ行者を眞の佛弟子と名づけるのである。

又一切行者但能依此經深信行者必不悞衆生也何以故佛是滿足大悲人故實  
語故除佛已還智行未滿在其學地由有正習二障未除果願未圓此等凡聖縱



使測量 諸佛教意未<sub>レ</sub>能決了<sub>一</sub> 雖有<sub>二</sub>平章要須<sub>一</sub>請佛證<sub>二</sub>爲<sub>レ</sub>定也若稱<sub>二</sub>佛意<sub>一</sub>即  
 印可言<sub>二</sub>如是如是<sub>一</sub>若不可<sub>レ</sub>佛意者即言<sub>二</sub>汝等所說是義不如是<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>印者即同<sub>二</sub>無記  
 無利無益之語<sub>一</sub>佛印可<sub>レ</sub>者即隨<sub>二</sub>順佛之正教<sub>一</sub>若佛所有言說即是正教正義正行正解  
 正業正智若多若少衆不<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>菩薩人天等<sub>一</sub>定<sub>二</sub>其是非<sub>一</sub>也若佛所說即是了教菩薩等說  
 盡名<sub>二</sub>不了教<sub>一</sub>也應<sub>レ</sub>知是故今時仰勸<sub>二</sub>一切有緣往生人等<sub>一</sub>唯可<sub>レ</sub>深信<sub>二</sub>佛語<sub>一</sub>專注奉行  
 不可<sub>レ</sub>信用菩薩等不相應教<sub>一</sub>以爲<sub>二</sub>疑礙<sub>一</sub>抱惑自迷廢<sub>二</sub>失往生之大益<sub>一</sub>也<sub>五</sub>

【讀方】 また一切の行者、ただよくこの經によりてふかく行を信ずるは、かならず衆生を憐たざるなり。何を以てのゆゑに、佛はこれ満足大悲の人なるがゆゑに、實語したまふがゆゑに、佛をのぞきて已還は智行いまだ滿たず、その學地にありて、正智の二障ありて、いまだ除かざるによりて果願いまだ圓ならず、此等の凡聖はたとひ諸佛の教意を測量すれども、いまだ決了することあたはず。平章ありと雖も、かならずすべからず佛證をこうて定とすべきなり。もし佛意にかなへば、すなはち印可して如是如是とのたまふ。もし佛意にかなはざるをば、すなはち汝等が所説この義不如是とのたまふ。印せざるはすなはち無記、無利、無益の語におなじ。佛の印可したまふ者は、すなはち佛の正教に隨順す。もし佛の所有の言説はすなはちこの正教、正義、正行、正解、正業、正智なり。もしは多もしは少、すべて菩薩人天等をとはず、その是非を定む。もし佛の所説はすなはち了教なり。菩薩等の説はことごとく不了教となづくるなり、知るべしと。この故に今の時、仰いて一切有緣の往生人等をすすむ。ただふかく佛語を信じて、專注奉行すべし。菩薩等の不相應の教を信用して、もて疑礙をたし、衆生を憐たざるを以て、往生の大益を喪失すべからざれと。五

【學地】 一 學地 圓位の修行時代をいふ。この間は衆生ははねはねなる位にある故に有學地といふ。今は將して學地といふ。之に對して眞の證りに至れり位を無學地といふ。

二 正智二障 煩惱と、煩惱の習氣のこと。正とは正使、煩惱を正使といふ。凡夫は常に煩惱の爲めに使はるるにより煩惱を使といふ。其正しき體たる見惑、修惑を指して正使といふのである。之に對して、其煩惱の氣分の殘つてゐるのを習氣といふ。

三 果願 涅槃の果を求むる願のこと。

四 凡聖 凡夫と聖者。修行の階位中、初住（不退位）以上を聖者、初住以下即ち十信以下を凡夫といふ。

五 平章 平は正すこと、章は明かなること。ものを正し明かにすること。

六 無記 善、惡、無記の無記にあらず。記は記別の義であつて、意味を分別してかうかうだと決定すること。ここには、無意味といふ程の意。

七 正教 正しい教。

八 正義 其教へに含まれたる正しい義理。

九 正行 正しい佛法の修行。

一〇 正解 智慧を以て、正しく教へを了解すること。

一一 正業 業は動作、正しい威儀を具へた立居振舞。

一二 正智 正しい佛法の智慧。

【文科】 七深信の中、第六深信をあげたまふ。

【講義】 また、すべての行者達よ、但、この『觀無量壽經』に依つて、深く念佛の一行を信仰する人は、自ら道をあやまたないのみならず、又他の衆生を誤たしむるやうなことはない。何故ならば、一切の生あるものの中、



佛のみ大悲を満足し給うた方であり、佛のみ、眞實の語を宣ふ方であるからである。菩薩と雖も、佛果に達し給はぬ中は、満足大悲の方とは曰はれない。また誠に諸法の奥底を極め盡した方でないから、眞實の語を宣ふ方とは曰はれない。佛を除いては、いかなる菩薩でも、智慧も修行も未だ充分といふ所に達せないので、因位の修行時代にあつて煩惱も煩惱の習氣も未だ斷じ盡されず、佛果を求むる願がまだ満足せられないのである。これらの凡聖菩薩方は、どんなに諸佛の教意を押し測つても、はつきりとかうだとあきらかにすることは出来ないのである。また假令自ら諸法の道理をただしあきらめられても、佛の御證明を得て初めて定量とし給ふのである。もし菩薩の意見が、佛の御意に契へば佛は如是知是と印可し給ふが、御意に契はなければ、御前達のいふ所の義理は不如是であると言ふのである。印可しにならない時には、無意味な無利益な語と同じいのである。もし印可しになつた時には、佛の正しい御教へに相應したのである。すべて佛の御語はいかなるものでも、その能詮の側からいへば、正しい教へであり、所詮の側からいへば、正しい義理である。又、正しい佛法の修行と、正しい佛法の解了と、正しい威儀を具へた立居振舞と、正しい佛法の智慧を教へて下されるのである。菩薩でも人間でも、天上人でも、多人數にせよ、少人數にせよ、これらのものの意見は、みな佛が、その意見の是非を定め給ふので、佛の説き給ふ所は、みな決了の教へであるが、菩薩以下の説き給ふ所は、すべて、未決了の教へといふのである。斯ういふ譯柄であるから、今私は、一切の御縁ある往生を願ふ人達に勸めていひたい。どうぞ、深く佛の御語を信仰して、身を入れて奉戴して頂きたい。菩薩以下の、佛の御教へと相應せない不了義の教へを信仰して、それに惑はされて、疑を抱き惑を起して、自分から誤つて、淨土往生の大利益を失ふやうなことをして頂きたくないのである。

釋迦指勸一切凡夫盡此一身專念專修捨命已後定生彼國者即十方諸佛悉皆同讚同勸同證何以故同體大悲故一佛所化即是一切佛化一切佛化即是一佛所化即彌陀經中說釋迦讚嘆極樂種種莊嚴又勸一切凡夫一日七日一心專念彌陀名號定得往生次下文云十方各有恆河沙等諸佛同讚釋迦能於五濁惡時惡世界惡衆生惡見惡煩惱惡邪無信盛時指讚彌陀名號勸衆生稱念必得往生即其證也又十方佛等恐畏衆生不信釋迦一佛所說即共同心同時各出舌相徧覆三千世界說誠實言汝等衆生皆應信是釋迦所說所讚所證一切凡夫不問罪福多少時節久近但能上盡百年下至一日七日一心專念彌陀名號定得往生必無疑也是故一佛所說即一切佛同證誠其事也此名就人立信也

【讀方】釋迦一切の凡夫をおしへ、勸めて、この一身をつくして、專念專修して、命を捨ててのち、定めて彼の國に生るれば、すなはち十方諸佛ごとごとくみな、おなじく讚め、おなじく勸め、おなじく證したまふ。何を以ての故に、同體の大悲なるがゆゑに、一佛の所化はすなはちこれ一切佛の化なり。一切佛の化は即ちこれ一佛の所化なり。すなはち彌陀經のなかにとかく、釋迦、極樂の種々の莊嚴を讚嘆したまふ。また一切の凡夫をすすめて、一日七日、一心にもつばら彌陀の名號を念せしめて、定て往生をえしめたまふ。次下の文にのたまはく、十方におのおの恆河沙等の諸佛ましまして、おなじく釋迦よく五濁、惡時、惡世界、惡衆生、惡見、惡煩惱、惡邪、無信のさかりなるときにおいて、彌陀の名號を指讚して、衆



生を勸勵せしめて、稱念すればかならず往生をうとほめたまふ。即ちその證なり。また十方の佛等、衆生の釋迦一佛の所説を信ぜざらんことを恐れて、即ち共に同心同時におの舌相をいだして、あまねく三千世界におほうて、誠實の言をときたまはく、汝等衆生みなこの釋迦の所説、所説を信ずべし。一切の凡夫、罪福の多少、時節の久近をとはず、ただよくかみ百年をつくし、しも一日七日にいたるまで、一心にもはら彌陀の名號を念ずれば、定めて往生をうることを、必ず疑なきなり。このゆゑに一佛の所説をばすなはち一切の佛、おなじくその事を證誠したまふ。これを人について信を立すとなくるなり。乃至

【字解】 一 專念 専ら念佛一行を稱ふること。

二 專修 五專修（讀誦、觀察、禮拜、稱名、讚嘆）。ここは、専ら修むる意にして、念佛一行を專修すること。專念に同じ。

三 同體大悲 諸佛の慈悲をいふ。三世諸佛の慈悲とは、衆生をして彌陀の淨土へ往生せしむることである。故に諸佛の慈悲は、彌陀と同體の慈悲である。

【文科】 七深信の中、第七深信の一部たる就人立信を示したまふ。

【講義】 釋迦如來は、あらゆる凡夫を教へ勸めて、彌陀の淨土を願生せしめ、この身體のある限り、ひたすら念佛の一行を修せしめ、命終つて後に極樂に往生させて下さるのであるが、十方に在すあらゆる諸佛も、釋迦如來と同じやうに、念佛の一行を讚嘆し、信心を勧め、自ら證據に立つて下さるのである。斯くの如く、釋迦如來を初め、一切の諸佛がすべて皆、彌陀如來の名號を稱へよと御勧めなされるは、何故であらうかといふに、彌陀の慈悲も、諸佛の慈悲も目指す所は同じい所にあるからである。何故ならば、諸佛といふも、もとは彌陀一佛よりあらはれ給うたので諸佛の慈悲は畢竟するに一切衆生をして、彌陀の淨土に往生させたいといふことであるからである。斯ういふ諸佛の心であるから、一佛の化益し給ふ衆生は、同時に一切の佛の化益し給ふ衆生であり、一切の佛の化益し給ふ衆生は、同時に一佛の化益し給ふ衆生である。斯くの如く、諸佛如來の慈悲は全く同じいものであるから、釋迦も諸佛も、同様に彌陀如來の名號を讚嘆し、念佛一行を修せよと御勧め下されるのである。『阿彌陀經』の中には釋迦如來は語を極めて、極樂淨土のいろいろの莊嚴を讚嘆遊ばされ、又すべての凡夫を勸めて、一日乃至七日の間、一心に彌陀の名號を稱へしめて、往生を得させて下さるのである。『阿彌陀經』の終りの方の御文には、十方の世界に、恆河の沙の數程の諸佛が在して、口を揃へて、釋迦如來が、能くも、かういふ五濁の惡時、惡世界、惡衆生、惡見、惡煩惱、惡邪、無信仰の時代に、彌陀の名號を讚嘆し衆生を勧め勵まして、名號を稱念ふれば、必ず往生が出來ると説き給うたこととぞと讚嘆せられたと説いてある。これは釋迦如來と諸佛とが、同體の慈悲で、同じやうに讚嘆勸信なされる證據である。又、十方に在ます諸佛方は、衆生が、釋迦如來御一方の説法を信ぜないやうなことがあつてはと心配して、同體の慈悲心から釋迦如來の『阿彌陀經』を説かせらるると同時に、銘々、廣長の舌相を出して、三千世界を覆ひ、汝等衆生、この釋迦如來の説き給ふ所、讚嘆し給ふ所、證誠し給ふ所を信仰せよ。あらゆる凡夫、いかなるものでも、罪惡、福徳の多少に拘らず、念佛を修する時節の長い短いには依らず、但、上は生命のある限り、下は一日乃至七日の間でも、一心にひたすら、阿彌陀如來の名號を稱へさへすれば、必ず往生が出來るぞ、これには微塵も疑ひの餘地はないぞよと、偽りのない説法をなされたのである。斯ういふ工合に、釋迦一佛の説法を、一切の諸佛が、證明遊ばされたのである。上來説き來つた所は、釋迦諸佛の能説の人に就いて信を立てるのであるから、就人立信といふのである。

【餘義】 一、此第七深信の初め四十餘行は略され、中程からの文を「當卷」に引用せられた。そして初めの就人立信の文は、「化卷」第廿願の下に再出せられ、つぎの就人立信の文も、「化卷」第十九願の下にも引用せ



られてある。其上『愚禿鈔』下九丁には、此第七深信の傍註に「自利信心」と標せられてある。これ等を總合して古來の註釋家は、此の第七深信に對して二様の解釋を下してをる。

第一説によれば、此深信は自力他力に通ずると云ふ。其模様はどうかと云へば、既に此第七深信の文を我祖は「信化兩卷」に引用されたことによりて知られる。當卷に引用された文は、既に「化卷」にも引用されてあるから、此説を確かにするは云ふまでもないが、初めに略された四重破人の文も、其意は、つぎの廻向發願心の釋に出づる「此心深信せること、金剛の若くなるに由て、一切の異學、異見、別解、別行の人等のために、動亂破壊せられず」と全く同じであるから、矢張り他力に通ずる。そして同時に自力の信を建立する方に解せられるから、自力に通ずることは云ふまでもない。夫であるから此第七深信全體が、自力他力に通ずると云ふのである。そして『愚禿鈔』の自利信心の標註は、上の第五、第六の純他力に對して、此深信の自力の方面を指されたのであると云ふ。第二説に依れば、此深信は、要門より弘願に移る次第を示したものであると云ふ。即ち、初め略された四重の破人の文は、自分の方で信心を固め、如何なる難破を加へられても、決して所信を翻さないと信心を建立する文であるから、明かに自力の信心である。故に『愚禿鈔』に「自利信心」と標註し、「信心を建立する」と仰せられたのである。併しながら、此自力の心はやがて、他力に轉すべきものであるから、暗に他力の信心を含めて説いてある。そして後には利他の信心に結歸してあると見るのが、我が聖人の微意であると云ふのである。

二、第七深信に對する我聖人の見解は、大凡この兩説に結歸するやうに思はれる。兩説のどちらでもよいやうであるが、其特長を云へば、第一説の方は理路が明瞭であるやうに思はれる。文章の何處から何處までが、自力他力と分つよりも此七深信全體の上に自力他力を分つ方が判然するやうである。併し自力より他力に移る相を示したとする第二説の方が亦味ひが深い。自力他力と云ふことは、文字の上にては、極めて截然たる區別がついてゐるやうであるが、實際の心の上では、さう判然と水際立つものでない。この種の味ひの方面から云へば、第二説の方が趣が深いと云はねばならぬ。故に兩説を合様に味ふべきであると思ふ。兩説は決して衝突するものではなくして相依りて聖人の意を圓に發表してゐるのである。

三、就人立信の人に就いて、此下の『六要鈔』には、二義を擧げてある。一は、別解、異學等の人々を指す。これ等の人々の難破に依りて、却つて信心を増長するから、此人々に就いて信を立てると云ふ。二は釋迦諸佛を指す。因位の不完全の人々の説に依らず、佛智圓滿の語に就いて信を立てると云ふのである。我聖人は『愚禿鈔』下十二丁に、此處の本文を引用せられ、「一佛の所説は、即ち一切佛同じく其事を證誠したまふ。此を人に就いて信を立つと名くる也。應に知るべし。」と仰せられてあるから、第二義の釋迦諸佛に依りて立信すると云ふ御思召であることは明かである。第一義は、他の妨難を縁として、信力を増長せしむると云ふは、自力の信心たることは明かである。今は第二義に従ふ。

又就此正中復有二種一者一心專念彌陀名號行住坐臥不問時節久近念念不捨者是名正定之業順彼佛願故若依禮誦等即名爲助業除此正助二行已外自餘諸善悉名雜行衆名疎雜之行也故名深心

【讀方】 またこの正のなかについてまた二種あり。一には一心にもつばら彌陀の名號を念じて、行住坐臥に時節の久近をとはず、念々に捨てざるをば、これを正定の業となづく。かの佛の願に順ずるがゆゑに。もし禮誦等によるをば、即ちなづけて助業とす。この正助二行をのぞきて已外の自餘の諸善をば、ことごとく雜行となづく。乃至すべて疎雜の行となづくるなり。かるがゆゑに深心となづく。



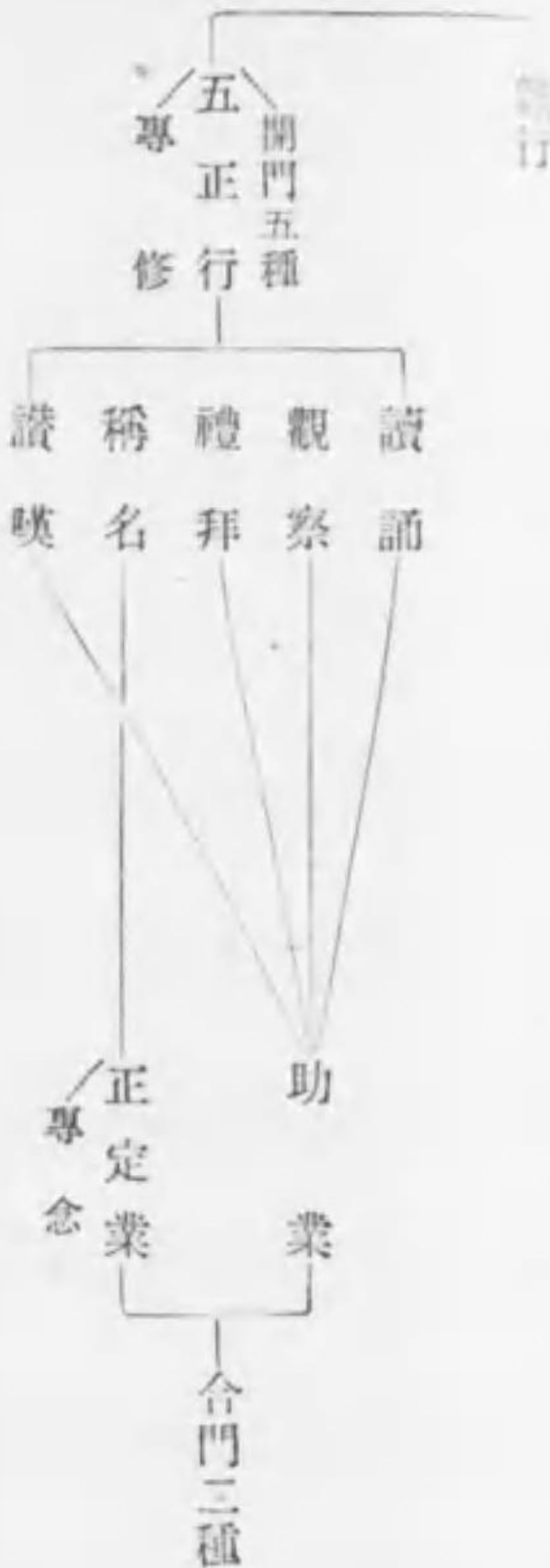
【字解】 一 正定之業 吾等凡夫を正しく浄土往生の身に定めるはたらき。  
 二 雜行 浄土の正行たる五專修（讀、觀、禮、稱、讚）を除いて、餘の一切の諸善萬行（例せば、四諦、六波羅蜜等の如き）をいふ。是等は阿彌陀佛に對して疎々しい雜りのある行であるから雜行といふ。

【文科】 第七深信中の就行立信を示したまふ。

【講義】 扱て又、この五種の正行の中に、二通りに分れて、正業と助業といふがある。一には、一心にひたすら彌陀如來の名號を稱へて、行住坐臥を簡ばす、稱名、時節の長い短いは曰はず、餘念を雜へずに、憶念稱名するを正定之業、略して正業といふのである。何故稱名を正業と名けるかといふに、四十八願を全うしたる第十八願には餘行餘善を簡び捨て、ただ稱我名字と御誓ひなされて、念々不捨者の稱名がこの因位の本願に契ふからである。五種の正行の中、稱名を除いた餘の讀誦、觀察、禮拜、讚嘆をすべて助業と名ける。念佛の助けになる行業といふことである。この正業助業を除いたほかの善根功德は悉く雜行と名ける。彌陀如來にうとうとし、疎遠な、その上に人天三乘の善根のまじはる行をみな雜行と名けるのである。以上長々と説き來つたやうな譯であるから、深心と名けるのである。

【餘義】 一、「化卷」第十九願要門の下には、五種正行を擧げ、其の次に此の助正二行の文を引く。前者を開門五種と云ひ、後者を合門二種と稱す。

前述の如く、既に此の文は「信化兩卷」に引かれてある所から見れば、自力他力に通することは明かであるが、今は就行立信の他力の行體を示さんがためである。左に正雜二行、助正二行の關係を圖示して、自力他力の分齊を明かにするであらう。



即ち行に就いて信を立つると云ふ行に雜行と正行がある。此五正行を二つに合して第四の稱名を正定業として、前三後一の四を助業とする。合門二種が夫である。法然聖人は「選擇集」末、名號付屬章に、

夫速に生死を離れんと欲はば、二種の勝法の中、且く聖道門を開きて、選んで浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲はば、正雜二行の中に、且く諸の雜行を抛て、選んで正行に歸すべし。正行を修めんと欲はば、正助二行の中に、なほ助業を傍にして、選んで正定の業を専らにすべし。正定の業と云ふは、即ちこれ佛名を稱す。名を稱すれば、必ず生ずることを得、佛の本願に依るが故に。

と、慕直に雜行、助業を拂ひ除けて、稱名の一行に進まれた。實にこの「一心專念」等の文は、法然聖人の自力疑心を焼き盡す靈火であつた。聖人は善導大師のこの文によりて、四十餘年の自力宗を轉じて、他力の願海に歸せられたのである。我親鸞聖人が、前の就人立信の下にも「一心專念彌陀名號」の文を二回まで引かれ、今復ここに就行立信の行體として此の文を引用されたことは、尤もの次第と云はねばならぬ。



されど法然聖人の純一なる教へも、之を聞く人々は、自分の根柢に、自力の根切れがしてをらぬために、恰も毒蛇が清水を呑んで、毒水とするやうに、此正定業の念佛を自力念佛として仕舞うたのである。正定業の念佛が自力化せらるれば、他の五正行の自力化せらるることは云ふまでもない。故に我聖人は、信心なくして、單に念佛一行を専修する機類を、第廿願の眞門とし、助正二業を兼行する機類を、第十九願要門として、何れも「化巻」に引用せられたのである。いつもながら聖人が、文字の表面に拘泥せられず、後人の塗つた汚れを拂拭ひて、直ちに文の眞意に徹せらるる眼光は、驚嘆のほかはない。

二、ここに引用せられた「一心専念」等の文意は「一多證文」十六丁に、聖人親ら解釋してをられる。

一心専念といふは、一心は金剛の信心なり。専念といふは、一向専修なり。一向は、餘の善にうつらず、餘の佛を念ぜず、専修は本願のみを、ふたごころなく、もつばら修するなり。

と仰せられた。即ち他力の信心決定の上に、専ら御名を稱ふることであると、更に進んで、

是名正定之業、願彼佛願故といふは、弘誓を信するを報土の業因とさだまるを、正定の業と名くと云ふ。佛の願にしたがふがゆへにとまをす文なり。

と信心正因を強く申されてある。即ち正定業とは、報土往生の業因を指すので、その業因の定るのは一心専念の一心、即ち他力本願を信する時であると云ふ意味である。此解釋によりて、聖人が、一文の何處を眼目と見られ、たかと云ふことが、容易く見られる。「愚禿鈔」下十二丁には、此文を「一」には、一心に彌陀の名號を専念する、これを正定之業と名く。」と簡潔にして仕舞はれた。これを上の解釋によりて見れば、「一心に」は、單なる副詞ではなくして、信心決定のことである。即ち金剛の信心の上から御名を稱へることが正定之業であると云ふのである。もう一つ點どく、上の正定業の解釋によりて云へば、金剛の信心の定る時に、報土の業因が定ると云ふ文

意であるとも云はねばならぬ。

聖人は、何故に、斯様に判然と稱名の一行を専修することを示した文を、強ひて信心正因のやうに解されたのであるか。これが甚だ重要な點である。此の「一心専念」等の文は、單に表面だけを見れば、明かに「一心に稱名すれば、夫が正定業である」といふ意味にしかとれぬ。然るに聖人は「一心に」を「金剛の信心」とし、正定業は、その信決定の時に成立すると、非常に深く味はれたのである。

これは決して、親鸞聖人が、無理な解釋を施されたのではない。此文を實の如く色味せられた結果である。師法然聖人と雖も、決して此の文を單なる口稱を勧めた文と見られたのではない。念佛一行が淨土往生の正定業である、之を専修するが佛願に順するのである、と信ぜられたのである。其法然聖人の胸中に感孕せられた活きた信力を打ち出したのが、親鸞聖人の上述の説示である。故に聖人は、亦一方には非常に稱名念佛を喜ばれた。「専念といふは、一向専修なり」と云ひて、二心なく御名を稱ふことであると仰せられた。只聖人の常に眼を注がれる點は、念佛の眞意に徹底することである。師聖人の滅後、多くの淨土門の道俗は深く自己の胸中に念佛の眞意を味ふことを忘れて、只先師の外儀の賢善精進を追ひ、無信の稱名を勵んだ。そして、其無意味の稱名の保障ともなり、根據ともなる文は、此の「一向専念」等の文である。これ等の似て非なる見解を正し、自己の信仰をありのままに表白されたのが、上の解釋である。

三、上述の如く「一心専念」等の文は、信仰の奥底を示したものであるが、夫と同時に就行立信の行體を表はしてあることを忘れてはならぬ。否、上來叙述した所は、この行は信と離れたものでなく、全く信と一つになつてゐるものであると云うたに過ぎないのである。従つて文の當面は、信不離の行を明すために引用せられたものである。そして其行と云ふことも、既に「行卷」の大行釋の下にも「大行とは、無礙光如來の御名を稱する也」



と仰せられたやうに、殊に今は「信卷」であるから、信に根ざした稱名の意義を示し給ふにほかならぬ。私共はここに來つて、新たに「行信の深い關係を味はずにはをられぬことである。

上述の如く、「一心に」は他力金剛の信心、「專念彌陀名號」は信の上に、専ら彌陀の名號を稱へることであるとすれば、其下の「行住坐臥」乃至「念々不捨者」等の意義が重要な問題となつてくる。これに三説ある。

(一) 西山の或一義にては、「念々不捨者」の「者」を「人」と解して、「念々に捨てざるものは」と讀みて、念々に我等を攝取して捨て給はぬ佛體が正定業であると解釋してをる。所謂我等を助け給ふ佛體が即ち行であると立てて其行が正定業であると云ふのである。此説の如きは、徒らに法の一面に奔りて、稱名念佛が正定業であるといふ眞意義を失うてをるのである。

更に此の下の『六要鈔』には、二義を擧げてある。

(二) 鎮西の『傳通記』一の説にては、此の「念々不捨者」の文は念佛行者の用心の意樂を示したもので、連かに衆事を抛つて只一心に稱名念佛を勵むべきであること云ふのである。即ち念々に助け給へ南無阿彌陀佛と念じ稱へよと云ふことである。此の説は亦あまりに機に傾いて、却つて自力念佛に陥る嫌ひがある。

(三) 西山の『楷定記』三には、上の如く念々に稱名すると云ふことは、吾等凡夫の行ひうる所でない。一食の間でも、無間に稱へることは出来ぬ。夫がどうして、一生に互りて、言葉通りに相續することが出来ようぞ。夫であるから此文は、もう佛願に歸した上は、所行の法も、能行の機も一體不二であるから、行ぜずして而も行する理がある。故に不捨と云ふ。機を獎勵すのでない、法の徳を示すのであると云ふ。そして存覺師は、此説を依用してをられる。

四、次に上の第三説は、言葉は簡單であるが、能く稱名の眞意に徹底してをるやうに思はれる。即ち念々に名號を稱へよとあるから、念々に稱へると云ふ説は、表面は教へに順じてをつても、却つて教へに背いてをるのである。夫は教への眞意義を自覺せぬからである。今の場合が全く夫である。稱名と云ふことは其裏に深い根柢となつてゐる信心を離れては、全く自力念佛に陥つて仕舞ふ。吾等は何よりも先に、此稱名の意義を知らねばならぬ。存覺師が徒らに無信單行の稱名に奔る弊を認められて、此「不行にして而も行する」の理を採用せられたのは、宗祖の深意を發揮してゐると云はねばならぬ。

我聖人の御思召によれば、信心と云ふことは、平たく本願を疑はないと云ふやうな一本線のものではなくて、其裏に名號を稱へることを含んでゐる。云はば立體的なものと見られてゐる。信じてから後に稱へるには相違ないけれども、其稱へる種は、信と一體になつてゐると云ふのである。此點は、聖人の深く感ぜられた點であつて、亦其感味のありたけを、最完全の形式に於て表現せられたものである。既に本願の上において、第十八願は能選擇の願心、第十七願は所選擇の名號を誓はれた。願心は親心、願名は親の名である。親の名を聞くことによりて、親の存在を知り、親心の尊さに觸れる。そして同時に親の名を呼ぶのである。故に親の名と、親の心は離れたものでない、全く一つである。廣大なる親心を打ち出したのが親の名であるから、此名の謂れを知つた所が親心に觸れた時である。従つて親を呼ぶ方から云へば眞に親の名を呼ぶ子は、親心を信じた子でなければならぬと云ふことになる、第十八願は大慈悲の佛心、第十七願は此の慈悲心を圓に表現した御名である。故に此二つは決して離れることは出来ぬ。『末燈鈔』教名房への御返事に、

誓願名號と申して、かはりたること候はず。誓願を離れたる名號も候はず。名號を離れたる誓願も候はず候。かく申し候も、はからひにて候なり。ただ誓願を不思議と信じ、また名號を不思議と一念信じとなへつるうち、何條わがはからひをいたすべき云々



と仰せられた。一念信する所が稱へる所であると云ふのである。同じく「末燈鈔」(六丁)に「信の一念、行の一念二つなれども、信を離れたる行もなし行の一念をはなれたる信の一念もなし」と、信と行との根本的の不離一體を示され、「歎異鈔」には、

誓願の不思議をむねと信じたてまつれば、名號の不思議も具足して、誓願名號の不思議ひとつにして、さらにことなるなきなり。

と仰せられた。かく仰せらるる所以は名號と云うても、誓願に離れたものでないから、只不思議と信するのほかはない。其不思議と信する一念の所に、行の一念が具はりてをるから、よしや此時稱へる暇なくて命終るとも、名號を稱へたと同様であると、名號に著する心を拂ひ給ふのである。其際とい教へが、「歎異鈔」の初めの文である。

彌陀の誓願不思議に助けられまゐらせて、往生をば遂ぐるなりと信じて、念佛申さんとおもひたつ心のおこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。

この行信一體の妙趣に觸れた以上は、我力で稱へてまゐらうの、これ程に念佛が稱へられるの、といふ機の功を募ることは、非常な自力我慢の邪路に陥つてゐることが知られる。即ち信も行も如來の御誓ひであることが知らるれば、そこに行者の計ひは、露ばかりも交はる餘地はない。ここに至つてこそ信心も喜ばれ、念佛も滞りなく稱へられるのである。この他力の信行相續の眞意義は、決して單に口に稱へる念佛でない、稱名を含んだ信心相續が夫であるとして、「念々不捨者」を「不行にして而も行する」と申されたのである。

五、上來力説した所は、稱名の根本的の意義を示したのであるが、之を以つて、稱名を輕んずるものと早合點してはならぬ。否、之によりて、他力廻向の稱名の偉大なること、尊重すべきことを知らしめんがためである。

非行非善の

我等の口に稱ふる念佛は、善等の努力によりて、毫末も其價值を増すものでもなければ、減するものでもない。如來廻向の信心より自と流れ来る他力の大行である。「歎異鈔」八丁に、

念佛は、行者のためには非行非善なり。わがはからひにて行するに非ざれば、非行といふ。わがはからひにてつくる善にもあらざれば、非善といふ。ひとへに他力にして自力をはなれたるゆへに、行者のためには、非行非善なりと云々

實に竹を破るやうに明快な御言葉である。然らばかやうに吾等のために非行非善の念佛ならば、吾等と全く關係のないものでないかと云ふ人もあるかも知れぬが、左様な質問を出すのが、既に念佛を自分の力でどうにかしようとする計ひに陥つてゐるのである。眞に念佛が非行非善であると自覺する所に、念佛の廣大なる獨り働きの力を感じることが出来るのである。「歎異鈔」十二丁に、

誓願の不思議によりてたもちやすく、となへやすき名號を案じだしたまひて、この名字をとなへんものを、むかへとらんと、御約束あることなれば、まづ彌陀の大悲大願の不思議にたすけられまゐらせて、生死をいづべしと信じて、念佛まをさるるも、如來の御はからひなりとおもへば、すこしもみづからはからひ、まじはらざるがゆへに、本願に相應して、眞實報土に往生するなり。

と徹頭徹尾、計ひを離れたる念佛たることを示され、更に進んで、廿九丁には、

よろづのことにつけて、往生には、かしこき思ひを具せずして、ただほればれと、彌陀の御恩の深重なること、つねに思ひだしまゐらすべし。しかれば念佛もまをさせさふらふ、これ自然なり。わが計はざるを自然とまをすなり。これすなはち他力にてまします。

と、計ひを離れたる念佛より、ふくゆかなる宗教的情操の溢れ出でて、乾燥いた胸の奥底まで濕す味をしめし



てをられる。蓮如上人は『御一代問書』六十九丁に、

聖人の御一流には、彌陀をたのむが念佛なり。

と念佛の眞意義を道破して、信心と念佛の一致を示され、更に「念稱是一」について同書三丁に、

おもひうちにあれば、いろほかにあらはるとあり。されば信をえたる體は、すなはち南無阿彌陀佛なりと  
ころろれば口もころもひとつなり。

と仰せられた。かくて、本願と名號と信心と稱名と同一味となるのである。之を『執持鈔』九丁に、

本願や名號、名號や本願、本願や行者、行者や本願

と申された。この計ひを離れた所、自力の迷心の壁を取り崩した所に、大悲の水は、とどろく滯なく我等の胸に通ひつ  
つ流れるのである。聖覺法印の『十六門記』の所謂「攝取不捨の光益は、念々稱名の徳をさづく」とあるやうに、  
計ひを離れた所に、他力大行の念佛は、如來の念々の慈心によりて自と口に浮んで下さるのである。『御一代問  
書』六十九丁に、

信の上は、たうとく思ひて申す念佛も又ふと申す念佛も、佛恩に備るなり。

又七十丁には、

或人云く、前々住上人の御時、南殿とやらんにて、人、蜂を殺し候に、思ひよらず念佛申され候。その時、  
何と申うて念佛をば申したると、仰せられ候へば、ただかはいやと存じ、ふと申候と申されければ、仰せられ  
候は、信の上は何ともあれ、念佛申すは、報謝の義と存すべし、みな佛恩になると仰せられ候。

ここにも機情を離れた念佛の絶對的價値を示されてある。尊く申うて申す念佛のみが尊いと云ふのでない。か  
やうに何かの機情に觸れて、不圖申す念佛にも、絶對的價があるよと云ふのである。ここに他力信仰の云ふべから

ざる妙趣があるのである。

六、然らば信後の稱名は、只自然に浮ぶ念佛を稱ふるだけで、機まがの策勵さくごは要らぬかと云へば、決してさうでは  
ない。

法然聖人は五正行の中に、念佛の正定業たることを決し、強く念佛一行を専修することを勧められた。『和語  
燈錄』第四に、

一念十念に往生すといへばとて、念佛を疎相に申せば、信が行を妨ぐるなり。念々不捨といへばとて、一念  
十念を不定に思へば、行が信を妨ぐるなり。故に信をば、一念に生ると取り、行をば一行に勵むべし。

更に進むで、

現世の過ぐべき様は、念佛の申されんやうに過ぐべし。念佛の妨げになりぬべくば、何なりともよるづを厭  
ひ捨ててこれを止むべし。謂く聖ひんで申されずば、妻を備けて申すべし。妻を備けて申されずば、聖ひんで申すべし。  
住所ぢゆうじよにて申されずば、流行して申すべし。流行して申されずば、家に居て申すべし。自力の衣食いしょくにて申されず  
ば、他人に助けられて申すべし。他人に助けられて申されずば、自力の衣食にて申すべし。一人して申されず  
ば同朋とともに申すべし。共行して申されずば、一人籠居こもゐて申すべし。衣食住の三つは、念佛の助業なり。  
とまで、極説せられた。

親鸞聖人も亦之を承けて、既に「正信偈」には、

唯能く常に如來の號を稱して、大悲弘誓の恩を報すべし。

と云ひ、『末燈鈔』の有阿彌陀佛坊への御返事に、  
彌陀の本願と申すは、名號をとなへんものをば、極樂へむかへんと誓はせたまひたるを、ふかく信じて稱ふ



るが、めでたきことにて候なり。信心ありとも、名號をとなへざらんは詮なく候。一向名號をとなふとも信心あさくば、往生し難く候。

と信心と稱名の意義を、明瞭に示し、『和讃』には、

信心の人におとらじと

疑心自力の行者も

如來大悲の恩を知り

稱名念佛はげむべし。

と仰せられ、『現世利益和讃』には、稱名の現世に於ける功德利益をとき、殊に晩年に京都御隠栖の後、鎌倉にて、念佛停止等の事件の起つた時、當時關東に於ける弟子同行の代表者とも云ふべき性信坊に宛られた『御消息集』四丁の文には、

詮じさふらふところは、御身にかぎらず、念佛まをさん人々は、わが御身の料はおぼしめさずとも、朝家の御ため、國民のために、念佛をまをしあはせたまひさふらはば、めでたふさふらふべし。往生を不定におぼしめさん人は、まづわが身の往生をおぼしめして、御念佛さふらふべし。わが御身の往生一定とおぼしめさん人は、佛の御恩をおぼしめさんに、御報恩のために、御念佛ころにいらてまをして、世のなか安隠なれ、佛法ひろまれとおぼしめすべしとぞ、おぼえさふらふ。

と、信仰の上から國家國民の上に、念佛の廣大なる利益の加はるべきことを表明された。他力廻向の深遠なる意義と功德を有する念佛は、ここに至つて限りなく宇内に光被するの趣きがある。

更に蓮如上人が、報謝の大行として、稱名念佛を勧められたことは、『御文』『御一代問書』に於て有名なことである。

かやうな有様であるから、昔から「信心正因、稱名報恩」といふ名目さへ出来、信決定の上は、只報謝の念佛

を稱へよと勧められるに至つたのは、尤も其の次第と云はねばならぬ。此の稱名の上に、實なる宗教的情趣が溢れ、盡きざる信仰の妙味が流れるのである。故に先哲は、言葉を盡して稱名念佛を勧められた。念佛は元より吾等の努力によりて、價値の増減を見るやうな相對的のものではないけれども、其儘に放任して省みないと云ふことは、又一種の機はかりの計はかりひに陥つてゐるものと云はねばならぬ。眞の信仰は何事も他力の御計はかりひに任せ奉る一面を有するとともに、又如來の智慧を我智慧と戴いて、煩惱を截斷する一面を有するものである。此意味に於て、先徳は大善大功徳の御名を稱へて、佛恩を報ぜよと御勧め下さるのである。稱へて功德が一身に加はると感じて、我功でない、偏ひとへに他力廻向の念佛の利益である。稱へて感謝の情も湧かず、有難くもなくとも念佛を輕んずる理由はない。其念佛は他力廻向の大善大功徳であるからである。故に念佛は吾等のために、非行非善であるから勵んで稱へることは要らぬと云ふも、自力の計はかりひであれば、又念佛は大善大功徳であるから是非稱へねばならぬ、勵んで稱へない者は、信仰のないものである、なぞと云ふも機はかりの計はかりひたるを免れぬ。これ等の末の末たる機はかりの計はかりひを離れて、我一人の本願たることを感銘する時、他力廻向の稱名は、一身に加はりて、所謂「不行にして而も行する」自然しぜん法爾はんにんの「念々不捨」の稱名となるのである。

七、然るに親鸞聖人の晩年に於て、既に關東の弟子門徒の間に、一念多念、有念無念の諍まじりひが起つたやうである。『御消息集』八丁の教忍房に宛られた聖人の御手紙の中に、此間の消息は遺憾なく表はれてをる。

ただ詮するところは、他力のやうは、行者のはからひにてはあらずさふらへば、有念にあらず、無念にあらず、とまをすことを、あしうききなして、有念無念など、まをしさふらひけるとおぼえさふらふ。彌陀の選擇本願は、行者のはからひのさふらはねばこそ、ひとへに他力とはまをすことにてさふらへ。一念こそよけれ、多念こそよけれ、なんどまをすこともゆめゆめあるべからずさふらふ。



なをなを一念のほかにあまるところの御念佛を、法界衆生に廻向すとさふらふは、釋迦彌陀如來の御恩を報じまわらせんとて、十方衆生に廻向せられさふらふらんは、さあるべくさふらへども一念三念まをして、往生せんひとを、ひがごととはさふらふべからず云々

實にや、選擇本願は有念にあらず、無念にあらず、一念にあらず、多念にあらず、唯これ不可稱不可説の信心一つである。この信心の中に、稱名の因種は自と宿つてをる。吾等は唯計ひを離れて、この願海に歸するばかりである。ここに他力廻向の稱名の妙味が頂かれる。禮拜、讚嘆等の五正行の中より、特に唱へ易い稱名の一行を選んで、信後の起行に擬して下された先哲の御心盡しも、此の謙虚の胸に於てのみ、初めて會得することが出来るのである。念佛が報謝の大行であると云ふことも、報恩の念佛といふことも、我一人のための御廻向の念佛であると云ふ謙虚の胸を以つてでなければ、頂くことは出来ぬ。誠にこの解り易いやうな所に、解り悪い宗教的興趣が潜んでゐて、人をして容易にその眞境に觸れしめないものである。我等は常に心を潜めねばならぬ。

三者廻向發願心 又廻向發願生者必須決定眞實心中廻向 願作得生想此心深信 由若金剛不爲一切異見異學別解別行人等之所動亂破壞唯是決定一心提正直進不得聞彼人語即有進退心生怯弱廻願落道即失往生之大益也 問曰若有解行不同邪雜人等來相惑亂或說種種疑難道不得往生或云汝等衆生曠劫已來及以今生身口意業於一切凡聖身上具造十惡五逆四重謗法闍提破戒破見等罪未能除盡然此等之罪繫屬三界惡道云何一生修福念佛即入彼無漏無

生之國永得證悟不退位也答曰諸佛教行數越塵沙莫識機緣隨情非一譬如世間人眼可見可信者如明能破闇空能含地能載養水能生潤火能成壞如此等事悉名待對之法即目可見見千差萬別何況佛法不思議之力豈無種種益也隨出一門者即出一煩惱門也隨入一門者即入一解脫智慧門也爲(定也用也證也)此隨緣起行各求解脫汝何以乃將非有緣之要行障惑於我然我之所愛即是我有緣之行即非汝所求汝之所愛即是我有緣之行亦非我所求是故各隨所樂而修其行者必疾得解脫也行者當知若欲學解從凡至聖乃至佛果一切無礙皆得學也若欲學行者必藉有緣之法少用功勞多得益也

【願方】 三には廻向發願心。乃至また廻向發願して生ずるものは、かならず決定して眞實心のうちに廻向したまへる願をもちゐて、得生の想をなせ。この心深信せること、金剛のごとくなるに由りて、一切の異見、異學、別解、別行の人等のために動亂破壞せられず。ただこれ決定して一心にとりて、正直にすすんで、かのひとの語をきくことをえざれ。すなはち進退の心ありて、怯弱を生じて廻願すれば道におちてすなはち往生の大益を失するなり。

問ていはく、もし解行不同の邪雜の人等ありて、きたりてあひ惑亂して、あるひは種々の疑難をときて往生を得じといひ、あるひは云はん、汝等衆生、曠劫よりこのかた、および今生の身口意業に、一切凡聖の身のうへにおいて、つぶさに十惡、五逆、四重、謗法、闍提、破戒、破見等のつみをつくりていまだ除盡することあたはず。然に此等の罪は、三界惡道に繫屬す。いかんぞ一生修福の念佛もて、即ちかの無漏無生の國にいりて、ながく不退の位を證悟することをえんや。こたへてい



はく、諸佛の教行かず塵沙にこえたり。塵沙の機縁、情にしたがひて一にあらざ。たとへば世間の人眼にみつべく信すべきがときは、明のよく闇を破し、空のよく有をふくみ、地のよく蕞養し、水のよく生潤し、火のよく成壞するがごとし。かのごとき等の事、ことごとく待對の法となづく。すなはち目にみつべし、千差萬別なり。いかにいはんや佛法不思議の力、あに種々の益なからんや。したがひて一門を出るは、すなはち一煩惱の門をいづるなり。したがひて一門に入るは、すなはち一解脱智慧の門に入るなり。これを爲て(定也、用也、彼也、作也、是也、相也)縁にしたがひて行を起して、おのおの解脱を求めよ。汝なにを以てか、いまし有縁の要行にあらざるをもて、われを障蔽する。しかるにわが所愛はすなはちこれわが有縁の行なり。すなはち汝が所求にあらず。汝が所愛は即ちこれ汝が有縁の行なり。またわが所求にあらず。このゆゑにおのおの所樂に隨ひてしかもその行を修すれば、かならず疾く解脱をうるなり。行者まさしむるべし。もし解を學ばんとおもはば凡より聖にいたるまで、乃至佛果まで、一切礙なし。みな學することをえよ。もし行を學ばんとおもはば、かならず有縁の法によれ。すこしき功勞をもちゐるに、おほく益をうればなり。

【字解】一 金剛 寶石の名、上五六七頁をみよ。

二 異見異學 淨土の法門と異つてゐる學問と見解。聖道諸教、外道、及び其他の學派を指す。

三 別解別行 淨土眞實の教と別の教。淨土の要門、眞門等の自力念佛の教をいふ。

四 十惡 十種の惡業。殺生、偷盜、邪淫(身三)、妄語、綺語、惡口、兩舌(口四)、貪欲、瞋恚、愚癡(意三)。

五 五逆 五種の逆罪。五無間業とも云ふ。殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血。

六 四重 四つの極重の罪。殺生、偷盜、邪淫、妄語は極めて重き罪の故に殊に此名の下に重ねてあぐ。

七 闍提 梵語、具にイツチュハーンチカ(Icchantika)一闍提伽、一闍底柯、一闍迦等とも音譯す。其原語の意味は、「何處までも求めて已まない」、「どこ迄も満足しない」といふので、信不具足、又は斷善根と譯してゐる。解脱の因絶え果てて、成佛の見込みなき職類をいふ。ここでは、煩惱の心のない惡凡夫をさす。

八 三界無常 三界は欲界、色界、無色界、無常に成る中の無常、煩惱、善性の三種類の事。

九 無常樂生之國 娑婆世界のこと。無常は煩惱の穢れなきこと。無上は生死の總え果てたること。極樂國土は是等の徳ある故に名づける。

一〇 塵識 有情のこと。一切衆生は皆な識を聚けてゐるから此名あり。

一一 有 質礙の意、物質のこと。

【文科】 廻向發願心中、初めに其の相を示したまふ。

【講義】 三心の中、三には廻向發願心。現て、安樂淨土へ思ひを向けて往生遂げたいと願ふものは、阿彌陀如来が、眞實心を以て、これも衆生のため、まれも衆生のためと善根功徳を悉く衆生に廻向して、淨土へ往生させたいと思召す大悲の願心を頂いて、淨土往生疑ひないといふ決定心を得るがよい。この決定心の堅いことは、恰も金剛の如く、學問や見解を異にして居る外道や聖道門の人達や、信仰、修養を異にして居る人達のために信仰を亂されたり壞はされたりするやうなことはないのである。それであるから、押し切つて一心に、願力に打ち任せ、傍目を振らず、正直に極樂淨土へと進んで、彼の異學異見別解別行の人達の語を耳に入れてはならぬ。もし信するが如く信ぜざるが如く、進んだり退いたりして、願力にとりすがることが出来ず、もちもぢして傍見をして、正しい道から傍へ落ちるやうなことがあれば、往生の大利益を失うて仕舞ふのである。

問うて曰く、もし信仰も修養も違ふ雜行雜修の人が来て、惑はしをかけ、いろいろの難問を設けて、凡夫が淨土へ往生するなどといふことはあり得ないことだぞといふであらう。その疑難の中には、かういふこともいふであらう。「御前達凡夫は、過去久遠の昔から今日まで、身口意の三業に於て、残らずすべての聖者や凡夫の身の上に十惡をしかけ、五逆を造り、四重の逆罪をなし正法を謗り、善根を斷滅し、正戒を破り、正見を捨てるな



どの大罪を欲目なく造つて来て、今では少しもその罪を除くことが出来ないで居るのである。これらの罪はどうしても三界六道の悪趣に、我身を縛りつけるものである。ほんの一生の間、福徳を積み、念佛を稱へた位でどうして、煩惱の汚れのない、死ぬる生きるとは極樂淨土に生れて、もう二度と退轉せない聖位に上ることが出来ようぞ。」かういふ疑難があるであらうが、これに對していかに答へたら善からうかと。

答へて曰く、かういふ疑難に對しては左の如く答へるがよい。「諸佛如來の教へも、その教へに示された行も數限りなく、塵沙の數よりも多いのである。衆生の機縁も亦區々であつて、その欲求に隨つて深山に分れて居る。對手の機縁が數限りなく多いから、諸佛の教行も數限りなく多いのである。今世間の人は眼に見えるものを信じ易いものであるから、至極卑近な所で譬へてみると、光明は闇を照し、虚空は物體を收め、大地はものを載せ、又草木等を養ひ、水は草木等を生長させ、又ものを潤ほし、火はものを成熟させたり、ものを滅ぼしたりするものである。これらは皆、明と闇、空と有、地は物を載せる、火は物を焼くといふやうに相手のものがあるから、待對の法と名けるのである。かういふことは、我々が現在目に見て居ること、實に千差萬別である。すべてものの作用は相手に依つて定まるので、火がものを焼くからというて、水もものを焼くとは云はれまい。すべて何事でも一概に斯く斯くだといふことの出来るものではない。世間の事すらこの通りであるとしてみると、況んや不思議中の不思議である佛法に於てはなほのことである。衆生の機縁に依つて種々異なる利益のあるは當り前のことではないか。それを汝は一概に通佛敎の疑難を以て、彌陀の本願の妙用を難するは大きな外的外れといはねばならぬ。佛敎には無量の敎門があつて、無量の教益がある。その中一つの煩惱門を出たのは、一つの煩惱門を出たので、ほかの煩惱門を出たのではない。一解脱門に入つたのは、一解脱門に入つたので、ほかの解脱門に入つたのではない。その敎門敎門の教益が別々にあるのである。それであるから、爲の字に六調ある。これに定まる、

これを用て、彼、これを作す、此、相といふ調である。自分自分の機縁に隨つて、修行をして、銘々自分自分の解脱を得るがよい。然るに御前は何故に、私に御縁のない御法を持つて来て、私を惑はさうとするのであるか、私には、私の愛樂む所のものが、私に御縁のある大切な御法であつて、それは御前が求むるものでない。又御前の愛樂む所のものは、御前に御縁ある御法で、私の求むるものではない、それであるから、銘々の好々に隨つて修行をすれば、必度、疾く解脱を得るに相違ない。」かう答へてやるがよい。「一切の行者達よ、學問をしようといふのならば、人、天、聲聞、緣覺、菩薩の五乘の學問、すべてを學ぶもよい。然しもし修行をしようといふのならば、必ず御縁のある法に依つて、修行せねばならぬ。有縁の法に依れば、力を勞することは少くして利益を得ることは莫大である。」

【餘義】一、廻向發願心に就いて、善導大師は四釋を施してゐる。第一釋は、自身の善根を往生のために廻向するので、「愚禿鈔」下十五丁には自利と標し、「化卷」八、要門の下に引用せられ、明かに自力の廻向とせられ、此處には乃至として略された。第二釋以下の三釋を此處に引用せられた。其中、第二釋は正釋で、二河白道を含みて最も長く、第三は往相廻向、第四は還相廻向である。

「廻向發願して生ずる者」といふ通常の意味から云へば、自力の信心を以て往生を願ふ者といふことであるが、今は左様ではない。廻向發願して生ずる者は、如來の廻向し給へる眞實の願心を須ゐて、往生治定の思ひをなせといふのである。如來の眞實心を須ゐると云ふことは如來の誓願を信することである。即ち本願を信じて往生治定の思ひをなすのが廻向發願心であると云ふのである。従つて之をもう少し判然云へば、本願に歸命する一念の所に、自具はる往生一定の心を廻向發願心といふ。「銘文」末、初に、

亦是發願廻向之義といふは、二尊のめしにしたがふて、安樂淨土に生まれんとねがふこころなりとのたまへ



るなり。

と仰せられて、釋迦、彌陀二尊の仰せに歸命する所に自と起る淨土往生の願ひが、廻向發願心であるとせられた。

二、斯様に我等の心に起る廻向發願心は、實に如來の至心廻向のほかはない。如來の廻向し給ふ至心が、吾等の心に入りて、淨土を戀ふる心となつたのである。「行卷」に、

發願廻向といふは、如來已に發願して、衆生の行を廻施し給ふの心なり。

とある其廻施の心が、その儘吾等の廻向發願心となつたのである。そして其如來の心が、吾等に表はれた所は深信であるから、今の文に「得生の想を作す」を受けて直ちに「此心深信すること、金剛の若くなるに由て」等と仰せられた。「愚禿鈔」下、十五丁には、

廻向發願して生ずる者に就いて信心あり。

信心とは、

得生の想を作す。此心深信すること尙し金剛の若しとなり。

と極めて明瞭に、此第三の廻向發願心を第二の深心の中に攝めて解釋せられた。故に先輩は、廻向發願心の體は深心であると云はれた。實に一念の信心を離れて往生治定の思ひのあらう筈がない。故に體とか相とかと云ふ言葉よりも、此心は信心の内容であると云うた方が適當のやうに思はれる。信仰の内容として、確乎たる往生一定の思ひ起り、その確信は、如何なる異なる思想にも動亂せられず、一心正念に進むといふのである。その異教者異信者の壓迫に對して、他力信仰者の取るべき精神的態度と、そして其の接觸の模様とを示したのが、二河白道論に至るまでの文章である。

三、吾等は、善導大師が、此廻向發願心の下に於て、金剛の信心を述べ、異教者の壓迫に對して、  
を加へられた所に、大師の動搖せる心を見ない譯にゆかぬ。即ち別解、別行の異教者の言論は、客觀的のものではなく、大師の心の上についた思想であるからである。大師はこの内心の深い動亂に對して、他力信仰の深い味ひを経験せられたのである。我聖人が此文を引用せられたのは、大師の心的經驗を、一層深く内心に味はれたからである。あの問答の上に佛法の不可思議を説き、次に「此を爲つて縁に隨つて行を起して、各々解脱を求めよ、汝、何を以てか、乃し有縁の要行に非ざるをもつて、我を障惑するや。然るに我が所愛は、即ちこれ我有縁之行なり。即ち汝が所求にあらず」等の文勢によりて烈しい精神上の苦闘を、容易に看ることが出来る。そして其波打つ精神の動搖の底に活きた信仰があるのである。

四、「此を爲て」の「爲」字に、例の如く六訓を擧げられた。上に「一門を出づるは、即ち一煩惱の門を出るなり」等の説を承け、一轉して烈しい文勢を以つて、「縁に隨つて行を起して、各々解脱を求めよ」等と別解別行の人々に對して、痛切に所信を吐露せられるのであるが、ちやうど、此「爲」字は、上を承け下を起す契合點となつてゐる。炯眼なる聖人は、此字の重要なことを看取せられて、字訓を施された。

字訓の據處は、慈恩大師の著、『法華爲々章』であると稱せらる。同書には、此「爲」一字に十二訓を施してある、平聲に、由、求、當、得、定、被、作、是、名の九訓、去聲に、以、與、助の三訓である、即ち六訓中の定、作、是の三訓は、上の九訓中にある。用は、去聲の以字の訓、彼は、平聲の被と同音、相は、「爲」の去聲に助の訓あり、「相」の去聲にも亦助の訓がある。爲も相も、助であるから、轉じて相字を爲字の訓とせられたのである。『一念多念證文』十八丁に、「直爲彌陀弘誓重」の爲字を釋して、

爲はなす(作)といふ。もちある(用)といふ。さだまる(定)といふ。かれ(彼)といふ。これ(是)と



いふ。あふ(相)といふは、かたち(相)といふころなり。

と仰せられた。「作」字、「用」字の位置が變つただけで、能く此下の註に一致してゐる。そして此註は、高田本にはなく、御草本と御眞本には、頭註にしてある。

字訓の御思召は、種々に解釋せられることであるが、大體に就いて云へば、「定」はさだめて、「用」はもちゐる。吾等の行くべき道は、此本願の一道だけであるから、定めて此法を用ゐるの意。「彼」は別解別行の人々、彼等の道は、彼等の行くに任せよの意。「作」は作業、他力の教によりて事業をなすこと。「是」は「彼」の別解別行に對して他力本願を是といふ、吾等の信じてゐる此道といふこと。「相」はあふと訓む時は、値遇又は相應の義、本願に逢ひ本願に相應する、即ち本願を信すること。又かたちと訓む時は、闇を破る光明の相、攝取不捨の相、信する相等の意である。

聖人は二文の契合點とも云ふべき「爲」字に、これだけの深い意義を有することを字訓に寄せて發揮し、そして此一段の裏に流れてゐる深い文意を暗示せられたのである。

又白一切往生人等今更爲行者說一譬喻守護信心以防外邪異見之難何者是也譬如有人欲向西行百千里忽然中路有二河一是火河在南二是水河在北二河各闊百步各深無底南北無邊正水火中間有一白道可闊四五寸許此道從東岸至西岸亦長百步其水波浪交過濕道其火焰亦來燒道水火相交常無休息此人既至空曠處更無人物多有群賊惡獸見此人單獨競來欲殺此人

怖死直走向西忽然見此大河即自念言此河南北不見邊畔中間見一白道極是狹少二岸相去雖近何由可行今日定死不疑正欲到回群賊惡獸漸來逼正欲南北避走惡獸毒虫競來向我正欲向西尋道而去復恐墮此水火二河當時惶怖不復可言即自思念我今回亦死住亦死去亦死一種不免死者我寧尋此道向前而去既有此道必應可度作此念時東岸忽聞人勸聲仁者但決定尋此道行必無死難若住即死又西岸上有入喚言汝一心正念直來我能護汝衆不畏墮於水火之難此人既聞此遣彼喚即自正當身心決定尋道直進不生疑怯退心或行一分二分東岸群賊等喚言仁者回來此道險惡不得過必死不疑我等衆無惡心相向此人雖聞喚聲亦不回顧一心直進念道而行須臾即到西岸永離諸難善友相見慶樂無已此是喻也次合喻者言東岸者即喻此娑婆之火宅也言西岸者即喻極樂寶國也言群賊惡獸詐親者即喻衆生六根六識六塵五陰四大也言無人空迥澤者即喻常隨惡友不值眞善知識也言水火二河者即喻衆生貪愛如水瞋憎如火也言中間白道四五寸者即喻衆生貪瞋煩惱中能生清淨願往生心也乃由貪瞋強故即喻如水火善心微故喻如白道又水波常濕



道者即喻愛心常起能染汚善心也又火焰常燒道者即喻瞋嫌之心能燒功德之法財也言人行道上直向西者即喻廻諸行業直向西方也言東岸聞入聲勸遣尋道直西進者即喻釋迦已滅後人不見由有教法可尋即喻之如聲也言或行一分二分群賊等喚回者即喻別解別行惡見人等妄說見解迭相惑亂及自造罪退失也言西岸上有人喚者即喻彌陀願意也言須臾到西岸善友相見喜者即喻衆生久沈生死曠劫輪回迷倒自纏無由解脫仰蒙釋迦發遣指向西方又籍彌陀悲心招喚今信順二尊之意不願水火二河念念無遺乘彼願力之道捨命已後得生彼國與佛相見慶喜何極也又一切行者行住坐臥三業所修無間晝夜時節常作此解常作此想故名廻向發願心

【西方】 また一切の往生人等にまをさく、いま更らに行者のために、一の譬喩をときて、信心を守護して、もて外邪異見の難をふせがん。何者かこれや。たとへば人ありて西にむかひて行かんと思ふに、百千の里ならん。忽然として中路に二の河あり。一にはこれ火の河は南にあり。二には水の河は北にあり。二河のおのひろさ百歩、おのおの深くして底なし。南北に邊なし。まさしく水火の中間に一の白道あり。闊四五寸ばかりなるべし。この道、東の岸より西の岸に至るに、亦ながさ百歩その水の波浪まじはりすぎて道をうるはず。その火焰また來りて道をやく。水火あひ交りて常にして休息することなけん。この人すでに空曠のはるかなるところにいたるに、さらに人物なし。おほく群賊惡獸ありて、この人の單獨なるをみて、驚

ひかりてこの人を殺さんとす。怖れを懐きて走りて西にむかひに、忽然としてこの大流をみて、すなはち自ら念言すらく、この河南北に邊畔をみず、中間に一つの白道をみる、きはめてこれ狭少なり。二岸あひ去ること近しといへども、何に由りてか行くべき、今日さだめて死せんことうたがはず。まさしく到り回らんと欲せば、群賊惡獸、漸々にきたり逼む。まさしく南北に邊りはしらんとすれば、惡獸毒蟲きそひ來りて我に向ふ。まさしく西にむかひて道をたづねて、去んとすれば、また恐くはこの水火の二河に墮せんことを。時に當つて惶怖することまた言ふべからず。すなはち自ら思念すらく、われ今回るともまた死せん、住すともまた死せん、去くともまた死せん。一種として死を免れざれば、われ寧ろこの道を尋て、前に向ひて去かん。すでにこの道あり、かならず度すべしと。この念を作すとき、東の岸に忽ちに人の勸る聲をきく。仁者ただ決定してこの道をたづねて行け、かならず死の難なけん、もし住せばかならず死せん。また西の岸の上に人ありて喚うていはく、なんぞ一心に正念にして直に來れ、われよく汝を護らん、すべて水火の難に墮せんことを畏れざれと。この人既にここに遣し、かしこに喚ふをききて、すなはち自らまさしく身心にあたりて決定して道を尋て、直にすすんで疑怯退心を生ぜず。あるひはゆくこと一分二分するに、東の岸の群賊等喚うていはく、仁者かへり來れ。このみち險惡なり。過ることを得じ。かならず死せんこと疑す。われらすべて惡心ありて相向ふことなしと。この人よばふ聲を聞くといへども、また回顧せず。一心に直にすすんで道を念じて去けば、須臾にすなはち西のきしにいたりて、ながくもろもろの難をはなれ、善友あひみて慶樂すること已むことなからんがごとし。此はこれ喩なり。次にたとへを合せば、東の岸と云ふは、すなはちこの娑婆の火宅にたとふ。西の岸といふは、すなはち極樂寶國にたとふ。群賊惡獸いづはり親しむといふは、すなはち衆生の六根、六識、六塵、五陰、四大にたとふ。人なき空道の澤といふは、すなはちつねに惡友にしたがひて、眞の善知識にあはざるにたとふ。水火の二河といふは、すなはち衆生の貪愛は水のごとく、瞋憎は火のごとすとたとふ。中間の白道四五寸といふは、すなはち衆生の貪瞋煩惱のなかに、よく清淨願往生の心を生ぜしむるにたとふ。いまし貪瞋強きによるがゆゑに、すなはち水火のごとくとたとふ。善心微なるがゆゑに、白道のごとくとたとふ。また水波つねに道をうるはずといふは、すなはち愛



心つねにおこりて、よく善心を染汚するにたとふ。また火焔つねに道をやくといふは、すなはち眞縁の心よく功德の法財を焼くにたとふ。ひと道のうへを行きて、ただちに西に向ふといふは、すなはちもるもの行業を廻してただちに西方にむかふにたとふ。東の岸に人のこゑ勧め遣すをききて、道をたづねてただちに西にすすむといふは、すなはち釋迦すてに滅したまうて、後の人見たてまつらざれども、なほ教法ありてたづねべきにたとふ。即ちこれを聲の如しとたとふるなり。あるひはゆくこと一分二分するに、群賊等よばひ同へすといふは、すなはち別解、別行、悪見の人等みだりに見解を説て、たがひにあひ惑亂し、および自ら罪を造りて退失するにたとふ。西の岸の上に人ありて喚ふといふは、すなはち彌陀の願意にたとふ。須臾に西の岸にいたりて、善友あひみて喜ぶといふは、即ち衆生ひさしく生死にしづんで、曠劫より輪廻し迷倒して、自ら纏うて解脱するによしなし。あふいて釋迦發遣して、指へて西方に向はしめたまふことを蒙り、又彌陀の悲心招喚したまふによりて、いま二尊のところに信順して水火の二河をかへみりず、念々に遺ることなく、かの願力の道に乗じて、命を捨ててのち、かの國に生ずることをえて、佛とあひみて慶喜すること何ぞ極まらんといふに喩ふるなり。また一切の行者、行住坐臥に三業の所修、晝夜時節を問ふことなく、つねにこの解をなし、つねにこの想をなす。かるがゆゑに廻向發願心となづく。

【字解】 一 六根 六識の所依となりて、對境を認めしむるもの。眼根、耳根、鼻根、舌根、身根、意根。

二 六識 色聲香味觸法の六境を知覺する六種の心識。眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識。

三 六塵 六境のこと。色、聲、香、味、觸、法の六境は、心を穢し惑はす故に六塵といふ。

四 五陰 色、受、想、行、識の五蘊の舊譯。善法を陰蓋ふ故にこの名あり。

五 四大 一切の事物を構成してある四種の成分、或は寧ろ勢力。地大（堅礙を性とし、物を持つ用あり。すべての堅性は皆なこれに屬す）。水大（濕潤を性とし、物を收攝する用を有す。すべての濕性は皆これに屬す）。火大（煖熱を性とし、物を成熟する用を有す。すべての温性はこれに屬す）。風大（動轉を性とし、物を長養する用を有す。すべての活動性はこれに屬す）。

六 圓覺之心 圓覺之心。三摩耶の二。

【文科】 廻向發願心の中なる信心守護の體を引きたまふ。

【講義】 扱て今茲に淨土往生を願ふすべての人々に白す。私は今、念佛の行者のために、特に一の譬喩を設けて、他力の信心を守護り、外人の偏見や、異見に迷惑されないうやうにしようと思ふ。どういふ譬喩かといふと、譬へば、茲に一人の人があつて西の方百千里もある遠い處に旅をしたとする。其の道の半に、思ひも設けず、二つの河があつた。一つは火の河であつて、南の方にあり、他の一つは水の河であつて、北の方にある。この二つの河は共に闊さ百歩許りであるが、深さは底の知れぬ程深く、南北に遠く連つて邊はない。この水火の二河の眞中に、一つの白い、闊さ四五寸許りの道があつて、東の岸から西の岸へ至つて居る。河の闊さと同じく、長さは百歩許りである。この狭い道を、北からは浪が打ち寄せて濕し、南の方からは、炎が燃えあがつ、焼く一行く。浪と焰が交る交る道を侵して、少しも休む暇はない。この旅人は、千里の曠野ともいふべき、はてしのない野原へ來た。前後左右に人の子一人居らない。淋しい恐ろしい思ひに襲はれて居る時、多くの強盜や、たけしい獸共が、この旅人の友も連れもなく、たつた一人でとぼとぼと道を連つて行くのを見て、旅人を殺さうとして進んで來る。旅人は恐れを抱いて急に走つて、はたと、この大河に突き當り、自ら思ふやう、ああこの河は、南の方を見ても、北の方を見ても涯しがない。眞中に一本の白道がある許り、それも極めて狭い。こちらからあちらの岸までいくらもないけれども、これでは到底行くことがならぬ。俺は間違なく今日は死んで仕舞ふであらう。道を轉じて歸らうとすれば、強盜や獸共が、だんだん近づき迫つて來る。南か北に逃げようとするれば、恐ろしい獸や、毒蟲が向つて來る。眞一文字に西に走らうとすれば、恐らく、この火の河、水の河に墮ち込むであらうと。旅人は怖れ戦いて殆んど語に述ぶることも出來ぬ。やがて自ら思ふやう、我が運命は既に定まつた。歸つても死ぬ、ちつと



して居つても死ぬ、進んでも死ぬ。死ぬことは一つである。かうなつて見れば、一層のこと、この白道を踏んで前へ進んでみよう。狭いとはいへ、既にこの道がある以上は、必ず渡ることが出来るであらう。かう思ひ直して居る時に、東の岸に、いづこからともなく、突然人の聲がし出した。「御前、心を決めて、その道を尋ねて行け必ず死ぬことはない。もし、ちつとしておれば死ぬばかりである。」この聲が聞え出すと共に、西の岸にも又、人の聲が聞える。「御前、一心正念になつて、その道を正直に來い。俺が御前を護つてやるから。決して水火の二河に墮ちようかと恐るるな」と。旅人は、計らずも、かく、こちらの岸からは「行けよ」と勧められ、向ふの岸からは「來いよ、護る」と導かれ、茲に心を決め、身心共に正直に西に向ひ、白道を踏んで、前進して、少しも疑ひ恐るる思ひなく、又あとへ退く心もない。やがて、一步二歩踏み出した時、東の方の岸に居る強盜共が、呼んでいふやうには、「もしもし、あなた、歸つて御出でなさい。そんな嶮難な道をどうして行かれませう。墮ちて生命をなくすることは知れ切つて居ります。私共は決して悪い心でかういふのではありません」と。旅人は、この強盜共の馴れ馴れしい語をきいても、振り返らうとせず、一心に前へ進んで行つたが、たちまち、西の岸に到りつくことが出来て、永く東岸の災難を逃れ、且つ又、計らずも、數多の善友に遇うて、限りなく喜び楽しむことが出来たのである。

以上は喩であるが、これを今、人生上の實際に當てはめて見ると、東の岸といふたのは、この三界無安の娑婆の火宅に喩へたのである。西の岸といふたのは極樂淨土に喩へたのである。群賊惡獸が外面だけ馴れ馴れしうに親しんで來るといふのは、私共の身體の内の六根、六識、六塵、五陰、四大に喩へていふので、私共の一番可愛がるものが、却つて私共を破壊する原因となることをいふのである。人の子一人のない淋しい澤というたのは、私共の周圍には惡友計り多く集まつて、眞に私共の心を知つて、私共を導いて下さる善知識のないことを喩へた

のである。水火の二河を擧げたのは、私共の貪り愛する心は恰も水の如く、瞋り腹立つ心は火の如しというたのである。この二河の間の白道四五寸というたのは、私共の貪愛瞋憎の煩惱の群がり起る間に、微かながらも淨土へ生れさせて頂きたいといふ清淨な願往生の精神の宿つてゐることを喩へたのである。貪欲瞋恚の煩惱は至つて強いから水火の如しと喩へ、善心はあれどもなきが如く微かなものであるから、細々とした四五寸の白道と喩へたのである。水の浪が打ち寄せては白道を濕すといふは、貪愛の心がむらむらと起つて來ると微かな善心は悉く汚がされて仕舞ふことをいふのである。火焰が上つて來て道を焼くといふのは、瞋恚の煩惱に目が眩んでくると、功德善根の法の寶が滅びて仕舞ふことをいふのである。旅人が、白道を踏んで正直に西に進むといふのは、我が身の善根功德を廻向して淨土の往生を願ふことである。東の岸に行けよ、といふ人の勧める聲が聞えて、其處で白道を踏んで西へ行くといふのは、釋迦如來涅槃の雲に隠れましましてからは、今の人達は世尊を見奉ることは出来ないけれども、なほ残して下された教法が傳つてあるから、それに依つて修行することが出来るので、聲が聞えると喩へたのである。一步二歩進み出ると、強盜共が呼び返すといふたのは、信仰や修養を異にし偏見を持つて居る人達が妄りに自説を吐いて、人を惑はし、自ら罪を造つて、正道を退失するに喩へたのである。西の岸に人あつて、呼んで下されるといふは、彌陀の大悲の願心に喩へたのである。たちまち、西の岸について、計らず善友打ち集うて喜ぶというたのは、私共衆生が、今まで久しい間、生死の海に沈んで、久遠の昔から六道を輪廻し、迷ひに迷ひを重ねて、自分の煩惱で自分を縛つて、解脱を開く時のなかつたのが、釋迦如來は西方淨土へ行けよ、と御すすめ下され、阿彌陀如來は、大悲心を以て來いよ、と呼んで下される。その發遣招喚の聲に呼び醒まされて、釋迦彌陀二尊の御思召に順ひ、自分の心の貪瞋の煩惱には目を呉れず、念々願往生の心を相續して願力に乗託し、命終の後に極樂に往生して、初めて親しく如來に見えて、大慶喜をするに喩へたのである。



る。あらゆる淨土往生の行人よ、行住坐臥、身には禮拜し、口には念佛を稱へ、意には如來を憶ひ奉り、晝に依らず、夜に依らず、いつでも、願力の不思議で往生させて頂くことを喜び、必ず、往生に間違ないと決定するを廻向發願心といふのである。

【餘義】一、二河喻又は信心守護の喻とも云はる。善導大師の信仰上の實驗を披瀝せられた靈感の文字である。そして又親鸞聖人の信仰經驗の告白である。吾等は思ひを潜めて、色味はねばならぬ。

鎮西にては、文章の位置によりて、平淡に此喻を廻向發願心の喻とした。我等が淨土往生の願心を發すに就いてこれだけの心的状態があると見るのである。つぎに西山には、専ら一文の意義の方面を主として、三心の總喻とした。そは此譬喻が三心の何れにも行き通うてをるからである。然るに我聖人は、深く此喻を御自身の信仰の上に味はれて、三心を一にした第二の深信の喻とせられた。鎮西のやうに第三の廻向發願心のみ狭く取らず、西山のやうに解釋的に三心の各に通ずるといふ中心のない説に陥らず、此三心の中樞たる深信の内容を打ち出したものとせられた。即ち本文には、既に「一の譬喻を説いて、信心を守護し」云々とある。聖人はここに着眼せられて、『愚禿鈔』下十八丁には其文を其體引用せられ、『和讃』には、

善導大師證をこひ  
定散二心をひるがへし  
貪瞋二河の譬喻をとき  
弘願の信心守護せしむ。

と仰せられた、即ちこの譬喻は信心の譬喻である。信仰の徑路と、信仰の内容とを具體的に表現したのである。故に單なる譬喻でない。信仰そのものの具體化である。善導、親鸞二祖の魂である。

二、されど此譬喻に表はれた精神上の實驗は、眞面目に道に進む人々の常に經驗する所である。この意味に於て、經論の上に此譬喻の據處を求むることも亦、興味ある問題である。

『涅槃經』(南本第廿一)にもこれに類した譬喻があるが、夫よりも『增一阿含經』第二十三には、釋尊、祇園精舍に於て、諸弟子に對して説かれた所は、一層適切である。今その梗概を記せば、人あり、四大毒蛇を恐れて奔ると、更に白刃をもてる五人に追ひかけられ、其上亦六人の怨家に迫られて逃げ去ると、大水滿々と湛へて、深く廣く、到底渡ることは出来ない。此人は遂に筏を作つて、彼岸に渡つた。釋尊は更にこの譬を解釋して仰せられるには、四毒蛇は四大、刃を持てる五人は五蘊、六人の怨家は眼耳等の六處、水は欲貪等の四流、筏は八正道、此岸は魔境、彼岸は如來の國である。

此教説によりて、吾等は釋尊の修道上の實驗を知ることが出来る。釋尊は實に此譬の主人公であつた。釋尊は四大五蘊等の肉欲の怨家を恐れ、此の魔境を逃れんと苦ませられ、遂に八正道の船に乗じて涅槃の岸に赴かれたのである。吾等は此點に於いて、遠い釋尊と親しく内心に感應するやうに感ぜられる。

更に七祖の上に眼を轉ずれば、道綽禪師である。禪師は、其著『安樂集』上二十七丁に、

譬へば人ありて、空曠の迫る處に於て、怨賊刀を抜き、勇を奮ひて直ちに來りて、殺さんと欲するに値遇ひ、此人徑に奔りて視るに、一河を度せん。未だ河に到らざるに即ち此念を作さん。我、河岸に至らば、衣を脱ぎて渡るとせんや、衣を著けて浮むとせんや。若し衣を脱ぎて渡らんには、唯暇なきを恐る。若し衣を著けて浮ばんには、復、首領全くし難きを畏る。爾時、但一心に河を渡る方便を作すありて、餘の心想、間雜することなきが如し。行者も亦爾り。阿彌陀佛を念する時に、亦彼人の渡ることを念うて、念々相つぎ、餘の心相、間雜することなきが如くせよ。

善導大師の直接の師たる禪師も、既に此切つばつまつた精神の苦味を嘗められた一人であつた。

以上の二つの場合も、初めて人生の眞相に觸れて、自分といふ者の立場を根本的に失うた人々の、深い恐怖と



戰慄とを表はしてゐるけれども、尙ほその時の錯雜つた心持と、そして其動搖の極に達した所に、大悲の喚聲に蘇返るといふ細な信仰の内容を打ち出してはをらぬ。然るに善導大師は、其複雑な、切つばまつた信仰経験を、熱のある暢達た筆で圓に表はして下された。

三、先聲の多くは、此喩を、大體上、自力の心を捨てて他力の信心に入ることとを教へたものであるというてをられる。云はば入信の徑路を示したものと見るのである。この見解に立つて見ると、文章の各所に、際立ちて此消息を示してあることが知られる。先づ喩の方で云へば、その主人公が水火二河に當面した時、決死の覺悟をなし、「我寧ろ此道を尋ねて、前に向うて去かむ」と云ふまでは、自力の決心である。この自力の決心をなす時に、東西岸の勸むる聲を聞き、初めて他力の本願を信ずるといふ工合に、自力から直ぐに他力に入つてゐるが、之を合法の下に見る時は、あの自力の決心から、直に純他力に入らず、要門自力の天地を迂回してゐる。即ち「能生清淨願往生心」の次下「乃由貪瞋強二故、即喩如火水善心微故、喩如白道」以下は、定散自力の機を明したものである。「諸の行業を廻して、直に西に向ふ」といふ「廻する」とは、自分の善根を廻向して、往生の行業とすることである。かやうな自力の根性をもつてゐるから、其下に示すやうに群賊等のために惑亂せらるるのである。喩の時は、釋迦彌陀二尊は一致してあるが、此處では、東岸の釋尊の教へは、彌陀の招喚と離れて、唯自力の善根を以つて淨土を願へと云ふやうになつてゐる。其次に「西岸の上に人ありて喚ふと云ふは、彌陀の願意に喩ふるなり」以下は、正しく二尊一致の趣きがある。この移り行きを釋ねれば、明かに入信の歷程を知ることが出来る。喩の方では、自力の無功を自覺した人が、直ちに二尊の發遣招喚を聞いて、群賊の喚聲を顧みず、念に本願の一道をゆくことを示してあるが、合法の下には、行くこと一分二分にして、群賊惡獸に惑亂せられ、自ら罪を造つて退失することを述べてある。この點をよくよく考へねばならぬ。一見煩瑣のやうであるが、こ

に信仰の徑路の上に、深い味があるのである。即ち自力無功を自覺した人の多くは、直ちに純他力に歸入することが出来ず、所謂淨土の要門の機類となり、定散の小善根に執着するのである。聖人は此點を「愚禿鈔」下廿丁に白道四五寸と言ふは、

白道とは、白の言は黒に對し、道の言は路に對す。白とはすなはちこれ六度萬行、定散なり。斯れ則ち自小善の路なり。

と釋して、此白道の文字の裏になつてゐる萬行諸善の小路を指摘し、更に「同鈔」に、群賊を解釋して、

群賊とは、別解、別行、異見、異執、惡見、邪心、定散、自力の心也。

と仰せられて、本願の一道に進むことを妨げる群賊は、吾等の自力の心であるとせられた。我聖人の此解釋によりて、吾等は非常に複雑な、そして執拗な心性を自覺し、同時に他力本願の廣大なることに驚かざるを得ないのである。

吾等の心は、どこ迄も自力我慢の心である。一度は痛切に人生の最後に衝き當りて、自力無功を感じ、本願に歸入したというても、稍ともすれば夫が定散自力に陥つてゐることが往々あるのである。諸善萬行の機とか機出自力の機といふことは、他人を規定する範疇ではなくして、夫は吾等自身の自性であることに驚かねばならぬ。人生の欲樂や、榮華を夢みてゐるのも自力を恃んでゐるのであるが、宗教の天地へ入つても、容易に此の自力は捨てられぬ。それが即ち定散自力の心である。そして此の自力の心が眞實の本願を聞くのである。ここに横超他力の信仰が生れるのである。

四、合法段の下に、「白道四五寸と言ふは、即ち衆生の貪瞋煩惱の中に、能く清淨願往生心を生ぜしむるに喩るなり」とは、意味の深い言葉である。従つて又誤解し易い言葉である。願往生心は第十八願文の上では、三信



の中の欲生心に當り、成就文では、願生彼國に當る。古來、願生歸命を主張する人々は、この文を有力なる根據にして、三信の中、欲生心を以つて佛に向ひ奉ると説いた。彼等は唯文字に拘泥して、自力の願生心を骨張したのである。然るに、親鸞聖人が、本願の三信を第二の信樂に合して、唯信心一つであると申されたのは、自力の行きつまつた最後、計ひの離れた最後に、湧いてくる信順の心を申されたのである。これが即ち他力廻向の信心である。蓮如上人の「雜行捨てて彌陀を頼め」といふことも、決して單なる願生歸命を勧められたのでない。雜業雜修自力の心をふりすてて彌陀を一心に頼めと仰せられたので、夫は取りも直さず如來の仰せを二心なく信ずることである。このことは、蓮師が『御文』の到る處に仰せられることである。親鸞聖人は『愚禿鈔』下二十丁に、

能生清淨願往生心と言ふは、

無上信心金真心を發起する也。斯如來廻向之信樂也。

と極めて明瞭に仰せられた。然らば何故に此下に信樂と云はずして、願往生心と云はれたかと云ふに就いては、種々の説がある。

(一)には、善導大師は常に自力聖道の修行に對して、淨土往生を弘められた人であるから、此土の證りに對して、彼土の往生を説かれた。之がために態と信心を裏に含めて、願往生心を擧げられた。即ち斯様にせなければ主張の旗幟も闡明とならず、又説くことに力が入らなかつたのである。

(二)には、此譬喩の出る處は、第三廻向發願心の下であるから、態と信心の代りに、此願往生心を出されたと云ふ。

二説とも筋の通つた説である。併しながら願往生心は、信仰の活躍した状態である。貪瞋煩惱の心の奥底から、自己全體を振り起して、統一なる要求だけとなつた所である。即ち如來廻向の信心が、吾等の心に喰ひ込んで、

自と精神面に活躍した所である。故に信仰が燃える時には、自と此文字が選ばれるのである。大師が特に願往生心をこの處に出されたのは、單に對他的の意味だけでなしに、云はば信の根から咲いた花とも云ふべき此心を感じられたためであると思ふ。されど花は時に従つて開落するが、根はいつ迄も變らぬ。吾等は燃えいでた花の根本に眼を注がねばならぬ。我聖人が御自身の實驗上から、大師の賜に入つて、願往生心は如來廻向の信樂なりと喝破せられた所に、千鈞の重さがある。

更に聖人は『愚禿鈔』下二十丁に、

白道四五寸と言ふは、

白道とは、白の言は黒に對す。道の言は路に對す。

四五寸とは、四の言は四大の毒蛇に譬ふる也。五の言は、五陰の惡獸に譬ふる也。

と仰せられ、又、下の白道釋には、「白は選擇攝取の白業、道は本願一實の大道」であると仰せられた。この釋によれば、白道は如來の本願、四五寸は四大五陰の毒蛇惡獸である。大師が貪瞋二河の煩惱の中から白道の願往生心を生ずると云はれたのを、もつと適切に、四五寸といふ白道の廣さを四大五陰とせられたのである。大師の場合には、煩惱の二河の中に四五寸の白道だけ光を放つてをるやうに見ゆるけれども、聖人は、その白道の裏に四大五陰の毒蛇惡獸を認められた。信仰といふものは、純一清淨の佛心でない、佛心が汚い凡心に入つて下された心的状態を指すのである。それが所謂白道四五寸である。特に四五寸と云はれたのは吾等の猛烈なる動物的本能や感官の本である所の四大五蘊を象徴したと見られた所に、深い宗教的實驗の妙味が潜んでゐる。信仰は何處に起るか。貪瞋煩惱の中に起る。もつと手近く云へば、肉體の要求に支配せられてゐるこの現實の自分といふ全體の上に起るのである。これに佛凡一體といふ名目を附したのであらうと思ふ。之に就いて、『六要鈔』の白



道釋の下に、存覺上人は、信心はその體清淨にして、其性は眞實である、然るに白道の分量たる四五寸を四大五蘊の毒蛇惡獸に喩へたのは矛盾してゐるでないか、といふ疑問を掲げ、其答として、信心は聖人の常に歎ぜられるやうに、廣大無礙の徳海であるが、其信心を發す凡身は、道を妨げる四大五蘊から出來てをり、その内は煩惱に覆はれて小さくなつてゐるから、斯様に仰せられたのであるまいか、と云うてをられる。味はうべき説であると思ふ。

五、上の觀察から、此譬の上に自と別種の方面があるやうに思はれて來る。夫は上にも問題となつた法段の下である。これまで申した所では、あの「乃し貪瞋強きに由るが故に即ち水火の如しと喩ふ」より「迷に相惑亂し、及び自ら罪を造つて退失する也」までを、純他力に入るまでの一階梯たる要門自力の分齊と見たのであるが、此一段は亦所謂信後の状態を述べたのではないかと云ふのである。これまでの所では、信の一念といふ所を打ち止めにして、信仰の徑路を跡づけたのであるが、氣が付いて見ると、此の要門自力の分齊が、其儘信仰状態を表はしたやうに思はれるのである。

そこに「善心」又は「功德の法財」とあるのは、我胸中に與へられた佛心即ち信心であるとすれば、初の一段は、「正信偈」に所謂「貪愛瞋憎の雲霧、常に眞實信心の天を覆へり」を述べられたもので、吾等の信仰は、いつも晴々した法悦に咽んではをらず、常に煩惱に心を覆はれてゐることを示されたものとなる。そして「或は行くこと一分二分するに」以下の群賊に惑亂せらるる所は、この煩惱生活を、際どく示されたものであるまいか。

『愚禿鈔』には、

或は行くこと一分二分すと言ふは、  
年歳時節に喩ふる也。

愚見人等と言ふは、  
憍慢懈怠邪見疑心之人也。

と云うてある。そして前に述べたやうに、「白道四五寸」の四五寸は四大五陰の毒蛇惡獸であると云はれたことを總合して、實際の味ひから考へて見ると、この要門自力の一段が、そのまま善導大師の信仰生活を語つてゐるやうに思はれる。特に「行くこと一分二分」を「年歳時節」とせられた所にも、信相續を暗示してあるやうである。少くとも我聖人は斯様にも味うてをられたやうに思はれる。

或人が、二河白道の圖を携へて、師に見せると、師の僧の云はれるには、「此白道はあまりはつきりしてゐる」と云うて、直ちに筆を取りて、白道に墨を塗り、「私の信心はこの通りである」と云はれたと云ふ話を聞いたことがある。話の細な所は、忘れたが、大體の筋は斯様であつたやうに記憶してゐる。此人は眞に二河白道を實際に味うた人であると思ふ。

此譬は、入信の徑路を示すとともに、又信心守護の喩といふ名の示す通りに、信仰そのものの表現であらねばならぬ。吾等は一面入信の徑路として味ふとともに、亦善導大師の信仰生活そのものと見ない譯にゆかぬ。この意味に於て、二河白道の譬喩は、念々に於ける信仰の事實である。我等は常に驚き恐れて、自己の立場から叩き落ち、そして現前の事實たる水火の白道上にあることを自覺するのである。此時、常に新に如來招喚の御聲を聞く。夫を信心と云ふのである。若し此説に反して、此譬を入信までの徑路だけとするならば、其人はもう此譬とは遠く離れてゐる人でなからうか。信仰は常に現前の一念である。此光景を開展したのが二河白道である。

六、ジョン、パンヤンは、其著『天路歷程』に於て、自己の傷しい信仰経験を小説體に披瀝し、詩聖ダンテは亦『神曲』に於て、自身の深い信仰経験を記載してある。前者は幾度も獄に投ぜられて、日毎に十數回の信



仰の動亂を感じたといふ眞摯な熱烈な靈界の勇者である。後者は亦終生、傷しい漂浪の生活を送りて、身も心も冷くなるまで、人生の孤獨と憂愁と悲憤を嘗めた人であるが、唯、幼時戀人に與へられた清らかな温い印象によりて、靈の天地に入ることを得た。かくて兩人は一生を賭して獲たる唯一の信仰経験を、各自獨特の能力によりて發表したのである。「天路歷程」の主人公が、やがて来るべき都市の破滅に戦いて、妻子を捨てて家を出で、罪の重荷を負うて坂を登り、虚榮の市に迷ひ、死の谷に恐れ、疑城に鎖された心持ちは、ひしひしと内心に感銘する。更に「神曲」に於ける主人公が、初めに悲痛極みなき地獄を巡りて、到る處に感傷の賜を絞り、つぎに煉獄に上りて、苦行の困難を感じ、遂に天國に進む有様は、他事と思はれぬ親しさが感ぜられる。これ皆な作者の實感の記載であるからである。

善導大師の二河白道は、簡單な點に於て、詩趣を缺ける點に於て、上の二つに較べることは出来ないけれども、大師の痛烈なる修道の光景、即ち心身を苦勵して、念々に如來に對ひ奉らんとする精進力は、上の二つに超勝れてゐると思ふ。初めに生死の問題に觸れて、漚しない三界のただ中に、獨り孑然として立つてゐる恐怖と寂寞を痛感し、同時に洗へども洗へども清め難い内心の欲情、限りなく動亂して、瞬時も定まらぬ心、更に此心を懷いて暫しも離れない肉體の淺ましい執着、此の現前の自己に驚かれた深い心持ちは、群賊惡獸、水火二河等の象徴によりて心ゆくばかりに表出せられてある。更に是等の煩惱とともに、精神界の王者とも云ふべき邪見我慢の念は、常に確信や正しい見解を惑亂し、強迫する有様も痛切に表はれてゐる。而もこの動亂せる心奥より、電光のやうに閃く靈光は、これ等の煩惱を照破して、不可思議の力と喜びを感じる。これ即ち如來の喚聲を聞いた時である。親鸞聖人は、「愚禿鈔」下廿丁に、あの西岸上の喚聲をかやうに味はれた。

西岸上に人ありて喚で言くとは、阿彌陀如來の誓願也。汝の言は行者也、乃一心の言は眞實の信心也。

私の言は、盡十方無礙光如來也。不可思議光佛也。乃護の言は阿彌陀佛果成之正意をあらはす也。亦攝取不捨を形はすの貌也。乃五 仰で釋迦發遣して、指て西方に向はしめ給へるを蒙るとは順也。又彌陀の悲心招喚し給ふに籍るとは信也。今二尊の意に信順して、水火の二河を顧みず、念々に遣るることなく、彼願力の道に乗ぜよとなり。

我聖人も亦、心ゆくばかり此二河喻を味はれた。そして御自身の實驗上より、深刻な解釋を施して、大師の眞意を發揚せられた。かやうにして大師の此譬喻は活きた力となつて、斯道に進む人々の心より心を貫いて極まる所を知らぬであらう。

又言<sup>レ</sup>廻向<sup>ノ</sup>者生<sup>レ</sup>彼國<sup>ニ</sup>已<sup>ラ</sup>還起<sup>レ</sup>大悲<sup>ノ</sup>廻<sup>ニ</sup>入<sup>レ</sup>生死<sup>ノ</sup>教化<sup>ノ</sup>衆生<sup>ニ</sup>亦名<sup>ス</sup>廻向<sup>也</sup>也三心<sup>既</sup>具<sup>無</sup>行<sup>不</sup>成<sup>願</sup>行<sup>既</sup>成<sup>若</sup>不<sup>生</sup>者<sup>無</sup>有<sup>是</sup>處<sup>也</sup>又此<sup>三</sup>心<sup>亦</sup>通<sup>攝</sup>定善<sup>之</sup>義<sup>可</sup>知<sup>上</sup>

【讀方】 また廻向といふは、かの國に生じをはりて、かへりて大悲をおこして、生死に廻入して、衆生を教化するをまた廻向となづくるなり。三心すでに具すれば行として成ぜざることなし。願行すでに成じて、もし生ぜずば是處あることなし。またこの三心また定善の義を通攝すとするべし。已上

【文科】 廻向發願心の中、還相廻向の結文をあげたまへる一段。

【講義】 上來屢々廻向といふことを説いたが、これまで説き來つた廻向は往相の廻向といふものである。往相の廻向のほかに、彼の淨土へ生れた後に大悲心を起して、再びこの生死の藪、煩惱の林の中へ歸つて來て、思ふがままに衆生を教化するといふ廻向もある。これが所謂還相の廻向である。

扱て、上の如き他力の三心を具足して頂けば、名號は自ら稱へられる。更に進んでいへば、信心の體は南無



阿彌陀佛であるから、稱へぬ先に、早や大行は具はつて居るのである。それでかくの如く、三心の願と、南無阿彌陀佛の大行と願行がちゃんとそろうたのであるから、これで淨土へ往生出来ないといふ道理はないのである。この三心は『觀無量壽經』の九品段の初めに説いてあつて、散善九品の機類は、みなこの三心を以て淨土に往生するのであることは、申すまでもないが、獨り散善の機類ばかりでなく、定善十三觀の機類も、同様に、この三心を具足しなければ、往生は出来ないのである。それでこの三心は散善九品の所に説いてはあるが、實に、定善の機までも攝めるのである。このことはよく知らねばならぬ。

【餘義】 一、此結文に就いて、例の如く我聖人は、西山、鎮西と所見を異にしてをられる。

鎮西の説によれば、「無行不成」の「行」は、定善散善等の諸行を指す。従つてこの文意は、上に挙げた三心を具へれば、諸善萬行は皆な往生の行となるといふのである。裏から云へば、諸善萬行はこの三心がなければ往生の行とはならぬと云ふ意味である。西山の説に依れば、「行」とは所歸の佛體、三心は行者が起す所の歸佛の一心を指す。従つてこの文意は、佛體に於て往生の行は成就してあるから、吾等は唯歸佛の一心を起せば足る、この心を具へる時に往生の行は備はるといふのである。

然るに我聖人は、『觀經』の此三心に就いて、隱顯二種の見解を有してをられる。顯の義から云へば、鎮西の解釋と等しく、三心を具すれば、諸善萬行は悉く往生の行となると云ふのである、されど此は不徹底の説たるを免れぬ。そは上の如き三心は到底吾等の力で具へることが出来ぬからである。若し具へることが出来るならば、不完全な諸善萬行も往生の行となることは云ふまでもないことである。されどこの「定散諸機各別の自力の三心」は、到底完全に成就することは出来ない。之を具へようとするは迷ひのしぐさである。かくて聖人は『觀經』に對する皮相の見解を破りて、隱顯を立てられた。其説によれば、三心とは、他力廻向の信心、行と云ふは本願の

勤雲の心三

西・西國  
觀の山  
「成不行無」  
ていつに行の

大行である。他力の信心を成れば、よしや口に名號を稱へずとも、其一念の所信の名號が行者に具はると云ふのである。南無の三心は願、阿彌陀佛の十念は行である。此行の中に大善大功徳のあらゆる行は備へられてある。願は信心、行は名號、信心具足する故に必ず往生することを得ると云ふ。

西山のやうに、行を佛の方にのみつけず、鎮西のやうに、行を行者の自力の行とせず、信心定るときに、往生の行は吾等に與へられるとせられる所に、他力宗教の眞面目があると思ふ。

第四科 『般舟讚』の文

又云敬白一切往生知識等大須慚愧釋迦如來實是慈悲父母種種方便發起

我等無上信心

【讀方】 またいはく、うやまひて一切往生の知識等にまうさく、大にすべからく慚愧すべし。釋迦如來はまことにこれ慈悲の父母なり。種々の方便をもて、われらが無上の信心を發起せしめたまへりと。已上

【文科】 『般舟讚』の文によりて彌陀釋迦二尊の善巧方便を示し給ふ。

【講義】 同じき善導大師の『般舟讚』には左の如くいうてある。私は茲にうやうやくすべて淨土往生を願ふ知己友達の方々に白す。私共は大に御禮を申さねばならぬ。釋迦如來は、實に大慈大悲の父母に在して、これまでいろいろの御方便をして下されて、私共にこの上ない他力の信心を頂かして下されたのである。

第五科 『往生禮讚』の文

貞元新定釋教目錄卷第十一云集諸經禮懺儀下上大唐西崇福寺沙門智昇撰也准貞元



十五年十月二十三日勅勘編入云云懺儀上卷智昇依諸經造懺儀中依觀經引善導禮懺日中時禮下卷者比丘善導集記云云依彼懺儀鈔要文云二者深心卽是眞實信心信知自身是具足煩惱凡夫善根薄少流轉三界不出火宅今信知彌陀本弘誓願及稱名號下至十聲一聲等定得往生及至一念無有疑心故名深心至其有得聞彼彌陀佛名號歡喜至一念皆當得生彼

【讀方】貞元の『新定釋教目錄』の卷第十一には、集諸經禮懺儀上下 大唐西崇福寺の沙門智昇の撰なり。貞元十五年十月二十三日勅にならずらへて、勘編して入ると云々。懺儀の上卷は、智昇、諸經によりて懺儀をつくるなかに、觀經によりて善導の禮懺の日中の時の禮をひけり。下卷は比丘善導の集記と云々。かの懺儀によりて要文を鈔してはいはく、二に深心、すなはちこれ眞實の信心なり。自身はこれ煩惱を具足せる凡夫、善根薄少にして三界に流轉して、火宅をいでずと信知す。いま彌陀の本弘誓願は名號を稱すること、しも十聲一聲等にいたるに及ぶまで、さだめて往生をうと信知して、一念に至るに及ぶまで、疑心あることなし。かるがゆゑに深心となづく。乃至それかの彌陀佛の名號を聞くことを得ることありて、歡喜して一念を至せば、みなまさに彼に生ずることをうべし。抄出

【字解】一 貞元新定釋教目錄 三十卷。唐の德宗の貞元十六年（西曆八〇〇年）沙門圓照勅を奉じて撰す。譯經者百八十七人、譯出の經典二千四百四十七部、七千三百九十九卷を録す。後漢明帝永平十年（西曆六七年）より此年まで七百三十四年間の譯經目錄である。

二 智昇 西京崇福寺に住し、開元十八年（西曆七三〇年）、『開元釋教錄』三十卷、『續大唐內典錄』一卷等を撰す。『集諸經禮懺儀』も此年の撰なり。

【文料】『禮懺儀』所出の文と、深心、一心の文とをあげず。

【講義】 普通にいふ「貞元錄」即ち唐の德宗皇帝の貞元年中に新たに出來た『釋教目錄』の第十一卷に、『集諸經禮懺儀』上下二卷は、大唐の西崇福寺の沙門智昇の撰出にかかるものであるが、貞元十五年十月二十三日の天子の勅命に依つて大藏經中に編み込まれたと記してある。この『集諸經禮懺儀』の上卷は智昇法師自ら、いろいろの經典に依つて選出せられたものであるが、その中、『觀經』に依つて作られた部分は、全く、善導大師の『往生禮讚』の日中の偈文である。また下卷は丸々善導大師の記し給うた『往生禮讚』である。今茲で彼の『集諸經禮懺儀』に依つて『往生禮讚』の肝要の文をえらび出さう。

二に深心。深心といふは眞實信心のことで、その内容をいへば、自身はあらゆる煩惱を具足へて居る凡夫で、善根は至つてすくなく、三界の苦みの巻を流轉つて、どうしても自分の力では、焰に圍まれてゐるやうな迷ひの世界を解脱することは出來ないと信知し、同時に十聲若しくは、一聲の名號を稱ふるものを屹度、極樂へ迎へると仰せられる彌陀の本願を信知することである。かやうに信じて、一念も疑ふ心のないのを、深心と名づけるのである。乃至

かの阿彌陀如來の名號の御謂れをきき開いて、大に歡喜び、一念の信心を得れば、皆、極樂淨土に往生するところが出來る。

【餘義】 一、善導大師の『往生禮讚』の文を引用せらるるに、聖人は經錄によつたことを述べられた。蓋し出處の精確なることを示さんがためであらう。

『禮讚』の三心釋中、第一、第三は自力を明かしたものであると云ふので、「化卷」第九の初めに引用せられ、ここには、第二の深心釋のみを引かれた。初めに「深心は即ちこれ眞實信心なり」と云ひ、次に二種深心を擧ぐ。



そして終りに、「一念に至るに及ぶまで、疑心あることなし。故に深心と名づく。」と結ばれた。これ等の文によりて見れば、我聖人の此文を引用せられた御思召は、機法二種深心は、眞實信心であると云ふことを示されたことは勿論、上に引用した三心は行者歸命の一心、即ち眞實信心であることを證せられたことと思ふ。  
此文は「行卷」にも引用せられたが、『六要鈔』の指導の如く、あの時は行に就いて引き、今は信の證文として引用せらる。

第三項 源信和尚の文

第一科 菩提心の文

往生要集云、入法界品言、譬如有人得不可壞藥、一切怨敵不得其便、菩薩摩訶薩亦復如是、得菩提心不可壞法藥、一切煩惱諸魔怨敵所不能壞。譬如有人得住水寶珠、瓔珞其身入深水中而不沒溺、得菩提心住水寶珠、入生死海而不沈沒。譬如金剛於百千劫處於水中而不爛壞、亦無異變、菩提之心亦復如是、於無量劫處生死中諸煩惱業不能斷滅、亦無損減。

【讀方】『往生要集』にははく、入法界品にははく、たとへば人ありて不可壞のくすりを得れば、一切の怨敵その便りをえざるがごとし。菩薩摩訶薩もまたまたかくのごとし。菩提心不可壞の法藥をうれば、一切の煩惱諸魔、怨敵、壞すること能はざるところなり。たとへば人ありて住水寶珠をえて、その身に瓔珞とすれば、ふかき水中にいらしてしかも没溺せざる

がごとし。菩提心の住水寶珠をうれば、生死海にいらしてしかも沈没せず。たとへば金剛は百千劫において水中に處して、しかも爛壞せず、また異變なきがごとし。菩提の心もまたまたかくのごとし。無量劫において、生死のなかのあらゆる煩惱業に處するに斷滅することあたはず、また損減なしと。已上

【字解】一 菩薩摩訶薩 梵語ボードヒサツトワ、マハーサツトワ (Bodhisattva mahasattva) 覺有情、大有情と譯す。大心衆生、大士、開士等同じ。大菩提心を發して六度の行を修める大乘の行者を指す。菩薩又は摩訶薩の何れの一つにても意味を成すけれども、梵文には此の二語を熟字のやうにして一つの意味に用ひてゐる。

【文科】『往生要集』によりて菩提心を釋し給ふ。

【講義】源信僧都の『往生要集』上末には、左の如くいうてある。『華嚴經』の「入法界品」に曰く、譬を擧げていうて見ると、もし茲に一人の人があつて「打ち壞ることの出来ない藥」といふものを持つて居れば、どんな恐ろしい強い怨敵でも、その人を攻め滅す便りを得ないやうに、菩薩が、菩提心といふ攻め滅すことの出来ない法の藥を持つて居れば、どんな煩惱でも、惡魔でも、障をする事は出来ぬ。又、住水寶珠といふ珠を、瓔珞にして身體に着けて置けば、この珠の威徳で、いかなる深い水の中へ入つても溺れるといふことはないやうに、菩薩も菩提心といふ住水寶珠を持つて居れば、生死の海に入つても生死の海に沈むといふやうなことはない。又、金剛といふものは百千劫の長い間、水の中につけて置いても、爛壞るとか變質するとかいふことはないものであるが、菩提心も亦丁度その如く、菩薩が無量劫の永の間、生死海中に沈んで、衆生と同じ様に煩惱を起し、惡業を作り給うても、そのために、なくなつたり、損うたりすることはないのである。この菩提心とは云ふまでもなく他力信心である。

【餘義】一、『往生要集』の中より、特に此文を此處に引用せられたのは、他力の信心は大菩提心であること



を證するためである。菩提心は譯して道心といふ。證りを獲んとする心である。自力修行の人々の唯一の旗幟である。従つて諸經論には、此菩提心の徳を讚へて蘊す所はない。然るに我聖人は此の大菩提心をもつて他力廻向の信心にほかならぬと仰せられたのである。

誠に如來廻向の信心は廣大である。一切の煩惱に障害せられず、惡魔に亂される憂へはない。此意味に於て『華嚴經』に説かれたる此菩提心といふも、此信心のことであることが知られる。『和讃』に、

信心即ち一心なり 一心即ち金剛心

金剛心は菩提心 此心すなはち他力なり。

吾等凡夫の起す所の他力の信心が、あの天親菩薩の所謂一心であることは、曇鸞大師の『論註』の教へる所である。そして其の一心が金剛心であることは、善導大師が、深心釋に仰せられた所で、その金剛心が菩提心であることは、此處に源信和尚の示さるる所である。そしてこの菩提心は他力廻向の心であることは申すまでもない。此文を普通に解すれば自力の菩提心となるが、今は他力の菩提心の徳をいろいろの譬に寄せてあらはされたのである。

第二科 攝取利益の文

又云我亦在彼攝取之中煩惱障眼雖不能見 大悲無倦常照我身

【讀方】 又いはく、我また彼の攝取のなかにあれども、煩惱障を障て見たてまつること能はずといへども、大悲倦きことなくして、常にわが身をてらしたまふと。以上

【文釋】 『法苑珠林』の文たる大慈大悲の文をあげらる。

【講義】 私も亦、彼の阿彌陀如來の攝取の光明の中につつまれて居る身の上である。私の肉眼は煩惱妄念のために邪魔をせられて、面り、如來を見奉ることは出来ないけれども、如來の大悲は倦みつかれ給ふことなく、いつでも、私を照し護り給ふのである。

【餘義】 一、菩提心の文のつぎに攝取の文を出された。攝取不捨の故に金剛の信心であるとは我聖人の深く味はれ、又強く説かれた所である。『唯信鈔文意』十五丁に、

攝取の光とまうすは、無礙光佛の御ころのうちにをさめとりたまふゆゑに、金剛の信心とまをすなり。

『末燈鈔』の各所にもこれと同意味に仰せられてある。八丁には、

この信心の人を眞の佛弟子といへり。この人を正念に住する人とす。この人は、攝取してすてたまはざれば、金剛心を得たる人とまをすなり。

十八丁には殊に明瞭に、

眞實信心のさだまると申すも、金剛の信心のさだまると申すも、攝取不捨のゆゑにまをすなり。

と申され、其他二十九丁「攝取不捨事」と題して、眞佛房に宛られた文、並びに、四十丁隨信房に宛られた文にも攝取不捨の故に金剛心といふと仰せられた。『正信偈』にも亦、此の文を出されてある。

吾等の信心が金剛心であるといふことは如何にして知ることが出来るかと云へば、我心の動亂によりて知られる。心の動亂とは、如來に背き、如來を忘れ、如來に離れんとするのである。この心が強ければ強い程、そこを自覺せしめられて、恰も釘打たれたやうに、逃げることの出来ないことを感ずるのである。この離れようとすればする程、離れることの出来ない味ひが攝取不捨である。誠に攝取不捨とは、逃げる者をおさへて逃さぬ力であ



る。その力に押へられた所が金剛堅固である。そして夫を自覺した所が金剛の信心である。我が聖人は深くこの點を味はれて、源信和尚のこの文を喜ばれたのである。

第四節 總結

爾者若行若信無有<sup>レ</sup>一事<sup>ト</sup>非阿彌陀如來清淨願心之所<sup>ニ</sup>迴向成就<sup>シテ</sup>非無<sup>レ</sup>因他<sup>ト</sup>因有<sup>レ</sup>也<sup>ト</sup>可<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>

【讀方】 しかれば、もしては行、もしては信、一事として阿彌陀如來の清淨願心の迴向成就したまふところに非ざるることあることなし。因なくして他の因の有るにはあらざるなりとしるべし。

【文科】 上來略顯、引文を了へたから、ここに總結の文を置きたまふ。即ち大信の所明はこれにて一應終りを告げるからである。

【講義】 扱て上來の引文に依つて、明白に知られた通り、南無阿彌陀佛の不行も他力の信心も、一つとして、阿彌陀如來の無漏清淨の御心から起して下された本願に依らぬものはない。これも衆生のため、あれも衆生のため、如來の方で迴向して成就して下されたのである。それであるから、私共衆生の淨土に往生することの出来るのは、阿彌陀如來の清淨願心を因とするので、因なくして淨土に參るのではない。又阿彌陀如來は自分の方で御成就なし下された行信をすべて、衆生へ迴向して下されるから、私共衆生は、丸々貰ひ受けた行信を以つて、淨土へ參らして貰ふので、他の因で淨土へ生れるのではない。

【餘義】 一、上來證論の引文が悉つたから、簡潔に結語を爲された。即ちこれまで廣く引文を以つて示した

所は、要するに、信の内容を闡明すのほかはない。そして本願の行は兼より信と離れたものでないから、ここに「若は行、若は信」悉く彌陀願力の迴向し給ふ所であると結ばれた。

そして「若行若信無有一事」等の文勢は、「論註」下三十二丁、「若は因、若は果、一事として、利他に能はざることあることなし」に依り、「清淨願心」等は、「論註」下廿三丁「此三種の莊嚴成就は、本四十八願等の清淨願心の莊嚴せる所なるに由て、因淨なるが故に果淨なり。因なくして他の因あるには非ずと知るべしとなり」を巧みに轉用せられたのである。「論註」に於て、無因、他因を排斥せられたのは、當時問題になつてゐた邪執を選ばれたのである、無因と云ふは、一切諸法は因なくして自然に生ずるものであると云ふ自然外道の説である。

他因といふは、一切諸法は皆な自在天より生ずるといふ自在天外道の説をいふ。「三論玄義」に四執を擧列してある中の、無因有果と邪因邪果を指す。この二つの見解は最も邪の見解である。自然生の見解は、因果觀念を破壊し、放逸無慚の畜類に人を陥れ、自在天等のむら氣な意志を萬物の起因とする見解は、人をして野蠻極る偶像崇拜に導き、共に深遠微妙なる靈界と遠く離れしめる。覺師はこれ等の邪見を斥け、淨土の莊嚴は、如來の願心より莊嚴する所であるから、これ等の無因他因でない、正しい因果の道理より成就したものであると云はれたのである。然るに親鸞聖人は、巧に此の文を轉用して、他力信仰の要義を一言にして表はされた。

即ち他力信仰に關する論理的難點は、大凡二つである。一は往生の因たる行信が、若しも自力を交へないとすれば、夫は其人に取りては無因ではないか。他の一は、若しも如來迴向の行信が因であると云ふならば、夫は他因となるではないかと云ふのである。聖人は信仰の上に加へらるる此の論理的難點に對して、無因他因を選び棄られたのである。

その模様はどうかと云へば、往生の因たる行信は、如來の迴向せられた所であると云ふ、只夫だけである。吾



等に如來廻向の行信があるから無因でない。そして既に廻向せられて吾等の功德となつてゐるから他因でない。正しい因果の道理に従つて往生することが出来ること云ふのである。斯の如く此結釋は、極めて簡潔であるが、信仰の微細なる正邪のもつれを巧みに切り開いてをる。あの自力の諸行に著する鎮西の如きは、其實、虚假の善を握つてゐるものであるから無因である。又は佛體を往生の行と談じて吾等の機の上に往生の因を認めない西山の説は、他因と云はねばならぬ。この兩端を避けて、廻向の信行を獲得するのが我が聖人の教へる所である。

### 第四章 三心一心問答

【大意】 これより進んで問答體にて、三心一心の關係を説示せらる。第一節は問ひである。第二節の答へが四項に分かれ、第一項は略して答へ、第二項には字訓釋を施し、第三項には三心の字訓を一々附會配當し、第四項には結釋したまふ。

#### 第一節 問

問如來本願已發、至心信樂欲生誓、何以故論主言、一心也。

【讀方】 問ふ、如來の本願すでに至心、信樂、欲生の誓をおこしたまへり。何をもての故に論主一心といふや。

【文科】 第一番問答の問ひである。

【講義】 問うて曰く、阿彌陀如來の第十八願には、至心信樂欲生の三信が立ててある。然るに天親菩薩は三信と曰はす、一心と宜ふはいかなる所以があらうか。

#### 第二節 答

##### 第一項 略 答

答、愚鈍衆生解了爲、令易彌陀如來雖發、三心、涅槃、眞因、唯以信心、是故論主合、三爲一歟。

【讀方】 答ふ、愚鈍の衆生をして解了し易からしめんがために。彌陀如來三心を發したまふといへども、涅槃の眞因はただ信心をもてす。このゆゑに論主三を合して一とせる歟。

【文科】 略して三心を一心とする所以を述べたまふ。

【講義】 答へて曰く、一口にいへば愚かな衆生の合點の行き易いためにさうなされたのである。阿彌陀如來は本願に於ては三心と分けて御誓ひなされてあるけれども、涅槃の妙果を得る眞實の因は、ただ信心一つである。それであるから、天親菩薩は三信を合して、手短かに一心となされたのであらう。

【餘義】 一、三一問答は「信卷」の至要である。上來引用せられた三經師祖の論釋を畫龍とすれば、三一問答はその點睛と云はねばならぬ。故に聖人は當卷別序に於て「諸佛如來の眞説に信順して論家釋家の宗義を披闡す。廣く三經の光澤を蒙りて、特に一心の華文を開く。且く疑問を至して遂に明證を出す。」と仰せられた。此の「且く疑問を至す」といふは、今の三一問答である。そして「信卷」一部の所明の順序は、全くこの序文の通りである。「信卷」には二番の問答であるが、『略本』は三問答を掲げてをる。『略本』の第一の問答は、「信卷」の第一問答と等しい。そして「信卷」の第二問答は、『略本』には略してあるが、其三心釋の内容から云へば、單に問答



だけを略しただけで、實質に於ては「信卷」と異なる所はない。そして「略本」の後の二番の問答は、「化卷」に廣説せられてある。

當卷二番問答の第一は、第十八の本願の上に明に三心と誓うてあるのに、何故に天親論主は一心と仰せられたのであるか、と云ふのである。そして此答へは、やがて今まで明瞭に發表せられなかつた聖人の眞意を露出すのである。上の引文の次第を見ても、聖人は明に論主の一心歸命に隨喜してをられたことが知れるのである。最初に第十八願を引き、つぎに「論註」の三不三信を引いて覺師の口を籍りて「この故に論主建に我一心と言まへり」と云ひ、つぎに善導大師の三心釋を引いて、深心一心を結文としてをられる。凡てが引文であつて、御自身の直接の御言葉はないけれども、之を一連として讀み來れば、聖人の眞精神は、一句一言の端々にも生動いて、濇い血汐が波打つてゐる。この意味に於て聖人は唯、師祖の言葉を借りて自身の生命を發表せられたのである。否寧ろ師祖の眞髓を我賜として、本願の旨趣を説示されたのである。そして其の主要の點はこの三心一心の關係であつた。今や引文は一應終りを告げたから、ここに覆はれたる幕を引き拂ひて、堂々と根本問題の解決を發表せられたのが、此の三一問答である。

二、答へは甚だ簡明である。如來は三心と仰せられたが、愚鈍の衆生をして、容易く會得せしめんがために、論主がそれを一心とせられたと云ふのである。夫も論主が化他のために勝手にせられたのではない。涅槃の眞因は唯信心一つであるからであるといふのである。この一句が答の主眼である。そして「信卷」の主要である。そして同時に聖人の信仰そのものである。

願ふに、聖人のこの信念は、決して經典に對する單なる解釋ではなくして、御自身の深い信仰經驗と、師祖の信念を咀嚼せられた最後に到着せられた立場であると思ふ。既に上にも長々と善導大師の三心釋を引かれて、吾等の心には、至誠心も、深心も、廻向發願心もない、唯濁惡の念ばかりであると仰せられたが、今本願の三心は「觀經」の三心と根柢に於て全く等しいものであるから、如來が三心を以つて往生を願へと仰せられても、其三心は吾等の起すことの出来ないことは明である。然らば如何にして其三心を發すか。これが至要の問題である。我が聖人は最後の一道として、天親菩薩の一心歸命に依られた。

論主の一心とけるをば 曇鸞大師のみことには

煩惱成就のわれらが 他力の信とのべたまふ。

ここに至つて吾等の起さねばならぬ本願の三心は、此煩惱具足の吾等の起す他力信心のほかはない。即ち涅槃の眞因は唯、信心一つであると云ふのである。「銘文」初めに、

信樂といふは、如來の本願眞實にましますを、ふたごころなくふかく信じて、うたがはざれば、信樂とまふすなり。

されど此二心なく信する心は、凡夫の起す所でないこと云ふことを知らせるために、其つぎの文に、  
この至心信樂は、すなはち十方の衆生をして、わが眞實なる誓願を信樂すべしと、すすめたまへる御ちかひの至心信樂なり。凡夫自力のころにはあらず。

如來の誓願が我等の胸に生れて、二心なく信する心となる。夫が信心である、涅槃の眞因である。我等愚鈍の身はこれよりほかはない。そしてこれよりほかに行くべき道がないと云ふ押し詰つた意味があるのである。

斯様に深い根柢の上に立ちながらも、謙虚なる聖人は、尙ほ「論主、三を合して一となせる歎」と、態と斷定を避けられた。かくて他の方面より、更に態度を變へて、上の説をあかさんと努力せられたのがつぎの字訓釋である。



第二項 字訓

私闕三心字訓三即合一其意何者言至心者至者即是眞也實也誠也心者即是種也實也言信樂者信者即是眞也實也誠也滿也極也成也用也重也審也驗也宣也忠也樂者即是欲也願也愛也悅也歡也喜也慶也言欲生者欲者即是願也樂也覺也知也生者即是成也作也爲也興也

【讀方】私に三心の字訓を闕ふに、三すなはち一なるべし。その意いかんとならば、至心といふは、至といふは即ちこれ眞なり、實なり、誠なり。心といふは即ちこれ種なり、實なり。信樂といふは、信といふは即ちこれ眞なり、實なり、誠なり。滿なり、極なり、成なり、用なり、重なり、審なり、驗なり、宣なり、忠なり。樂といふは即ちこれ欲なり、願なり、愛なり、悦なり、歡なり、喜なり、賀なり、慶なり。欲生といふは、欲といふは即ちこれ願なり、樂なり、覺なり、知なり。生といふは即ちこれ成なり、作なり、爲なり、興なり。

【文科】三心の一々に字訓を施したまふ一段である。

【講義】それで今茲に、この思召を三心の字訓から伺うて見ようと思ふのであるが、私如きものが烏滯がまし次第ではあるけれども、ひそかに三心の字訓を窺うて見ると、この三心を一心に合した理由が明かになるのである。どういふ所以かといふに、先づ至心の至には、眞といふ意味がある。従つて實、誠といふ意味も出て来る。それから心には種といふ意味がある。種は實であるから、又實といふ意味もあることになる。

つぎに信樂の信には、眞、實、誠、滿、極、成、用、重、審、驗、宣、忠の意味がある。樂の字には、欲、願、愛、悅、歡、喜、賀、慶の意味がある。

つぎに欲生の欲には、願、樂、覺、知の意味がある。生には成、作（この作の字は則羅の反切サ、則落の反切サク、藏落の反切サクで、爲、起、行、始、役、生の意味がある）、爲、興の意味がある。

【餘義】一、「行卷」より以來、聖人は屢々この字訓釋を須むられた。されど三心の字訓釋は最も詳細を極めてゐる。聖人は何故に精神上の問題を解決するに、區々たる文字の穿鑿をこととせられたのであるか。吾等は字訓釋に行く前に、この點を考へて見ねばならぬ。

西派の東陽閣圓月師は其著『本典仰信錄』に「俗典淺近の字訓に寄せて、以て三心即一心の深義をあらはす也」と云はれた。所謂寄顯の説であると云ふ。字訓と云ふ動かすべからざる基礎に立ちて、三信即一の義を論定し證明すると云ふ意味ではなくして、只三信の一々の文字に親密の意味ある文字を集めて、夫によりて他力信心の内容をふくよかに發表せんがためである。即ち文字其ものには生命がないが、聖人の信仰の息を吹き入れることによりて、力ある生命あるものとなるのである。云はば大理石には生命はないけれども、藝術家が自己の藝術心を表現するに都合よき材料であるから、夫を須むて美人像を彫刻すれば、その生命なき大理石は藝術家の魂が宿るために、或意味に於て活きた人間よりも、吾等の心に意義と感銘を興へるやうなものである。此場合、大理石は美人像に對して何も論理上の基礎をなしてはならぬ。唯その性質が肌理細なために、藝術家の美的思想を表はすに便宜を興へるだけである。聖人の字訓は之と酷似してゐるやうに思はれる。漢字といふ細な意義を有し、近似つた多くの文字あるを幸として、聖人は複雑な細な、深い信仰上の味を、之に寄せて表現せられたのであると思ふ。そこには論理や思辨を主とした證明はないけれども、眼前に大理石の美人像を見るやうな感興に撲れざるを